

新編
歌
史

一名通俗源氏物語

卷九



新編紫史卷九

松風閣主人 譯

第四十八帖 (宇治四) 早蕨

此帖は薰君二十五歳の春なり
藪し別かれば古今集に日の光藪し分かれば石の上ふりにし里に花は咲きけりとあり

宇治の中姫君は、姉君大姫君に別れ奉りてより、藪し別かねば、春の光を見給ふにつけても、いかでかく存在にけむ月日ならむ、と心に夢のやうにばかり覺え給ふ、往き來ふ時節々に從ひ、花鳥の色をも音をも、大君と同じ心に起臥見つゝ、果敢なき言の葉をも、上句下句を取りて言ひ交し、心細き世の憂さも、辛苦さも、打語らひ合せ申し、にこそ、互に慰む方もありしか、今は面白き事哀なる節をも、聞き知る人もなければ、また言ひ合せむ方もなきまゝに、萬事搔き昏らし、心一つを碎きて、父宮の

○早蕨

阿闍梨献
蕨土筆於中
君一

おはしまさずなりにし悲しさよりも、姉君のおはさずなりにし方、や、打勝りて戀ひしく詫びしきに、如何にせむと明け暮るも知らず思ひ惑はれ給へど、世に生き留るべき間は、限ある業なりければ、死なれぬも淺まし、彼の山の阿闍梨より、老女房の許まで文あり、

(阿文) 年改まりては、何事かおはしますらむ、御祈禱は撓みなく奉仕り候ふ、今は中姫君一所の御事をぞ、安からず念じ申さする、

など申して、蕨、土筆、面白き籠に入れて、

(又) 此品は、愚僧の、佛に供養じて候ふ初穂なり、
とて奉れり、手跡はいと悪しくて、歌は故意とがましく、引き放ちてぞ書きたる、

君にとて云々
○故八宮の御時の嘉例を忘れぬとて年を積み蕨を摘みといふをかけた

この春は云々
○父宮姉君もましまされば唯形見に見るばかりなりとてかたみは形見に籠むかけたり此歌やがて卷

(阿歌) 君にとて、數多の春を、つみしかば、常を忘れぬ、初

蕨なり、 姫君の御前に、讀み申さしめ給へ、

とあり、中、君はこの歌を見給ひて心に、阿闍梨は大事と思ひ廻して詠み出しつらむ、と、思せば、歌の意もいと可憐にて、彼の勾宮の、さやうにも等閑に思されぬなるめり、と、見ゆる言の葉を、愛甚く好ましげに、書き盡し給へる御文よりは、却て此上なく目留まりて、涙も翻るれば、老女房して返事書かせ給ふ、

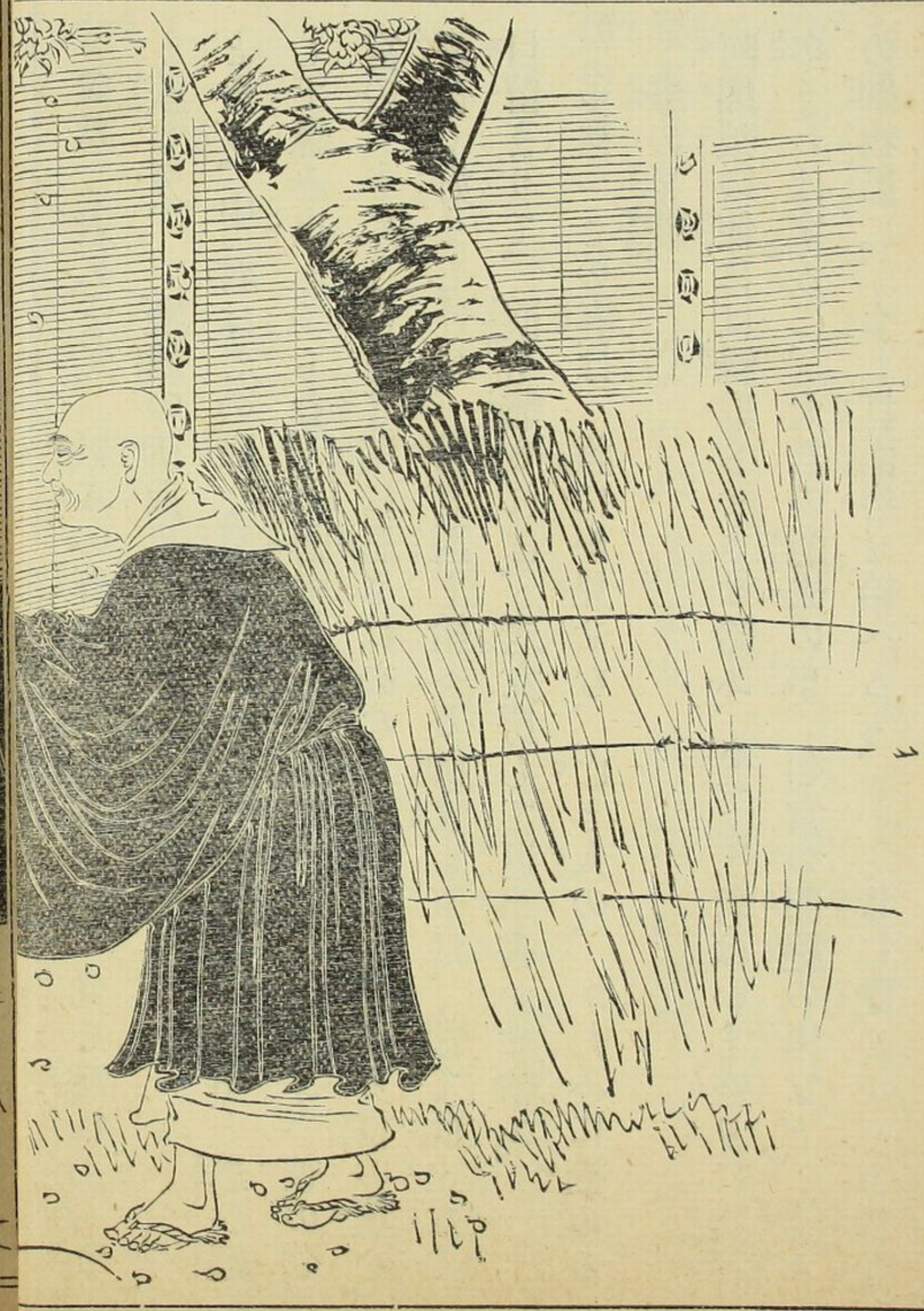
(中歌) この春は、誰にか見せむ、亡き人の、かたみに摘める、

峯の早蕨

阿闍梨の使には祿取らせさせ給ふ、さて中、君はいと盛りに艷容多くおはするに、大君の逝去の事、勾宮の間絶の事など、様々の御物思に、少し打面瘡せ給へるも、いと貴に艶めかしき様子

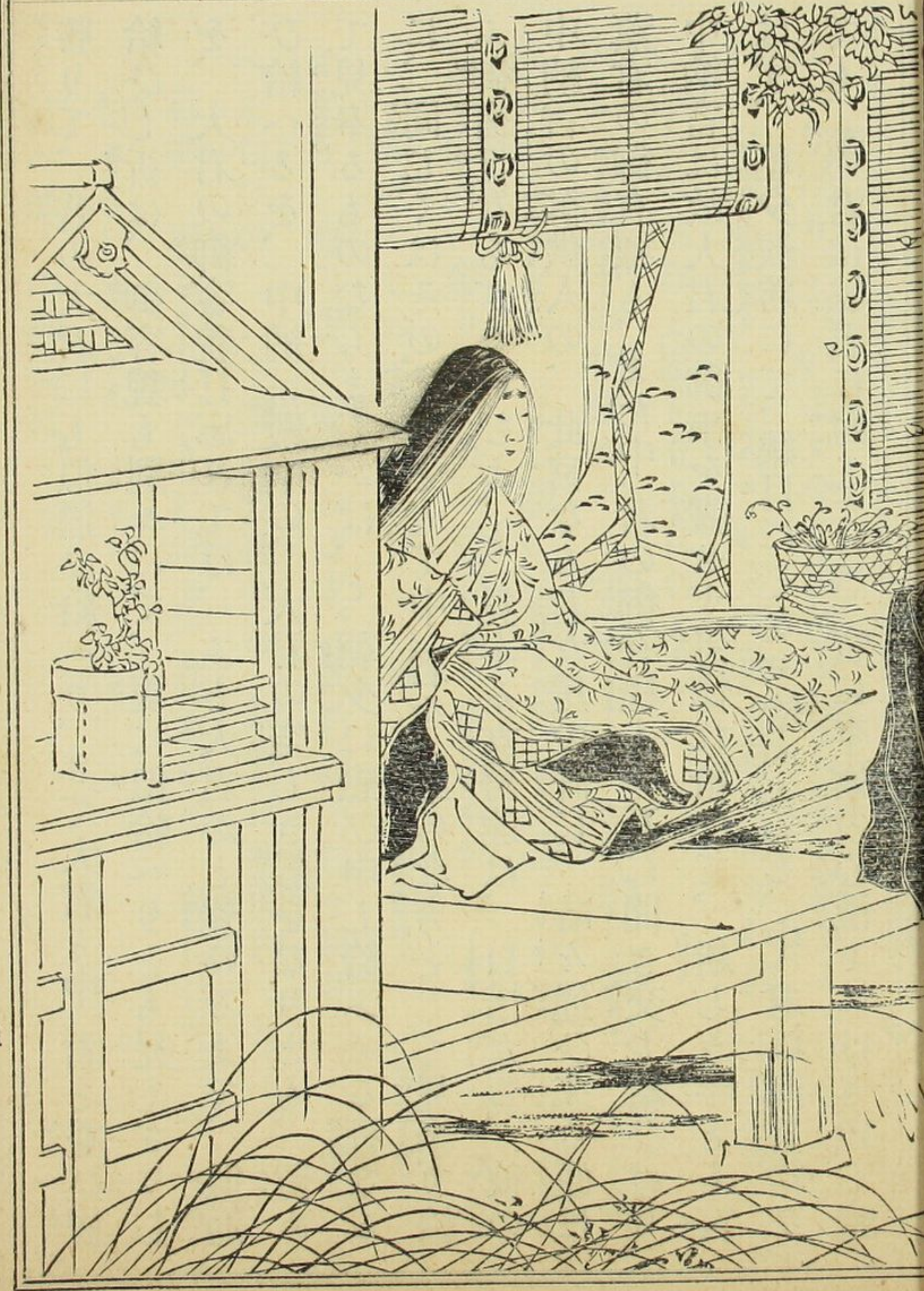
阿闍梨献早
蕨圖

阿闍梨
君にとて
あまたの
春をつみ
しかは常
を忘れぬ
初蕨なり



○早蕨

中の君
この春は
誰にかみ
せむなき
人の形見
につめる
峯の早蕨



○早蕨

の名となる

勝りて、昔の大君にも似通ひ給へり、さて大君と中君と並び居
 給ひし折は、御容貌も別々にて、更に似給へりとも見えざりし
 を、大君の御容貌打忘れては、ふと大君かと覺ゆるまで、似通
 ひ給へるを、中納言殿君、大君の空しき殻をなりとも、留め
 て見奉るものならましかば、と、朝夕に戀ひ申し給ふめる程なる
 に、同じくはその代りとして中君を、殿の北方として見奉り給
 ふ御宿世ならざりけむよ、と、見奉る女房達は、口惜がる、彼の
 中納言の御供人の、此宮なる若女房の許に、時々通ひ來る便に、
 薫君の御有様も、また中君の御有様も、互に聞き交し給ひけり、
 中納言は故大君の御事を盡せず思惚れ給ひて、新しき年とも言
 はず、朝夕涙勝にて、嫌目にぞなり給へる、と、中君は聞き給ひ
 ても、薫君は姉君に對しては、實に卒爾の心淺さにはものし給

内宴○正月
 中に禁中に
 て行はる親
 王公卿以下
 召されて詩
 文など作ら
 せらる
 薫君參句
 宮

はざりけり、と、いと、今ぞ哀情も深く思ひ知らる、句宮は宇
 治へおはしますことの、いと所狭く有り難ければ、中君をば京
 に渡し申さむと思し立ちにけり、
 内宴など禁中の物騒がしき頃過ぐして、中納言薫君、心に餘る
 故大君の事をも、また誰には語らはむと思し詫びて、句兵部卿、
 宮の御方に参り給へり、蕭條なる夕暮なれば、句宮打詠め給ひ
 て、端近くぞおはしましたける、箏の御琴搔鳴しつゝ、例の御心寄
 せなる、梅の香を愛ておはす、薫君は下枝を押折りて、参り給
 へる句ひの、いと艶に愛甚きを、句宮は折面白く思して、
 (句歌) 折る人の、心に通ふ、花なれや、色には出でず、下に
 句へる、
 と言へば、中納言は、

折る人の云
 々○君の心
 に通ふ梅花
 は表にあら
 はれず裏に
 句ふとて中

君の薫君に
怪しきぞと
疑ひて言へ
るなり
見る人に云
々々○さやう
にかこつけ
て言はるい
が煩はしけ
れば梅花は
注意して折
るべきなり
けりとなり

(薫歌) 見る人に、かごと寄せける、花の枝を、心してこそ、
折るべかりけれ、 煩はしく、

と戯れ交し給へり、匂宮と薫君とは、いと能き御交際なり、濃
細なる御物語どもになりては、匂宮は彼の宇治の山里の御事を
ぞ、先づは如何にと申し給ふ、薫君も過ぎにし大君の事の、飽
かず悲しきこと、その當時より今日まで思ひ絶えぬ由を、折々
につけて、哀にも面白くも、泣きみ笑ひみとかいふらむやうに
申し出で給ふに、匂宮は況して、あれ程色めかしく涙脆なる御
癖に、他人の御上にてさへ、袖も絞る程になりて、かひなくし
くぞ會釋ひ申し給ふめる、
空の景色もまた、實にぞ哀知り貌に霞渡れる、夜になりて烈し
く吹き出る風の景色、また冬めきていと寒げに、御燈臺も消え

闇はあやな
き○古今集
に春の夜の
闇はあやな
し梅の花色
こそ見えれ
香やは隠る
いとあり

つゝ、闇はあやなき不案内さなれど、互に聞き止し給ふべくも
あらず、盡きせぬ御物語を、え霽し遣り給はで、夜も甚く更け
ぬ、世に例あり難かりける中納言と大君との交情を、匂宮は疑
ひて薫君に、
(匂) いで然りとも、いとさやうにばかりは、實事なきことあ
るまじ、

と疑心ありげに問ひ成し給ふぞ、宮のわりなき御心習慣なるめ
る、然りながらも宮は物に心得給ひて、中納言の歎かしき心の
中も推量りて、實事のなきことを明らむる程、思ふ心を引き佐
けて、且は慰め、また哀をも醒し、様々に語り給ふ、その御
様の美しきに、中納言は誘欺され奉りて、實に心に餘るまで思
ひ結ぼるゝ大君の事ども、少しづゝ語り申し給ふぞ、此上な

岩瀬の杜○
細流抄に戀
しくはきて
も見よかし
人づてにい
はせの杜の

く胸の隙開く心地し給ふ、宮も彼の中、君を、京近く渡し申して
むとする間の事ども、語らひ申し給ふを、中納言は、
（薫）それはいと嬉しき事にも候ふかな、中、君の御事は、吾が
媒介申し、ことなれば、大君の愛なく吾が過失とぞ思ひ給は
る、飽かぬ昔の餘波を、中、君を差置きては、また外に尋ぬ
べき方も候はねば、中、君は、大方には何事につけても、心寄
せ申すべき人とぞ思ひ候ふを、もし君にはその間を疑ひ給ひ
て、便なくや思召さるべき、
とて、曩に彼の大君が、我と別人とな思ひ分きそ、とて、中、君を
譲り給ひし心掟をも、少しは語り申し給へど、岩瀬の杜の呼小
鳥めきたりし、中、君との關係の事は残したりけり、さて中納言
は心の中には、かく慰め難き大君の形見にも、中、君をば實に我

呼小鳥かも
とあり

宇治人々爲
轉京準備
伏見を○細
流抄にいさ
こゝに吾が
世は經なむ

物としてこそ、かやうにも扱ひ申すべかりけれ、とて、後悔しき
こと、漸々勝り行けど、今はかひなきもの故に、平生にかやう
にばかり思はゞ、中、君に對してあるまじき心もこそ出で來れ、さ
ては匂、宮に對しては言ふも更なり、誰が爲にも味氣なく、愚痴
がましからむ、と、思ひ離る、それにつけても、中、君の京なる匂
宮の御方へおはしまさむに、眞實に此事思ひ後見む方は、我を
差置きては、また誰かはと思せば、中、君の御渡りの事ども用意
せさせ給ふ、
宇治の宮にても、美き若女房、女童など求めて、女房達心適き
貌に、御渡りの事、急ぎ思ひたれど、中、君は、今はとてこの伏
見を荒らし果てむも、いみじく心細ければ、歎かれ給ふこと盡
せぬを、然りとてまた強めて心強く、宇治に絶え籠りても猛

菅原や伏見の里のあれまくもをしとあり宇治を伏見にかへたるなり

峯の霞の○古今集に春霞たつを見捨て、行く雁は花なき里に住みや習へるとあり
母親云々○中君の母君は中君誕生の折に薨せ給へること橋姫帖にあ

かるまじく、かくては匂宮との浅からぬ中の契も、断え果てぬべき御住居を、匂宮の御方よりは、如何に思し給ふぞ、とはかり恨み申し給ふも、少しは道理なれば、中君はいかゞすべからむ、と、思ひ亂れ給へり、さて京への御移徙は、二月の朔日頃とあれば、程近くなるまゝに、中君は、花の梢どもの気色はむも、盛りゆかしく、峯の霞の立つを見捨てむことも、己が常世にてさへあらぬ旅寐にて、もしも末遂げぬことなどあらましかば、いかに不都合く人笑なることもこそあれ、など萬事に慎ましく、心一つに明かし暮らし給ふ、故大君の御服も、限りあることなれば、脱ぎ捨て給ふに、解除も浅き心地ぞする、母親一所は見奉らざりしかば、戀しきことも覺えず、されば母君の御代りにも、姉君の此度の喪服を、深く染めむと、心には思し言へど、兄弟

り

はかなしや云々○大君の事を昨日今日と思ひしにはや中君の除服にもなりけるよとて霞の衣は服色の事に花の紐とくは除服の事にいへり

の喪は、さすがに母親のやうにすべき理由もなき業なれば、飽かず悲しきこと限なし、中納言よりは、除服の稜に、中君の川邊に出で給はむ料に、御車、御前駈の人々、または陰陽博士など奉り給へり、

(薰歌) はかなしや、霞の衣、たちしまに、花の紐とく、折も來にけり、

實に中君の除服して着替へ給ふべき、色々の物、いと清らにて奉り給へり、また京渡りの間の、纏頭物どもなど、仰山しからぬものながら、品々に委細に思し遣りつゝ、御贈物いと多かり、かく中納言の、折につけては、懇切に忘れぬ様なる、御心寄せの世に有り難く、兄弟などいふとも、いとかくまではえおはせぬ業ぞ、など、女房どもは申し知らず、鮮美ならぬ老女房どもの

薫君詣三宇
治
垣間見せし
障子の穴○

心には、中納言のかゝる物など贈り給へる方を、心に染めて有り難く申し、若き女房達は、時々も見奉り馴れて、今はと別様になり給はむことを、中君の物寂しく、いかに戀しく覺え給はむ、と申し合へり、中納言は、中君京への御渡り、いよく明日との事につき、その前日のまた早朝に、宇治へおはしたり、例の客座敷の方におはするにつけても、中納言は心に、かくて大君おはせば、今は漸々物馴れて、我こそは匂宮よりも先に、京へ移しけむものを、など、大君の此世にありし様、言ひし心ばえを思ひ出でつゝ、大君のさすがに我をば懸け離れ、事の外になどは不待遇め給はざりしを、我が心もて怪しくも、大様に隔だたりにしがな、と、胸痛く思ひ續けられ給ふ、彼の以前に、中君をば垣間見せし障子の穴も思ひ出らるれば、差寄りて見給ふに、

此事椎本帖
あり

この中をば格子下し籠めたれば、中君の見え給はぬぞいとかなしき、簾内にも女房達、大君の事を思ひ出で申しつゝ、打潜み合へり、中君は況して催さるゝ御涙の川に、明日の渡りも覺え給はず、茫然しげにて詠め臥し給へるに、中納言は人傳にて、
(薫) 月頃の積りも、何處となけれど、悵鬱く思ひ候はるゝを、片端も明らめ申させて、慰め候はゞや、例のやうに不都合く、な差放たせ給ひそ、かく外様に候ふては、いとゝあらぬ世の心地し候ふ、
と申し給へれば、中君は、
(中) 不都合と思はれ奉らむとしも思はねど、いざや心地も例のやうにも覺えず、搔き亂りつゝ、いとゝ確乎しからぬ僻言もや申さむ、と、慎ましくてぞ、親しくも申さぬ、

とて心苦しげに思したれど、いと御氣の毒など女房達此人彼人申して、中の障子の口にて、中君は中納言に對面し給へり、中納言はいと心耻かしげに艶めきて、また此度は壯び勝りにけり、と目も驚くまで艶容多く、人にも似ぬ用意など、あな愛甚の人やとばかり見え給へるを、中君は面影去らぬ大君の御事をさへ、思ひ出で申し給ふに、いと哀に見奉り給ふ、中納言は、
 (薰) 盡きせぬ大君の御物語なども、今日は御祝の折なれば、言忌みすべくや候はむ、
 など言ひ中止つゝ、

(又) 君の渡らせ給ふべき二條院は、近頃造り出でたる三條宮に近く、此間過ぐして、それへ移住ひ候ふべければ、夜中曉と世俗に言ひ候ふめるやうに、何事の折にも疎からず思し言

はせば、我身世に候はむ限りは、申させ承りて、過ぐさまほしくぞ候ふを、君にはいかゞは思召すらむ、人の心様々に候ふ世なれば、我心には随分と思ふことも、先方にはさほどに思はぬことも候へば、愛なくやなど、一方にもえこそ思ひ候はね、

と申し給へば、中君は、

(中) 宿をば離れじと、思ふ心深く候ふを、京にては近くなど言はするにつけても、いと嬉しく、萬事に思ひ亂れ候ふて、申させ遣るべき方もなくぞ候ふ、

と所々言ひ消して、いみじく物哀と思ひ給へる氣容など、いと能く大君に似給へるを、中納言は心に、我が心から餘所の物に見成しつる、と、いと後悔しく思ひ給へれど、かひなければ、一

宿をば離れ
 じ○河海抄
 に今ぞ知る
 苦しきもの
 と人待たむ
 里をばかれ
 すとふべか
 りけりとあ
 り

春や昔の○
伊勢物語に
月やあらぬ
春や昔の春
ならぬ我身
ひとつは元
の身にして
とあり
橋なられと
○古今集に
五月待つ花
橋の香をか
げば昔の人
の袖の香ぞ
するとあり
見る人も云
々○我此宿

夜添臥せし、當夜の事、懸けても言はず、忘れにけるにやあらむ、と、見ゆるまで、分明に持て成し給へり、御前近き紅梅の、色も香も懐かしきに、鶯さへ見過ぐし難げに、打鳴きて渡るめれば、況して春や昔の、と、中君は此宮を離れなむに、心を惑はし給ふ、薫君と中君との御物語に、折哀なりかし、風のさと吹き入るゝに、花の香も、客人の御匂ひも、橋ならねど、昔思ひ出でらるゝ端なり、中君は心に、徒然の紛らはしにも、世の憂き慰めにも、故大君は心留めて、此花を玩弄び給ひしものを、など、心に餘り給へば、
(中歌) 見る人も、ありしに迷ふ、山里に、昔おぼゆる、花の香ぞする、
と言ふともなく微にて、絶えく、申したるを、中納言は懐かし

げに打誦し成して、

(薰歌) 袖觸れし、梅はかはらぬ、匂ひにて、根ごめうつらふ、宿や異なる、
とて堪へぬ涙を、様能く拭ひ隠して、言多くもあらず、

(薰) またも尙かやうにてぞ、何事も申させ寄るべき、

など申し置きて起ち給ひぬ、また中君の京へ御渡りにつけて、あるべき事ども、人々に言ひ置く、この宿守に、彼の髭勝の宿直男は伺候ふべければ、この邊の近き、中納言の御庄どもなどに、其事ども言ひ預けなどして、眞實なる事どもをまで定め置き給ふ、老女辨、御許ぞ、

(辨) かやうの御供にも思ひ懸けず、長き命いとつらく覚え候ふを、人も忌々しく思ふべければ、今は世にあるものとも、世

を立ち出る
につけても
心惑ふて大
君の事をも
思ひ出すと
なり
袖觸れし云
々○大君の
大切に爲給
ひし其方の
昔に變らぬ
様にて移り
給ふなれば
京の宿もこ
の宇治の里
も異なるこ
とやある同
し事と思せ
と慰め言へ
るなり根こ
めば根なが
ら移る意
辨御許爲
尼留宇治

薰君召見
辨尼

厭ふに延へて○河海抄に憎さのみ益田の池のねぬなはば厭ふにばふるものにぞありけるとあり

人に知られじ、

とて、形貌をも變へて、切下尼となりてけるを、中納言は強て

召出で、いと哀と見給ふ、例の昔物語など爲させ給ひて、

(薰) 此宮には、尙時々は参り來べきを、其方にはいと便なく

心細かるべきを、かくて留まり給はむは、いと可憐に嬉しか

るべきことにぞある、

など、えも言ひ遣らず泣き給ふ、辨は、

(辨) 厭ふに延へて、延び候ふ命のつらく、また如何にせよと

て、故大君には打捨てさせ給ひけむ、と、恨めしく、凡ての世

を思ひ沈むに、罪もいかに深く候はむ、

と心に思ひける事どもを、愁へ懸け申すも、頑固しけれど、中

納言はいと能く言ひ慰め給ふ、辨は甚く年更にたれど、昔清け

凡ての世を○河海抄に大方の我身ひとつの憂きからになべての世をも恨みつるかなとあり

なりける名残を、髪殺ぎ捨てたれば、額の程様變れるに、少し

若くなりて、然る方に閑麗なり、中納言は、大君の事甚く思ひ

詫びて、何と大君をば辨のやうに、形貌を變へさせ奉らざりけ

む、御病氣の折に、尼にても成し奉らば、それにつけて、少し

は命も延ぶるやうもやあらまし、然して今頃はいかに心深くも

語らひ申してあらまし、など、一方ならず戀しく覺え給ふに、こ

の辨さへ羨ましければ、辨の隠るへたる几帳を、少し引き遣り

て、詳細にぞ語らひ給ひける、辨の無下に思ひ耄けたる様なが

ら、物うち言ひたる様子、用意、口惜しからず、由緒ありける

人の餘波と見えたり、辨は、

(辨歌) 先に立つ、涙の川に、身をなげば、人に後れぬ、命な

先に立つ云々○先に死なば大君に後れて歎く

こともなからむとなり

と打潜み申す、中納言は、

(薫) 身を投ぐるなど、それもいと罪深かるなる事にこそあれ、かくては彼岸に到ること、何とかさやうにもあるまじ、入水などの事にて、深き底に沈み過ぎむもあへなきことなれば、何事も凡て空しく思ひ取るべき世にぞある、
など言ふ、

身を投げむ云々○身を投げて人も人の思は朽ちぬものなれば人を戀ふる執心は果てじとて他人を教化しても吾身慰む方なしとの意なり

(薫歌) 身を投げむ、涙の河に、沈みても、戀しき瀬々に、忘れしもせじ、如何ならむ世に、少しも思ひ慰むることありなむや、

と終もなき心地し給ふ、かくて中納言は、歸らむ方もなく詠められて、日も暮れにけれど、不覺に旅寝せむも、人の咎むることやあらむ、と、あへなければ歸り給ひぬ、さて辨は中納言の思

中君留別 辨尼

人は皆云々 ○人は皆上洛の用意に衣を裁ち縫ひなどするにも我は跡に残りて寢れ居るとて立つを裁に尼を蟹にかけたり新古今集になかあする蟹のしわざを見らるからに袖の浦にもた

ほし言へる様を、中君の御前にて語りて、いと慰め難く、涙に昏れ惑ひたり、明日はいよく京渡りとして、女房達皆心適きたる様子にて物縫ひ營みつゝ、老い曲める形貌も知らず、修飾ひ彷徨ふに、辨はいよく寢して、

(辨歌) 人は皆、急ぎたつめる、袖のうらに、ひとり藻鹽を、垂るゝあまかな、

と愁へ申せば、中君は、

(中歌) 鹽垂るゝ、あまの衣に、ことなれや、うきたる波に、濡るゝ我が袖、京に移りても、世に住み着かむこと、いと有り難かるべき業と覺ゆれば、様子に従ひては、また宇治に立ち歸らむも圖り難ければ、此宮をば荒れ果てじ、とぞ思ふを、さらばその折はまた重ねて對面もありぬべけれど、暫時の別

つ涙かなとあり
鹽垂る、云々○京へ上るも住み馴れぬことなれば浮きたる心地して其方の歎きと異ならむやほとこの意なり河海抄に心から浮きたる船に乗りそめてひと日も波にぬれぬ日ぞなきとあり

○早蕨

離も心細くて、其方の立ち留り給ふを見置くに、いと心も適かずぞある、かゝる尼姿なる人も、必一向にしも、絶え籠らぬ業なるめるを、尙尋常に思ひ成して、時々京へ出て見え給へよ、
などいと懐かしく語らひ給ふ、昔の大君の持て使ひ給ひし、然るべき御調度どもなどは、皆この辨、御許の許に留め置き給ひて、(中) 其方は、大君の事を、かく他人より深く思ひ沈み給へるを見れば、大君とは、前の世も取り別きたる宿契もやものし給ひけむと思ふさへ、其方をは一入睦しく哀にぞ思ふ、
と言ふに、辨はいよく、兒童の母親を戀ひて泣くやうに、心收めむ方なく、涙に思溺れ居たり、宮の内は、皆掃除ひ萬事取り認めて、匂宮より御迎の御車ども寄せて、御前駈の人々、四位

中君出字
治徒三條院

ありふれば云々○身を
用なきものに思ひ捨てたらば今日の嬉しき瀬

○早蕨

五位いと多かり、匂宮御自身も、御迎にいみじくおはしまさまほしけれど、仰山しくなりて、却て悪かるべければ、唯忍びたる様に持て成して、待遠に思さる、中納言よりも、御前駈の人、數多く奉り給へり、大方の事をこそ、匂宮よりは思し置きつれ、詳細なる内々の御扱ひは、唯この中納言より、思ひ寄らぬことなく、懇切に訪ひ申し給ふ、
日暮れぬべし、と内にも外にも催促し申すに、中君は心惚忙しく、都は何地ならむと思ふにも、いと果敢なく悲しとばかり覺え給ふに、御車に乗る、女房大輔、君といふ人、
(輔歌) ありふれば、嬉しき瀬にも、逢ひけるを、身をうち川に、投げてましかば、
とて打笑みたるを、中君は辨の尼の心ばえには、此上なくも變り

には逢はじ
ものをとな
り
過ぎにしが
云々○過ぎ
にしことは
忘れれどと
にかく満足
の今日よと
なり

○早歳

てあるかな、と、氣に喰はず見給ふ、今一人の女房、

(女歌) 過ぎにしが、戀しきことも、忘れねど、今日はたまづ
も、ゆく心かな、

何れも年経たる女房どもにて、皆彼の大君の御方をば、心寄せ
まほしく申したりしを、今はかく改めて、昔の御事を言はず、今
日の御祝ひに言忌みするも、却て心憂の世や、と、中君は覺え給
へば、物も言はれ給はず、道の間、遙けく險阻しき山路の有様
を見給ふにぞ、無情にばかり思ひ成されし匂宮の、御中の通路
を、道理の絶間なりけり、と、少し思し知られける、道の間に、
七日の月の分明に差出でたる、影面白く霞みたるを見給ひつゝ、
いと遠きに、中君は是までかゝる旅は習はず困しければ、打詠
められて、

(中歌) ながむれば、山より出で、行く月も、世にすみ詫び
て、山にこそ入れ、

かく京に迎へられても、また後に見捨てられ 様變りて再び宇
治へ歸ることあらむに、遂に如何ならむ、とばかり危く、行
末心配きに、今まで何事をか思ひけむ、とぞ、昔取り返さまほし
きよ、宵打過ぎてぞ、京なる二條院におはし着きたる、見も知
らぬ様に、目も輝く心地する殿造りの、三葉四葉なる中に、御
車引き入れて、匂宮は何時しかと待ちおはしましければ、御車
の下に自身寄せ給ひて、中君をば降し奉り給ふ、室内の御装
飾など、有るべき限りして、女房の局々まで、御心留めさせ給
ひける程、著く見えて、いとあらまほしげなり、京に入りては
如何ばかりの事にかあらむ、と、覺束なく見え給へる中君の御有

ながむれば
云々○月や
彼の如くな
れば我も今
山里を出て
ゆけども行
未いかなら
む京に住み
詫びてまた
山里に歸る
やうの事も
やあらむと
危く思へる
意なり
殿造りの○
孟津抄に此
殿はむべも
富みけり三
枝の三葉四
葉に殿造り
せりとあり

○早歳

しなてるや
云々○中君
には正面な
らねども一
夜添臥して
逢ひ見しも
のむとて萬
葉集のしな
てるや鳩の
水海に漕ぐ
舟のまほに
も妹に逢ひ
見てしがな
とある下旬
を少しくか
へたるなり

様の、俄にかく定まり給へば、匂宮の御心も、一通ならず思さ
るゝことなるめり、と、世の人も奥ゆかしく思ひ驚きけり、中納
言は三條宮に、この廿餘日の程に、渡り給はむとて、此頃は日
日に三條宮におはしつゝ、御普請ども見給ふに、この二條院近
き間なれば、中君の出京の様子も聞かむとて、夜更くるまで此
宮におはしけるに、奉り給へる御前駈の人々歸り参りて、御出
京の有様など、語り申す、かくて中納言は、匂宮のいみじく御
心に入りて、中君をば懇切に待遇し給ふなる由を聞き給ふにも、
且は嬉しきものながら、さすがに我心から妬くも悔しくも、愚
痴がましく胸打潰れて、取返すものにもがなや、と、返すく獨
言たれて、

(薰歌) ちなてるや、鳩の水海に、漕ぐ舟の、眞帆ならねども、

逢ひ見しものを、

とぞ言ひ腐さまほしき、

夕霧左大臣は御女六君を、匂宮に奉り給はむこと、此月にと思
し定めたりけるに、かく案外の中君を、匂宮は六君よりも先に、
と思し貌に傅き居る給ひて、左大臣殿の方を離れおはすれば、左
大臣はいと無曲げに思したり、と、宮は聞き給ふも、いと氣の毒
なれば、六君の方へ、御文は時々奉り給ふ、六君御裳着の事、
世に響きて用意給へるを、中君の事によりて、日延べ給はむ
も、人笑なるべければ、廿餘日に着せ奉り給ふ、左大臣は心に、
中納言は同じ兄弟の縁に、珍らしげなくとも、此人をこそ他人
に婿とし譲らむが、口惜しきに、六君に娶せて婿にもや成して
まし、中納言は年來人知れぬものに思ひけむ、大君をも亡くな

六君行着
裳式

同じ兄弟○
夕霧左大臣
薫中納言と
は異母兄弟
なれど中納
言は御胤も

や、異なり

○早蕨

主なき宿○
花鳥餘情に
淺茅原主な
き宿の櫻花
心安くや風
に散るらむ

して、物心細く詠め居給ふなるを、と、思し寄りて、然るべき人
して、中納言に、六、君の事、氣色取らせ給ひけれど、中納言は
世の果敢なさを、目に近く見しに、いと心憂く、身も忌々しく
覺ゆれば、如何にもくさやうの有様は、物憂くぞある、と、中
納言の氣色の、不用じげなる由を、左大臣は聞き給ひて、心に
いかでかこの君さへ、我が懇切に言ひ出ることを、物憂くは待
遇すべきぞ、と、恨み給ひけれど、左大臣と中納言とは、元々親
しき御間柄ながらも、中納言のいと心耻かしげにものし給へば、
強ひてもえ申し動かし給はざりけり、
三月の花盛の頃、薰中納言は、二條院の櫻を見遣り給ふに、主
なき宿の、と、先思ひ遣られ給へば、心安くやなど獨言ち餘りて、
匂宮の御許に参り給へり、宮は二條院がちにおはしまし着きて、

とあり
薰君訪二
條院

中、君といと能く住み馴れ給ひにたれば、中納言は心に、見善の
業よ、と、見奉るものながら、例の後悔しく覺ゆる心の添ひたる
ぞ、怪しきや、されど實の御心ばえは、いと可憐に、後安くそ
思ひ申し給ひける、中納言は、匂宮と何くれと御物語申し交し給
ひて、夕つ方、宮は内裡へ参り給はむとて、御車の装束して、御
供の人々、多く参り集りなすれば、中納言は立ち出で給ひて、
中君のおはす對の方へ参り給へり、中君は山里の氣容引き替へ
て、御簾の内、奥ゆかしく住み成したれば、中納言は、美しげ
なる女童の、御簾より透影見ゆるを呼び出して、御消息申し給
へれば、御褥差出して、彼の宇治にて昔の心知れる女房なるべし、
出で来て御返答申す、中納言は、
(薰) かく近き所に候ふて、朝夕の隔てもあるまじく思ひ候は

○早蕨

る、間ながら、さして其用となくて申させむも、却て馴々し
 き咎もや候はむと、包み候ふ間に、世の中變りにたる心地は
 かりぞし候ふよ、御前の梢も、霞隔て、見ゆるにつけても、
 彼の山里の事思ひ出でられ候ふて、有りし世の隔たり行く心
 地するも、哀なること多くも候ふかな、
 と申して、打詠めものし給ふ氣色、氣の毒げなるを、中、君は心
 に、實に大君のおはせましかば、覺束なからず宇治へも往き返
 り、互に花の色、鳥の聲をも、折節につけつゝ、少し心適きて
 過ぐしつべかりける世を、など、思し出るにつけては、一向に絶
 え籠り給へりし、宇治の住居の心細さよりも、此院に来て、却
 て飽かず悲しく口惜しきことぞ、いと、勝りける、御前の女房
 達も中、君に、

(女房) 中納言殿をば、尋常に疎遠しくな、待遇し申し給ひそ、
 殿の限りなき御心の程をば、我君には、今も能く見知り給ふ
 様をも、見せ奉り給へ、

など申せど、中、君は人傳ならず、ふと差出で申さむことの、尙
 慎ましければ、猶豫ひ給ふ間に、匂、宮は出で給はむとて、御暇
 申しに、此方へ渡り給へり、宮はいと清らに引き修ひ化粧じ給
 ひて、見るかひある御様なり、中納言は此方におはしたるなり
 けり、と、見給ひて、中、君に、

(匂) 何とてこの客人をば、無下に餘所々々しく、差放ちては
 出し居る給へる、宇治にては、君達の御邊には、餘り怪しと
 思ふまで、後安かりし心寄せを、この客人と餘り親しく爲給
 はむは、人の思はむ所も、我が爲には、愚痴がましきことも

やあらむ、と、覺ゆれど、さすがに無下に隔心多からむも、罪もこそ得れ、近やかにて昔物語も打語らひ給へかし、など申し給ふものながら、

(又) 然はありとも、餘り心緩びせむもまたいかにぞや、疑はしき下の心にもぞあるよ、

と打返し言へば、中君は一方ならず面倒しけれど、我が心にも、哀情深く思ひ知られにし、中納言の御心を、今しも疎略なるべきならねば、中納言も思ひ言ふめるやうに、古の大君の御代りと擬へ申して、中納言にもかく思ひ知りけり、と見せ奉る節もあらばや、と思せど、匂宮の、さすがに右や左くやと疑ひ思して、方々に安からず申し成し給へば、中君は、中にありて困しく思されけり、

第四十九帖

(宇治五)

寄生

此帖は薰君廿四歳の夏より廿六歳の夏に至る藤壺女御○左大臣の三君にて麗景殿と號す入内の事梅枝帖にあり左大臣は當時の左大臣なり女二宮成立

其頃藤壺女御と申すは故左大臣の御女にぞおはしける、今上また春宮と申させし時、他人より先に入内り給ひにしかば、睦ましく愛憐なる方の御思は、特別にもものし給ふれど、この効能と見ゆる寵愛く節もなく、年経給ふに、明石、中宮には皇子皇女さへ、數多おはして、何れも大人び給ふめるに、この女御はさやうの事も少くて、唯皇女一所をぞ持ち奉り給へりける、是やがて女二宮におはす、女御には我いと口惜しく、他人に壓され奉りぬる宿世、歎かしく覺ゆる代りに、この女二宮をなりとも、いかで行末の心も慰む程にして、見奉らむ、と、傳き申し給ふこと一通ならず、女二宮の御容貌も、いと美しくおはすれば、今上

女二宮母藤
壺女御薨

も可愛きものに思ひ申させ給へり、明石中宮はその御腹なる、女一宮を、世に比類なき様に持て傳き申させ給ふに、大方の世の勢望こそ及ぶべくもあらね、この女御の内々傳き給ふ女二宮の御有様は、専女一宮に劣らず、父左大臣の御勢力、嚴重しかりし餘波、いまだ甚く衰へねば、特に不安心きことなどなくて、女二宮に伺候ふ女房達の、風姿より始め、撓みなく時々につけつゝ、整へ好みて、當世めかしく由緒々々しき様に待遇し給へり、女二宮十四になり給ふ年、御裳、着せ奉り給はむとて、春より打始めて、他事なく思し用意きて、何事も一通ならぬ様にと思し儲く、左大臣家の古代より傳はりたりける寶物ども、此折にこそは奉らめ、と、捜し出でつゝ、いみじく營み給ふに、母女御、夏頃物怪に煩らひ給ひて、いと果敢なく薨せ給ひぬ、言

女二宮徒
禁中

ふかひなく口惜しきことを、今上にも思し歎く、さてこの女御は、心ばえ情々しく、懐かしき所おはしつる御方なれば、殿上人どもも、此上なく物寂しかるべき業かな、と、惜しみ申す、大方然るまじき分際の女官などまで、戀ひ慕ひ申さぬはなし、女二宮は況して若き御心地に、心細く悲しく思し入りたるを、父帝聞召して、氣の毒に哀に思召さるれば、故女御の、御四十九日過ぐるまゝに、女二宮をば、忍びて禁中へ參らせ給へり、父帝には日々に女二宮の御方に渡らせ給ひつゝ、見奉らせ給ふ、宮には母女御の喪服を着け給へれば、黒き御衣に窶れておはする様、いと可愛げに、貴なる氣色勝り給へり、御心様もいと能く大人び給ひて、母女御よりも、今少し静やかに、重りかなる所は勝り給へるを、後安くは見奉らせ給へど、眞實は御外戚と

ても、後見と頼ませ給ふべき外叔父などやうの、確乎しき人もなし、僅に大藏卿、修理大夫などいふは、女御にも異腹の兄弟なりけり、今上は、この外戚、特に世の勢望、重りかにもあらず、貴からぬ人々を後見として、頼もし人にておはせむに、女は氣の毒なること多かりぬべきこそ、いとほしけれ、など、御心一つなるやうに、女二宮をば思し扱ふも、御心安からざりけり、御前の菊、移ろひ果て、盛りなる頃、空の景色も、哀に打時雨るゝにも、今上は先この女二宮の御方に渡らせ給ひて、昔の女御の事など申させ給ふに、宮は御返答なども、大様なるものながら、幼稚なからず申させ給ふを、今上は鍾愛しく思ひ申させ給ふ、さて叡慮に、女二宮のかやうなる御様を、見知りぬべからむ人の、持て難し申さむも、何とかはあらざらむ、朱雀院

今上欲三薰
君爲二女二
宮婚一

の皇女女三宮を、六條院源に譲り申し給ひし折の先例どもなど、思し出るに、最初の間は、世間にて、此事をば、いでや飽かずもあるかな、愛甚き皇女を、院に預けなど、然らでもおはしなまし、と、申すことどもありしがど、今思へば、その子の源中納言君薰の、他人より特別なる有様にて、母君女三宮の御爲、かく萬事を後見奉るこそ、女三宮の、當時の御勢望衰へず、貴き様にては長在へ給ふめれ、かく中納言の後見奉ることもあらば、今頃は女三宮も、御心より外なる不慮の事ども出で来て、自然世人に輕侮られ給ふこともやあらまし、など、思し續けて、ともかくも御在位の御世の間にや、女二宮の御婿、思ひ定めまし、と思し寄るには、やがて女三宮の順序のまゝに、この中納言より外に、適宜かるべき人は、またなかりけり、この中納言ならば

我が御婿として、姫宮達の御傍に差並べたらむに、何事も目覺しく不似合のことはあらじを、中納言の元より思ふ女持たりとて、聞き悪きことなど打交せて、待遇すまじくもまたあるめるを、終には本臺もなくしてはえあるまじ、然らぬ先に、この女二宮をば、中納言にさやうにもや微言かしてまし、など折々思召しけり、かくて中納言を召しては、御碁など打たせ給ふ、暮れ行くまゝに、時雨面白き程に、今上は、菊花の色も夕榮したるを御覽じて、侍臣召して、

(帝) 唯今殿上に、誰々かある、と問はせ給ふに、

(臣) 中務親王、上野親王、中納言源朝臣兼君 伺候ふ、と奏す、

今上召二薰君一圍碁

徒に目を送る○白氏文集に送る春唯有酒銷日不過ぎ碁とあり

(帝) 中納言の朝臣、此方へ、と救命ありて、薰君は参り給へり、實にかく取別きて、召出さるゝもかひありて、遠く薫れる匂ひより始めて、人に異なる様し給へり、今上は、

(帝) 今日の時雨、平生よりも特別に長閑なるを、女御の喪中にて、姫宮の爲には、音楽など不用しき方にて、いと徒然なるを、徒に目を送るには、戯事にて、碁ぞ善かるべき、

とて、碁盤召し出で、中納言をば、御碁の相手に召し寄す、今上には、何時もかやうに、氣近く馴らし纏はし給ふに、中納言は習慣にたれば、心の中に、例の事にこそはあれ、と思ふに、(帝) この勝負に、佳き賭物のりものはありぬべけれど、軽々しくはえ渡すまじを、さてこの賭物のりもの、其方は何とは思ふぞ、

と宣はする御氣色、いかゞ見ゆらむ、中納言はこの賭物、やがて女二宮にもや、と、思へば、いとゞ心遣ひして伺候ひ給ふ、さて碁打たせ給ふに、中納言は三番の中に、一番負けさせ給ひぬ、今上は、

(帝) 残念き業かな、

とて、

(又) 彼の賭物をこそ渡すべきなれど、まづ今日はこの花一枝

許す、

と宣はすれば、中納言は御敕答申さで、御階を降りて、面白き

菊枝を折りて、参り給へり、

(薰歌) 世の常の、垣根に匂ふ、花ならば、心のまゝに、折り

て見ましを、

この花一枝
○朗詠に聞
得園中花養
艶、請君許
折一枝春
とあり
世の常の云
々○尋常の
家の籬に咲
ける花なら
ば心のまゝ
に折りて見
るべきを御
前の花なれ
ばそれも叶
はずとて女
二宮の事を
含めていへ

と奏し給へる、用意淺からず見ゆ、今上、

(帝歌) 霜にあへず、枯れにし園の、菊なれど、 残りの色は、

あせずもあるかな、

と宣はす、今上には女二宮の御事をば、かやうに折々微言かさ

せ給ふ御氣色を、中納言は人傳ならず承りながら、例の心の癖

なれば、急がしくも覺えず、さて心に、いでや女二宮とて本意

にもあらず、中君六君など、大君、夕霧左大臣などの勧め給ひ

し如き、様々に氣の毒なる人々の御言どもをも、能く聞き過ぐ

しつゝ、年經ぬるを、今更に聖やうのものゝ、浮世に歸り出でむ

心地すべきことゝ思ふも、且は怪しや、世には故意に心を盡す

女さへこそあるなれ、とは思ひながら、同じくは中宮腹の女一

宮におはせばまたしも、と、覺ゆる心の中ぞ、餘り負ふけなかり

霜にあへず
云々○園を
母女御に菊
を女二宮に
たとへて母
は亡せられ
ど女二宮は
また盛りも
過ぎれば手
折り給はぬ
かと薫君を
婿にしたき
意をほのめ
かせるなり

夕霧左府急
六君婚儀

水漏るまじ
く○伊勢物
語になとて
かく逢ふぞ
かたみにな
りにけむ水

ける、

夕霧左大臣は、今上には中納言を、女二宮の婿に、など、思召す由、微聞き給ひて、今まで六君は、さりとともこの中納言にこそは娶せめ、中納言の澁々なりとも、眞實に恨み寄らば、終にはえ辭み果てじと思しつるを、此度聞けば、案外なる事出て來ぬべかるめり、匂宮も、女二宮の事、妬く思されければ、また故意とにはあらねど、六君の方へは、折々につけつゝ、面白き様に申し給ふこと絶えざりければ、左大臣は心に、さもあらばあれ、匂宮には等閑の御好色にはありとも、然るべき縁にて、御心留まるやうも、何とかなからむ、たとひ水漏るまじく堅く思ひ定むとても、平人しき分際のもを婿にせむは、また人様悪く、飽かぬ心地すべし、など、思し成りにたり、かくて左大臣は、女二

漏らさじと
結びしもの
をとり

宮の、女御腹の不安心けなる世の末にて、今上までが婿求め給ふめる世に、況して平人の女の盛り過ぎむも愛なし、など、今上をも誹らはしげに言ひて、中宮石にも眞實に恨み申し給ふこと、度重りければ、中宮聞召し煩らひて、匂宮に、

(中宮) 左大臣夕霧の、氣の毒にも、六君の事をば懇切に思ひ志して、年經給ひぬるを、君には生憎にも遁れ申し給はむも、情なきやうならむ、凡て親王達は、外戚の御後見がらによりてこそ、御勢力、ともかくもあるなれ、今上の御世も末に成り行くとばかり、思し宣ふめるを、平人こそ北方は一方に定まりぬれば、また他に設けて心を分けむことも、難げなるめれ、それさへあるに、彼の左大臣の、いと眞實だちながら、本妻雲井、雁のおはしながらも、その他に落葉宮を居る給ひて、此方

紅梅御方○
右大臣の繼
女にて母は
眞木柱の上

彼方羨みなく待遇しても、ものし給はずやはある、況して君
には、後來春宮にもと、思ひ掟て申すことも叶はゞ、宇治の
姫君の外にも、數多侍はむに、何とか支障あらむ、
など、例ならず言續けて、あるべかしく申させ給ふに、匂宮は、
我が御心にも、六君には、元より持て離れてもまた思さぬこと
なれば、強ちには何とてかは、あるまじき様にも申させ給はむ、
但左大臣殿の、いと諸事端正しげなる住居に、取籠められて、是
まで心安く習慣ひ給へる有様の、所狭からむことを、生困しく
思すに、物憂きことなれど、實にこの大臣に、餘り怨ぜられ果て
むも愛なからむ、など、漸々思し弱りにたるなるべし、さて此宮
仇なる御心なれば、彼の按察大納言右大の中、君紅梅御方をも、
尙思したえず、花紅葉につけても、言ひ渡りつゝ、何れをもゆ

紅梅帖にあ
り
年は變りぬ
○此より已
上は早蕨帖
の前の事に
て此間に早
蕨帖の事を
挿みて已下
早蕨帖に繼
ぐなり
薰君聞女
二宮事却
追慕大君

かしくは思されけり、されどその年は更りぬ、
女二宮も御母女御の御服終てぬれば、今はいとど何事にかは憚
り給はむ、中納言の、此宮の事、さやうにも申し出では許可さ
む、と、今上は思召したる御氣色にぞある、と、告げ申す人々もあ
るを、中納言は、餘り知らず貌ならむも、辟々しく無禮なり、な
ど思し起して、然るべき便して、氣色ばみ申し給ふ折々もあるに、
不都合きやうのことなど、何とかはあらむ、今上には御婚儀の
事など、既にその間に思し定めたるなり、と、中納言は人傳にも
聞き、また自分直接に御氣色をも見れど、心の中には、尙飽か
で過ぎ給ひにし大君の哀傷さばかり、忘らるべき世なく覺ゆれ
ば、うたてかく宿契深くものし給ひける大君の、何とてかは、さ
すがに實事もなく、疎くては過ぎにけむ、と、心得難く思ひ出で

らる、口惜しき下臈の人品なりとも、彼の大君の御有様に、少しにても似たらむ女は、心留まりなむかし、昔ありけむ魂反する香の烟につけてなりとも、今一度大君をば見奉るものにもかな、とばかり覺えて、貴き女二宮の方様には、何時しか、など、急ぐ心もなし、

中君聞三句
宮六君婚事
憂歎

夕霧左大臣には、六君、勾、宮へ御婚儀の事、急ぎ立ちて、八月程に、と、申し給ひてげり、二條院の對の方中、君には、かくと聞き給ふに、さればよ、いかでかは末遂げむ、數ならぬ有様なれば、必人笑に憂き事出で來むものぞとは、思ひく過ぐしつる世ぞかし、一體、勾、宮は、仇なる御心と聞き渡りしを、頼もしげなく思ひながら、目の前に近く差對ては、別段につらげなることも見えず、愛憐に深き契をばかりし給へるを、俄に變り給は

む間、いかゞは安き心地はすべからむ、平人の交情などのやうに、一向名残なく中絶ゆることなどはあらずとも、いかに安けなき事多からむ、尙いと憂き身なるめれば、遂には宇治の山住に歸るべきなるめり、など、思すにも、以前のやうに、そのまゝ、山里に絶え籠りてあらむよりは、今となりては、却て山賤の待ち思はむも、人笑なりかし、返すくも故宮の遺言きしことに違ひて、草庵の下を離れにける心輕躁さを、耻かしく辛くも思ひ知られ給ふ、故大君の、いと志とけなく、物果敢なき様にはかり、何事をも思し言ひしがど、心の底の強やかなる所は、此上なくもおはしけるかな、彼の中納言の君の、今に忘らるべき世なく、歎き渡り給ふめれど、もしも大君の、今の世までおはせましかば、中納言の君の、他に思す女ども出で來て、恰も我

がやうに、大君の思すことはありもせまし、これを大君には、心深く、いかで然はあらじ、と、思ひ入り給ひて、右様左様に持て離れむことを思して、形貌をも變てむと爲給ひしぞかし、もしも今まで存生へおはしまさば、必然る様にて、尼になりてぞおはせまし、今思ふに、いかに重りかなる御心掟ならまし、故宮大君の亡き御影どもも、我をばいかに此上なき輕躁さと見給ふらむ、と、恥かしく悲しく思せど、今更恨みてもかひなければ、匂宮へは何かはかゝる氣色をも見せ奉らむ、と、忍び返しつゝ、六、君の事は、聞きも入れぬ様にて過ぐし給ふ、匂宮は、常よりも可憐に懷かしく、起臥中、君に語らひ契りつゝ、此世ばかりならず、後の世までの長き事をばかりぞ、頼ませ申し給ふ、さるはこの五月頃より、中、君には御懷妊にやあらむ、例ならぬ様に、惱

ましく爲給ふことありけり、事甚く苦しがりなどは爲給はねど、平生よりも食事などいとなく、臥してばかりおはするを、匂宮にはまたさやうなる懷妊の人の有様など、能くも見知り給はねば、唯暑き頃なれば、かくおはするなるめり、とぞ思しける、されどさすがに不審と思し咎むることもありて、もし如何なるぞ、然る妊婦こそさやうに惱むなれ、など、言ふ折もあれど、中、君はいと耻かしく爲給ひて、然りげなくばかり持成し給へるを、懷妊と差過ぎ申し出る人もなければ、慥に懷妊とも宮はえ知り給はず、八月になりぬれば、六、君の御婚儀を、その日など中、君は外よりぞ傳へ聞き給ふ、匂宮は隔心てむとはあらねど、此事言ひ出でむ程、氣の毒に、いとほしく思されて、然やうにも言はぬを、中、君はそれさへぞ心憂く覺え給ふ、さてこの御婚儀

豫てより○
孟津抄にか
れてよりつ
らさな人に
ならはさで
俄に物を思
はするかな
とあり

の事、忍びたることにもあらず、世間凡て知りたることを、匂宮はその期日などさへ、言はぬことよ、と、中君はいかゝ恨めしからざらむ、さて中君の、かく二條院に渡り給ひにし後は、異なる事なければ、匂宮は内裡に参り給ひても、夜泊ることは殊に爲給はず、此處彼處の御夜離などもなかりつるを、宮は、今回六君と婚姻しては、俄に中君の如何に思はむ、と、氣の毒なる紛はしに、中君へ、夜離を習慣さむの御心にて、此頃は時々御宿直と稱へて、内裡に参りなど爲給ひつゝ、豫てより習はし申し給ふをも、中君はその意を知り給はずして、唯辛き方にはかりぞ、思ひ置かれ給ふべき、中納言もいと氣の毒なる業かな、と聞き給ふに、匂宮は仇々しく花心におはすれば、中君をば愛憐とは思すとも、六君の當世めかしき方に、必御心移ろひなむか

薰君讓中
君於匂宮
後悔

し、左大臣方も、いと嚴重にも申し給ふ邊にて、六君の緩びなく申し纏はし給はゞ、中君の、月頃もさやうにも夜離を習慣ひ給はで、待つ夜多く過ぐし給はむこそ、哀なるべけれ、など、思ひ寄るにつけても、張合なしや、それにつけても我が心よ、何しに中君をば匂宮に譲り申しけむ、昔の大君に心を染めてし後、大方の世をも思ひ離れて、一日澄み果てたりし道心も、再び濁り始めしかば、唯大君の事をばかり、右様左様には思ひながら、さすがに大君の心許されずしてあらむをば、押して靡かせむことは、最初より爲さる本意に憚りつゝ、唯いかにもして、少しにても彼方より愛憐と思はれて、打解け給へらむ氣色をも見む、と行先のあらましごとをばかり、思ひ續けしに、大君は我に逢ふこと心にもあらず持て成して、さはいへさすがに一向にしもえ

差放つまじく、我が思ふ慰めには、中君は我と同じ身ぞと言ひ成して、我が本意ならぬ方に面向け給ひしが、妬く恨めしかりしかば、我はまづ大君の心掟を違へむとて、俄に急ぎて中君をば匂宮に逢はせし業ぞかし、など、強ちに女々しく物苦しく、彼の匂宮をば率て、媒介歩き謀り申し、間、思ひ出るも、いと怪しからざりける心かな、と、返すく、後悔しき、宮もさりともその頃の有様、思ひ出で給は、我が聞かむ所をも、少しは遠慮り給はじや、と、思ふに、いでや宮には、今はその折の事など、詞に懸けても言ひ出でざるめるかし、尙仇なる方に進み移り易なる人は、獨女の爲ばかりにもあらず、朋友の爲にも、頼もしげなく、輕薄しきこともありぬべきなるめりかし、など、中納言は、匂宮を憎み申し給ふ、一體中納言は、我が、眞に餘り大君一方

に思ひ染みたる心習慣に、他人はいと此上なく輕薄にもとかしく見ゆるなるべし、さて中納言は彼の大君を空しく見奉り成してし後、思ふには、今上の、皇女女二宮を賜はむと思し置きつるも、嬉しくもあらず、この中君を妻に得ましかば、嬉しくもあらまし、と、覺ゆる心の、月日に添へて勝さるも、唯彼の大君の御縁と思ふに、思ひ離れ難きぞかし、同じ姉妹といふ中にも、大君と中君とは、限りなく思ひ交し給へりしものを、大君の臨終となり給ひにし果にも、跡に留まらむ中君をば、我と同じ事と思ひ成し給へ、とありて、萬事は何も思はずなる事も、憾むべき節もなし、唯彼の大君の思ひ置きてし様を違ひて、中君をば我物としもせず、匂宮に執持ち奉りしことばかりぞ、口惜しく遺憾しき節にて、大君の、魂魄は現世に残りぬべき、と、言ひ

しものを、今回六君の事などの、出で来る事につけては、やがてその亡魂の、天翔けりても、いと辛しとや見給ふらむ、など熟々と人遣りならぬ獨寝し給ふ夜々は、果敢なき風の音にも目ばかり覺めつゝ、來し方行く先の中、君の身の上まで、味氣なき世を思ひ廻らし給ふ、三條宮には、中納言の等閑の遊戯に物をも言ひ觸れ、氣近く使ひ馴らし給ふ女房の中には、自然憎からず思さるゝ女房もありぬべけれど、眞實には心留るものもなきこそ潔白なれ、さるはこの女房の中には、彼の宇治の姫君達の身分に、劣るまじき分際の女王ども、時世に従ひつゝ、衰へて、心細げなる住居するなどを、尋ね取りつゝ、女房にしてあらせなどしたる、いと多かれど、中納言の今はと世を背き離れむ時、此女こそは、と、取立てゝ心留る羈絆になる程の事はなくて過ぐ

明くる間○
細流抄に朝
貌は常なき
花の色なれ
や明くるま
咲きてうつ
るひにけり
とあり
北院○二條
院は中納言
の新邸なる
三條宮より
北に當れる
故にかくい
ふ

してむ、と、思ふ心遣ひ深かりしを、大君に思ひ始めてしより、いでさやうにも人様悪く、我が心ながら曲けてもあるかな、など平生よりもやがて眠まず、明かし給へる朝に、霧の籬より草花の色々面白く見え渡る中に、朝貌の果敢なげにて交りたるを、尙特に目留る心地し給ふ、明くる間咲きてとか、常なき世にも擬ふるが氣の毒なるめりかし、格子も上げながら、いと假始に打臥しつゝ、明かし給へば、この花の開くる間をも、中納言は唯一人ばかりぞ見給ひける、侍人召して、

(薰) 北院二條院に參らむに、仰山しからぬ車差出でさせよ、と言へば、侍人、

(侍) 匂宮は昨日より内裡にぞおはしますなる、昨夜御空車引て歸り候ひにき、

と申す、中納言は、

(薰) さもあらばあれ、彼の中君の惱み給ふなるを、訪ひ申さむ、今日は我も内裡へ参るべき日なれば、日高けぬ先に出でなむ、

と言ひて、御装束し給ふ、出で給ふまゝに、前裁の朝貌折り給はむとて、御庭に降りて、草花の中に交り給へる様も、事更に艶だち色めきても持成し給はねど、怪しく唯打見るに、媚めかしく耻かしげにて、いみじく氣色だつ色好みどもに、擬ふべくもあらず、自然美しくぞ見え給ひける、朝貌の蔓引き寄せ給ふに、霧甚く翻る、

今朝の間の
云々〇かく
果敢なく消
えやすき物
と見るく
尙賞つべき
とて大君の
事によそへ
ていへり

(薰歌) 今朝の間の、色にやめでむ、置く露の、消えぬにかゝる、花と見るく、果敢なよ、

女郎花〇古
今集に女郎
花愛しと見
つゝぞ行き
過ぐる男山
にし立てり
と思へばと
あり

と獨言ちて、折りて持給へり、女郎花をば見過ぎてぞ出で給ひぬる、明け離るゝまゝに、霧立ち満ちたる空面白きに、中納言は二條院を思ひ遣り給ひて、女同志はとけなく朝寐し給へらむかし、格子妻戸など打叩き、聲作らむこそ、初々しかるへけれ、朝未明に來にけりと思ひながら、侍人召して、二條院の中門の開きたるより見させ給へば、侍人は、

(侍) 御格子ども、皆上げて候ふべし、女房の氣容などし候ひつ、

と申せば、中納言は御車より降りて、霧の紛れに、様善く歩み入り給へるを、女房どもは、匂宮の、忍び通ひ給ひし所より、歸り給へるにやあらむと、見るに、露に打濕り給へる薰り、例のいと様特別に匂ひ來れば、尙宮よりは目覺ましくおはすかし、さ

薰君訪二
條院

れどこの中納言、心を餘りに治め給へるこそ憎けれ、など、殊に若き女房達は、張合なく申し合へり、さて女房どもは驚き貌にもあらず、いと物馴れて、能き程に打そよめきて、御褥など差出でなどする様も、いと見善かり、中納言は、

(薰) 此所に御褥を賜はるは、これに伺候へとの御事か、さるにても許させ給ふ間は、人々らしき心地すれど、尙かゝる御簾の前に差放たせ給へる憂愁しさにぞ、屢もえ伺候はぬ、と言へば、内なる女房、

(女房) 然らば如何なる方に居給はむと思す、と申すに、中納言、

(薰) 我等のやうなる、古人などの伺候はむに、相應しき休息み所は、北面などやうの、隠れたる所ぞ宜しく候ふ、それも

亦、唯中君の御心に従ふ外なければ、愁へ申すべきにも候はず、

とて、長押に押懸りておはすれば、例の女房ども、中君に、

(女房) 尙彼處の許までもおはせ、

など勧誘し申す、中納言は元より氣容速急に、男々しくなどは、ものし給はぬ人柄なるを、いよく靜肅に身を持成し、心を治め給へれば、中君は、今はうたて愼ましかりし方、少しづつ、薄らぎて、自身直接に申し給ふことも、漸く面慣れ給ひにたり、中納言は、

(薰) 御心地、惱ましく思さるらむ様も、如何に候ふや、

など問ひ申し給へど、中君は、確乎しくも御返答申し給はず、平生よりも引き立たず、打濕り給へる御氣色なるは、六君の事を

思す故にやあらむと、中納言は、氣の毒にも、可愍に推量られ給ひて、世の中のあるべきやうなどを、恰もまことの兄弟などのやうに、詳細に教へ慰め申し給ふ、さて中、君は聲なども、大君には故意と似給へりとも覺えざりしがど、今は怪しきまで唯大君とばかり覺ゆる程似給へるに、人目苦しがるまじくば、簾をも引き揚げて、差對ひ申さまほしく、病氣に打惱み給へらむ容貌、ゆかしく覺え給ふも、我身の如き好色に心深からぬさへ、思ひ離れ難きを、尙男女間に物思はぬ人は、えあるまじき業にやあらむ、とぞ思ひ知られ給ふ、さて中納言は、

(薰) 我は人々らしく、歴々しき方には候はずとも、心に物思ふこと、また歎かしく身を持て悩む様などは、なくて過ぐしつべき此の世と、自ら思ひ候ひしを、大君の事を思ふに、心

から悲しきことも、其方を人に渡して、愚痴がましく後悔しき物思をも、方々に安からず思ひ候ふこそ、いと張合なけれ、官位などいひて、世の大事にするもの、昇進まぬ道理の愁につけて、歎き思ふ人よりも、この思や今少し罪業の深さは勝るらむ、

など言ひつゝ、折り給へる碧花を、扇に打置きて見給へるが、漸々赤みもて移ろひ行くも、却て色合美しく見ゆれば、やをら御簾の中に差入れて、

(薰歌) よそへてぞ、見るべかりける、白露の、契りか置きし、朝貌の花、

と言ふ、中納言の故意びても持成さぬに、露を落さて持給へりけるよ、と、面白く見ゆるに、露は置きながら、花は枯るゝ氣色な

よそへてぞ
云々○大君
の妹君をば
我が代りに
と契り言ひ
けむやうに
中君をば姉
君によそへ
て見むとな

れば、中君、

(中歌) 消えぬまに、枯れぬる花の、果敢なきに、おくる、露は、尙ぞ勝れる、何に懸れる、

と、いと忍びて、詞も續け給はず、慎ましげに言ひ消し給へる程、中納言は尙いと能く大君に似給へるかな、と思ふにも、まづぞ悲しき、中納言は、

(薰) 秋の空は、今少し詠めばかり勝り候ふ、徒然の紛らはしにもとて、先頃宇治に参りて候ひしに、庭も籬も眞に荒れ果て、候ひければ、堪へ難きこと多くぞ候ひし、故六條院崩せ給ひて後、二三年程の末に、故院世を遁れ給ひし嵯峨院にも、六條院にも、差覗く人の、餘り悲しきに、心收めむ方なくぞ候ひける、本草の色につけても、水の流に添へても、涙に昏

消えぬまに
云々○朝露
の消えぬ間
に枯れぬる
如き姉君よ
りもそれに
後れたる我
身の方尙は
かなきとな
り
何に懸れる
○金葉集に
頼めおく言
の葉だにも
なきものを
何にか、れ
る露の命ぞ
とあり
庭も籬も○
河海抄に里
は荒れて人
はふりにし
宿なれや庭
も籬も秋の
野らなると

あり
嵯峨院○嵯
峨天皇の離
宮なり後に
淳和太后奏
して寺と爲
し大覺寺と
號す六條院
嵯峨に遷世
したるなり

萱草○毛詩
に北堂栽萱
草能忘憂
とあり

れてばかりぞ歸り候ひける、彼の院の邊に奉仕りし人は、上
下心淺き人なくぞ惑ひ候ひけるまゝに、方々集ひものせられ
ける人々も、皆各所に別れ散りつゝ、各々世を思ひ離るゝ住
居をし給ふめりしに、果敢なき身分の女房などは、況して心
收めむ方なく覺えけるまゝに、物覺えぬ心に任せつゝ、山林
に行き交り、不覺なる田舎人になりなどしつゝ、哀に惑ひ散
るこそ多く候ひけれ、さて六條院をば却て皆荒らし果て、萱
草生して後ぞ、彼の御嫡子なる、夕霧左大臣も渡り住み、御
外孫の宮達なども、方々渡り給へば、今はさながら昔に返り
たるやうに候ふめる、當時には世に比類なき悲哀さと見候ひ
し程の事も、年月経れば、思ひ覺ます時節の出で來るにこそ
はあれ、と、見候ふに、實に物の哀さも、限ある業なりけりと

ぞ見え候ひし、かくは申しながらも、彼の故院の崩れ給ひし古の悲さは、我はまた幼稚く候ひける間に、いとさやうにしも哀しく思ひ染まぬにや候ひけむ、尙この近き大君の悲しき夢こそ覺ますべき方なく思ひ候はるゝは、故院も大君も同じ死別にて、世の常なき悲哀なれど、罪深き悲哀は、大君の方勝りて候ふにやあらむ、と、それさへぞ心憂く候ふ、とて泣き給へる程、いと心深げなり、昔の大君を、いとも思ひ申さゞらむ人さへ、この中納言の大君を思ひ給へる御氣色を見むには、不覺に尋常にも思はれまじきを、況して中君は、今回彼の六、君の事について、自分も心細く物を思ひ亂れ給ふにつけては、いとど平生よりも大君を、面影に戀しく悲しく思ひ申し給ふ心なれば、中納言よりも、今少し哀を催されて、涙に昏れ

世の憂きよりは○細流抄に山里は物のさびしきことこそあれ世のうきよよりは住みよかりけりとあり

て、物もえ申し給はず、中納言は中君の、悲哀さに猶豫ひ兼ね給へる氣容を、互にいと哀と思ひ交し給ふ、中君は、(中)世の憂きよりは、など、古人は言ひしをも、年頃山里に住み候ひし間は、浮世と思ひ比べて、世の憂きよりは住み善しとも思ひ候はざりしを、今浮世に出て、彼の山里の住み善かりしことを知り始めて候へば、尙いかで山住の閑靜なる様にても過ぐさまほしくおもひ候ふを、さすがに今は自由に山住も心に叶はざるめれば、辨の尼こそ羨ましく候へ、この廿日餘の間は、故宮の三年忌にも候へば、宇治にもものして、彼の近き山寺の鐘の聲も、聞き渡さまほしく覺え候ふを、忍びて故里へ渡させ給ひてむや、と、宮宮へ申さばやとぞ思ひ候ひつる、

と言へば、中納言は、

(薫) さやうに彼の御故里を、荒さじと思ほすとも、いかでかは容易く御渡りあらむ、心安き我等の身さへ、往來の間いと荒ましき山路に候へば、宇治へ參らまほしく思ひながらも、え參らで月日も隔り候ふ、故宮の御法事の件は、彼の阿闍梨に、然るべき事ども、皆言ひ置き候ひにき、御古里なる彼の宇治宮は、尊き寺に思し譲りてよ、時々見候ふにつけては、却て昔を忍ぶ心惑ひの絶えせぬも張合なきに、寺院に成して、執心失ふ功德に成し候ひなばやとぞ思ひ候ふを、君にはまた如何思し置きつらむ、ともかくも御心に判定めさせ給はむに從ひてこそは、處分め候はむとぞ思ひ候ふ、されば御心にあるべからむやうに言はせよかし、何事も隔心なく、疎からず承

はらむばかりこそ、本意叶ふことにては候はめ、
など、眞實だちたる事どもを申し給ふ、故宮の御忌日に、經佛など、この中、君も供養じ給ふべきなるめり、かやうなる序に託けて、中、君はやをら宇治へも籠り居なばや、と、面向け給へる氣色なれば、中納言は、

(薫) 山住の御心向けは、いとあるまじきことなり、尙何事も心長閑に思し成せ、

など教へ申し給ふ、日差し昇りて、人々參り集りなどすれば、中納言は、餘り長居も事有り貌ならむにより、出で給ひなむとて、(薫) 何方にても、かく御簾の外に伺候ふことは、習ひ候はぬを、君ばかり外様に會釋ひ給へば、不都合き心地してぞ候ふ、今またかやうにしても伺候はむ、

侍別當○こ
れは宮侍の
長にて匂宮
の家司なり

とて、起ちぬ、中納言は、匂宮の、何とか我が居らぬ折には、彼
は來つらむ、と、思ひ給ひぬべき御心なるも、面倒はしくて、侍、
別當なる右京大夫召して、

(薰) 宮には、昨夜、禁中より退出でさせ給ひぬ、と、承知りて
参りつるを、また御歸邸なかりければ、口惜しきを、今より
内裡に参りてや對面仕るべき、

と言へば、右京大夫は、

(右) 宮には、今日は退出でさせ給ひなむ、

と申せば、中納言は、

(薰) さらば夕方にも参らむ、

とて出で給ひぬ、かくて中納言は、尚この中、君の御氣容有様を
聞き給ふ度毎に、何とて昔の大君の御心掟を持て違ひて、思ひ

限なく思ひ廻らして、中、君をば人に譲りけむ、と、後悔る心ばか
り勝りて、中、君の事の、心に懸りたるも、難澁しく、何ぞや人
遣ならぬ我が心ならむ、と、思ひ返し給ふ、さて大君亡くなり給
ひて後、中納言は、そのまゝ、未だ精進にて、いと、行法をばか
り爲給ひつゝ、明かし暮らし給ふ、母君女三宮は、尚いと若く
大樣きて、物志どけなき御心にも、御子中納言の、かゝる御氣
色を見給ひて、出家にてもしはせぬか、と、いと危く忌々しと思
して、

(三) 我身幾世しもあらじを、其方を見奉らむ間は、かひある
様にて見えさせ給へ、其方の世の中を思ひ捨て給はむをも、か
かる我が出家の身にては、妨げ申すべきにもあらぬを、此世
にては、尚さすがに言ふかひなき心地すべき心惑ひに、折角

幾世しも○
孟津抄に幾
世しもあら
じ我身をな
ぞもかく蛋
の刈る藻に
思ひ亂るゝ
とあり

六條院行
匂宮六君婚
儀

捨てたる世に、いと、罪業獲らむ、
と言ふが、辱く御氣の毒にて、中納言は萬事を思ひ消しつゝ、
女三宮の御前にては、物思ひなき様を作り給ふ、
夕霧左大臣には、落葉宮の住み給へる、六條院の東殿を、磨き
修飾ひて、限りなく萬事を整頓へて、匂宮を待ち申し給ふに、十
六日の月、漸々差異るまで、宮のおはさで待遠ければ、もしも
六君の、宮の御心に入らぬことにて、かくは遅くもおはしまさ
ぬにや、如何ならむと、安からず思して、使を遣りて案内し給
へば、使歸りて、

(使) 宮はこの夕方、内裡より出で給ひて、二條院にぞおはし
ますなる、

と申す、左大臣は、匂宮には二條院に、思す人持給へれば、と

心疾ましけれど、今宵過ぎむも、人笑なるべければ、御子の頭、
中將して、匂宮の方に申させ給へり、

(夕歌) 大空の、月だにやどる、我宿に、待つ宵過ぎて、見え
ぬ君かな、

匂宮は、今は却て中君に逢はずに、内裡より直に六條院へおは
さむと爲給へれど、それも中君に對して、氣の毒と思して、内
裡より中君へ、御文申し給へりけるを、御返事や如何ありけむ、
尙いと愍然に思されければ、御返事をも待たで、忍びて二條院
へ渡り給へりけるなり、かくて中君の可愛げなる有様を見捨て
ては、出づべき心地もせず、いとく、氣の毒なれば、萬事に契
りつゝ、慰め兼ねて、諸共に月を詠めておはする間なりけり、中
君は、日頃も萬事に思ふこと多かれど、いかで氣色に出さじ、と

大空の云々
○月さへ我
家にやどる
に君いまだ
見えすとて
頻に匂宮を
待つ意にて
元良親王の
大空の月だ
に宿に入る
もの心雲の
よそにも過
ぐる君かな
といふ歌を
少しくかへ
たるなり
慰め兼ねて
○古今集に
我心慰め兼
れつ更科や

姨捨山に照る月を見てあり

獨な月見給ひそよ○白氏文集贈内詩に莫對月明思往事損君顏色減君年とあり古今集に大方は月をもめてこれぞこれ積れば人の老となる物なとあり

○寄生

萬事に念じ返しつゝ、無情き様し給ふことなれば、今宵の御婚儀の事、別段に聞きも咎めぬ様に、大様に持成しておはする様いと哀なり、さて頭中將の參り給へるを、匂宮は聞き給ひて、さすがに彼の六君の待ち給ふらむも、いと氣の毒なれば、出で給はむとて、

(句) 今いと疾く參り來む、獨な月見給ひそよ、獨にては心空なれば、いと困し、

と申し置き給ひて、生傍痛ければ、何となく紛らし給ひて、物の隠れの方より、寢殿へ渡り給ふ、中君は宮の後手を見送るに、ともかくも覺えねど、唯枕の浮きぬべき心地のすれば、心憂きものは、人の心なりけり、と、我ながら思ひ知らる、幼稚き程より、心細く哀なる身どもにて、父宮の世の中を思ひ留めたる様

枕の浮きぬべき○拾遺集に涙川水まさればやしきたへの枕の浮きてとまらざるらむとあり

中君獨泣
空間

にもおはせざりし一所を頼み申させて、然る山里に年經しがど、唯何時となく徒然に物凄くはありながら、いとかく今のやうに、心に染みて世を憂きものとも思ひ知らざりしに、父宮姉君打續き亡れ給ひて、淺ましき御事どもを思ひし間は、世にまた生き留まりて、片時經へくも覺えず、戀しく悲しきことの、比類あらじと思ひしを、命長くて、今までも存生ふれば、他人の想像りし程よりは、匂宮に思はれ奉りて、人數にもなるやうなる有様を、とても長かるべき事とは思はねど、相見る限りは憎くげなき宮の御心はえ待遇なるに、漸々過去にし方の悲哀き物思も、薄らぎてありつるを、今回六君の御事につけて、身の憂さはまた言はむ方なく、宮の御契も、今は限りと覺ゆる業なりけり、一向世に亡くなり給ひにし、父宮姉君よりは、匂宮は此世におは

○寄生

姨捨山の月
○古今集の
歌前に掲ぐ

椎の葉○椎
本帖に蕭君
の立ち寄り
む蔭と頼み
し椎が本の
歌あり宇治
宮には椎の
木どもあり
しなるべし
山里の云々

すなれば、さりともこれは時々も相見奉ること、何とかはな
からむ、と、思ふべきを、今宵かく見捨て、出で給ふ無情さに、來
し方行く先、皆搔き亂り、心細くいみじきが、我心ながら、思
ひ遣る方なく、心憂くもあるかな、自然此世に長在へば、心を
我と慰めむこともあらむ、など思ふに、更に姨捨山の月ばかり、
空に澄み昇りて、夜闌くるまゝに、萬事思ひ亂れ給ふ、松風の
吹き來る音も、宇治の荒ましかりし山嵐に、思ひ比ぶれば、こ
の二條院はいと長閑に、懐かしく見善き御住居なれど、今夜は
さやうにも覺えず、宇治の椎の葉の音には劣りて覺ゆ、中君、
(中歌) 山里の、松の蔭にも、かくばかり、身に染む秋の、風
はなかりき、
と言ふも、今日の心辛さには、却りて昔の山里の憂さをば忘れ

○宇治の山
里にてもこ
れほど身に
染む秋風は
なかりきと
て京へ來て
却て物思を
する意を述
べたり
月見るは思
み候ふ○竹
取物語に或
人の月の顔
見るは思む
事と制しけ
れ共云々と
あり小町集
に獨寝の詠
ひしき時は
起き居つゝ
月を哀と思
みぞかれつ
るとあり

にけるにやあらむ、老女房などは、

(老女) 今は内に入らせ給ひね、月見るは忌み候ふものを、淺
ましく果敢なき御菓子をさへ御覽じ入れねば、如何に成らせ
給はむ、あな見苦しや、故大君の、かく物も食召さぬことあ
りて、忌々しく思ひ出でらるゝことも候ふを、いとこそわり
なけれ、

など言ふ、若き女房達は、

(若女) 心憂の世や、
と打歎きて、

(又) この宮の御事よ、さりともかくて疎略には、よもや成り
果て給はじ、然はいへど、元の志深く思ひ始めつる交情は、
名残なく絶え果つることはなきもので、

など言ひ合へるも、中君の心には、様々に聞きにくく、今は如何にもく、句宮の事は、詞に懸けて言はざらなむ、唯そのま
 ま差置きて、御心のまゝにしてこそ見め、と思さるゝは、他人
 には言はせじ、我獨恨み申さむ、とにやあらむ、故大君の時よ
 り、伺候ひ馴れたる女房どもは、

(女房) いでや中納言殿の、あれほど愛憐なる御心深さを、

など句宮に比較へつ、言ひ合せて、

(又) 大君の御宿世の、怪しかりけることよ、
 と言ひ合へり、句宮は、中君をばいと氣の毒には思しながら、色
 めかしき御心は、六君にもいかで愛甚き様に待ち思はれむ、と
 心懸想して、一通ならず焼き染め給へる御氣容、言はむ方なし、
 かくて宮の御入來を待ちつけ給へる六條院の有様も、いと面白

秋の夜なれど○花鳥餘情に長しとも思ひぞあへぬ昔より秋の夜なれど云々とあり
 句宮贈後朝文於六君

かりけり、さて宮は、六君の御様の、細小に幼少になどはあら
 で、宜き程に成り合ひたる心地し給へるを、御心に、如何なら
 む、物々しく鮮麗きて、心ばえも裊和なる方はなく、物誇りか
 になどやあらむ、然あらむこそうたてあるべけれ、など思せど、
 さやうなる御氣容にはあらぬにやあらむ、御志疎略なるべく
 も思されざりけり、かくて二人御寝りて、秋の夜なれど、闌け
 にしかばにやあらむ、間もなく明けぬ、句宮は二條院へ歸り給
 ひても、中君の居給ふ對の方へはふともえ渡り給はず、暫時寢
 殿に御寝りて、起きてぞ六君の方へは、後朝の御文書き給ふ、
 昨夜の六君の御氣色、怪しうはあらぬなるめり、と、御前の女房
 達膝衝き合ふ、

(女房) 西對の御方こそ御氣の毒なれ、宮の天下に遍き、何

方にも平等の御心なりとも、六、君は夕霧の殿、後見持て嘸し給ふに引かれて、對の君は自然消塵さるゝこともありなむかし、

など、皆中、君に馴れ奉仕りたる女房達なれば、尋常にもあらず安からず打言ふことどもありて、凡て尙妬げなる業にぞありける、宮は六、君の御返事も、寢殿にてこそは待ち見めと思せど、中、君の、夜の間の覺束なさも、平時の隔てよりは、今日はいかゞあらむ、と、格別に氣の毒なれば、急ぎ對の方へ渡り給ふ、宮の寢顔の御容貌、いと愛甚く見所ありて、入り給へるに、中、君は臥したるもうたてあれば、少し起き上りておはするに、終夜泣き明かし給へる名残にやあらむ、打赤み給へる顔の容韻など、今朝しも特に美しげさ勝りて見え給へば、宮もあへなく涙催まれ

て、暫時諦視り申し給ふを、中、君は耻かしく思して、打俯伏し給へるが、髮の懸り、額つきなど、尙いとまたと有り難げなり、宮も生不都合きに、詳細なることなどは、ふともえ言ひ出で給はず、宮は面隠し紛はし給ふにやあらむ、中、君に、

(句) などかくばかり惱ましげなる御氣色ならむ、御病惱も、暑き間の事とか言ひしかば、何時しかと涼しき頃を、待ち出でたるも、尙晴々しからぬは、見苦しき業かな、様々に祈禱せさすることも、怪しく効驗なき心地ばかりこそすれ、然はありとも、修法はまた延べてこそは善からめ、驗あらむ僧もかな、某の僧都をぞ夜居に伺候はすべかりける、などやうなる眞實言を言へば、中、君はかゝる方にも、宮の巧言は、氣に食はず覺え給へど、無下に返答申さゞらむも、例なら

ぬことなれば、

(中) 昔も怪しく人に似ぬ有様にて、かやうに煩ひし折は候ひしがど、自然いと能く平癒ること候ひしものを、祈禱などさするにも及び候はず、

と言へば、匂宮は、

(匂) いと能くこそ爽快なれ、

と打笑ひて、懐かしく愛敬づきたる方は、この中、君に雙ぶ女はあらじかし、と、思ひながら、尙又六、君の早くゆかしき方の心入られも立ち添ひ給へるは、六、君に、御志の疎略にもあらぬなるめりかし、されど中、君に對しては、見給ふ間は、御心變る差別もなきにやあらむ、後の世までも契り違へじ、と、誓ひ頼ませ給ふことどもの、盡させぬを聞くにつけても、中、君は、

命待つ間○
細流抄にあ
りはてぬ命
待つまのほ
とばかり憂
きこと繁く
歎かずもが
なとあり
懲りすまに
○孟津抄に
懲りすまに
またも仇名
は立ちぬべ
し人憎から
ぬ世にし住
まへばとあ
り

(中) 實に現世の契りは、いと短かゝるめる、命待つ間も、無情き御心は見えぬべけれど、後世の契りや違はぬこともあらむ、と、思ふにこそ、尙懲りすまに、またも頼まれぬべけれど、いみじく忍耐へたまふべかるめれど、え忍びあへぬにやあらむ、今日は泣き給ひぬ、さて中、君は、日頃も、いかでかく思ひけりと、宮には見られ奉らじ、と、萬事に思ひ紛らはしつるを、様々に思ひ集むること多かれは、さやうにはかりも、え持て隠されぬにやあらむ、涙飜れ始めては、頓にもえ猶豫ひ給はぬを、いと耻かしく詫びしと思ひて、甚く背向き給へば、匂宮は、強ひて中、君を我が方に引き向け給ひつゝ、

(匂) 其方は我が申すまゝに従ひて、愛憐なる御有様と見つるを、尙隔てたる御心こそ、持給ひけれな、然らずば一夜の間

に、御心思し變りにたるか、
 とて我が御袖して、中君の涙を拭ひ給へば、中君は、
 (中) 夜の間の心變りこそ、言ふにつけて、却て六君への御心
 移り、推量られ候ひぬれ、
 とて、少し含笑みぬ、宮は、
 (句) 實に吾君よ、幼稚の御物言ひなりや、されど我には、眞
 實には心の曲のなければ、いと心安し、眞實六君に心移らば、
 いかにいみじく言撰して修飾ひ申すとも、いと著かるべき業
 ぞ、其方の無下に世の道理を知り給はぬこそ、可愛きものな
 がら迷惑なれ、よし其方の御身になしても思ひ廻らし給へ、母
 中宮の是非なく申し勧め給ひければ、身を心ともせぬ有様に
 て六君へは通ひ始めたるぞかし、もし思ふやうなる世にもな

命ばかり○
 細流抄にえ
 ぞ知らぬ今
 こゝろみよ
 命あらば我
 や忘るゝ人
 や問はぬと
 とあり

海士の云々
 ○後撰集に
 何せむにへ
 たのみるめ
 を思ひけむ
 沖つ玉藻を
 かつく身に
 してとあり
 て苺和布
 に珍つらし

りて、我春宮にも立ちなば、其方を正妃にもして、人に勝り
 ける志の程も、知らせ奉るべき一節ぞ候ふ、されどこれは、
 容易く詞に出すべきことにもあらねば、命ばかりこそ、とか
 く長からでは、
 のたま
 と言ふ間に、六君へ奉り給へる御使、先方の待遇に、いと甚く
 酔ひ過ぎにければ、西對の方へ復命るは、少し遠慮るべきこと
 も忘れて、表向にこの中君のおはします、西對の南面に参れり、
 六條院の御祿、いと澤山くて、海士の苺めつらしき玉藻に、纏
 頭ぎ埋もれたるを、然やうなるめり、と、女房達見る、さて女房
 達は、何時の間に、宮は御文を急ぎ書き給ひつらむと見るも、安
 からずはありけむかし、宮も強に隠すべきにはあらねど、差寄
 り尙氣の毒なるを、御使の少しの用意はあれかし、と、生傍痛け

きかけ纏
頭に潜むか
け見るに海
松をかけた
り
六君返書

女郎花云々
○六君の物
思へる様を
見れば宮の
いかにおき
別れて歸り
給ひし名残
ならむとて
句宮の昨夜
の御心をお
ぼつかなく
思へる意な
り

れど、今はかひなければ、女房して六君よりの御返書、取り入
れさせ給ふ、さて御心に、六君の同じく隔てなき様に待遇し果
て、む、と、思して、御返書引き披け給へるに、養母落葉、宮の御
手跡なるめりと見ゆれば、中君の見むにも、今少し心安くて打
置き給へり、六君の自筆ならで、かく養母の書きたる宣旨書に
ても、中君の見むは、六君の爲に後めたの業よ、

(落文) 某代り書く賢らは、傍痛きにより、六君に勧誘し候へ
ど、いと悩ましげにて書き給はねばぞ、かくはものし候ふ、
女郎花、萎れぞ勝る、朝露の、いかに置ける、名残なるらむ、
貴やかに面白く書き給へり、句宮は、
(句) この文の託言がましげなるも、面倒しや、眞實は心安く
て、また思ふ人もなくて、暫時はあらむと思ふ世を、思の外

にもあることかな、

などは言へど、また女二人なくて、他心なきものに、一人に思
ひ習慣ひたる平人の間こそ、數多の女に移ふ、かやうなること
の恨めしさなども、傍より見る人も困しくはあれど、思へば宮
は平人のやうに、中君一人を守らむことはいと難し、終にはか
く二方に御心を分け給ふべき御事なり、一體句宮は、皇子達と
申す中にも、春宮の候補として、世の人筋異に思ひ申したれば、
女君幾人もく、得給はむことも、誹謗あるまじければ、世人
もこの中君を、大方氣の毒など思ひたらぬなるべし、句宮の中
君をば、あれ程物々しく傅き居る給ひて、氣の毒に思召す方、一
通ならず思したるをぞ、幸福おはしけると人は申す、中君自身
の心にも、宮の餘りに夜離なく習慣し給ひて、俄に不都合かる

へきが、歎かしきなるめり、中君は、是まで戀慕嫉妬など、か
 かる道を人は如何なれば淺からず思ふらむと、昔物語などを見
 るにも、人の身の上などにも、奇怪しく聞き思ひしは、實に
 一通なるまじき業なりけり、と、今は始めて我が身の上にな
 ぞ、何事も思ひ知られ給ひける、宮は平生よりも、愛憐に打解
 けたる様に待遇し給ひて、中君に、

(句) 無下に物食らざるこそ、いと悪しけれ、

など言ひて、由緒ある御菓子など召し寄せ、また然るべき料理
 方の人召して、事更に調せさせ給ひなどしつゝ、勸食し申し給
 へど、中君はいと食遠くばかり思したれば、宮は心に、見苦し
 き業かな、と、歎き申し給ふに、日暮れぬれば、六君の方へおは
 せむとて、夕方寢殿へ渡り給ひぬ、風涼しく、大方の空面白き

蛸の○古今
 集に蛸の鳴
 つるなへに
 日は暮れぬ
 と思ふは山
 の陰にぞあ
 りけるとあ
 り

頃なるに、宮は當世めかしきに進み給へる御心なれば、いとゞ
 しく艶なるに、物思はしき中君の御心の中は、萬事に忍び難き
 ことばかりぞ多かりける、蛸の鳴く聲にも、宇治の山陰ばかり
 戀しくて、

(中歌) 大方に、聞かましものを、蛸の、聲うらめしき、秋の
 暮かな、

と獨言ち給ふ、句、宮は今夜は六君の方へ早くおはさむとて、ま
 た夜更けぬに、出で給ふなり、中君は、宮の御前駈の聲を聞く
 に、遠くなるまゝに、御涙は蛸も釣するばかりになるも、我な
 がら嫉妬の念の、憎き心かな、と、思ひく、聞き臥し給へり、最
 初より句、宮の、物を思はせ給ひし有様などを、思ひ出るも疎ま
 しきまで覺ゆ、この懷妊しき事も如何ならむとすらむ、母君も

○孟津抄に
 戀をして音
 をのみ泣け
 ば敷妙の枕
 の下に蛸ぞ

釣するとあ

姉君も、いみじく命短き族なれば、出産の序にもや、やかで果
 敢なく成りなむとすらむ、など、思ふには、敢て惜しからぬ命な
 れど、悲しくもあり、出産などにて亡せては、罪業深くもある
 なるものを、など、眠まれぬまゝに、思ひ明かし給ふ、
 その日は明石、中宮、惱ましげにおはしますとて、誰もく参り
 集ひ給へれど、少許なる御風邪におはしましたければ、別段なる
 こともおはしませずとて、夕霧左大臣は、晝退出で給ひにけり、
 薫中納言をば誘ひ申し給ひて、御同車にてぞ、退出で給ひにけ
 る、六條院にては、今宵の六君の三日夜の儀式如何ならむ、左
 大臣は清らを盡さむと思すべかるめれど、限りあらむかし、左
 大臣は、この中納言に對しては、一旦六君を面向けて、承引き
 給はざりければ、心耻かしけれど、親しき方につけては、腹こ

行ニ六君婚
禮三夜式

招待薫中
納言

そ異なれ、男兄弟の中には、此人を差置きては、またと然るべ
 き人もおはせざれば、今宵の酒宴の、物の光榮にせむに、心特
 別にもまたおはする人なれば、かくは誘引ひ申して退出で給ふ
 なるめりかし、中納言は例ならず急がしく、六條院に詣で給ひ
 て、最初六君をば我にとありしを、今は人の御上に見成したる
 も、口惜しとも思へらず、何やかやと、主人公と諸心に扱ひ給
 へるを、左大臣は却て人知れず、生妬しとぞ思しける、宵少し
 過ぐる間に、匂宮はおはしましたり、寢殿の南の廂、東に倚り
 て、御座所設れり、御臺八基、例の御器など、端麗しげに清ら
 にて、また小き臺二基に、花足の器ども、いと當世めかしく爲
 させ給ひて、餅參らせ給へり、例の珍しからぬこと書き置く記
 者こそ憎けれ、さて左大臣渡り給ひて、

(夕) 夜甚う更けぬるを、宮にはまたか、
 とて女房して、此方へ誘引し申し給へど、宮は六君の方にて、いと洒落れおはして、頓にも出で給はず、左大臣の北方の御兄弟の、左衛門督、藤宰相などはかりものし給ふ、宮は辛うじて出で給へる御様、いと見るかひある心地す、主人の子息の頭、中将、御盃捧げて、御臺参る、次々の御蓋二度三度参り給ふ、源中納言の甚く宮へ御酒勧め給へるに、宮少し含笑み給へり、曩に、この院の面倒しき邊に取籠められては、と、相應しからず思ひて、中納言に言ひしを、思し出で、かくは含笑み給へるなるめり、されど中納言は、見知らぬやうにて、いと實體なり、かくて中納言は、東の對に出で給ひて、匂宮の御供の人々を、持て囃し給ふ、勢望ある殿上人どもいと多かり、其等の人々に、何れも祿

女の装束云々○女の装束は尋常の裳唐衣等にこれに細長を添ふるなり細長は貴女の着るもの故に別に添ふ此にも二通ありて織物の細長は上等にて次は綾なり六位の方に綾の細長とあるこれなり
 召次舍人○親王家に召次あり舍人は御廩舍人なり

賜ふ、四位六人には、女の装束に細長を添へ、五位十人には、三重襲の唐衣、裳の腰も皆差別あるべし、六位四人には、綾の細長、袴など、纏頭けて、且は法令の限りあることを、飽かず思しければ、物の色爲様などをぞ、清らを盡し給へり、尙召次、舍人などの中に、亂りがはしきまで、祿嚴重めしくぞありける、實に賑はしく花やかなることは、見るかひあれば、この物語などにもまづ言ひ立てたるにやあらむ、されど記者も詳細しくはえ敷へ立てざりけるとかや、中納言の御前駈の中に、生勢望鮮ならぬ者や、闇き紛れに立ち交りたりけむ、中納言の御供して歸りつゝ、打歎きて、

(供人) 我殿の、などか尋常に、この左大臣殿の御婿に、打成らせ給ふまじき、味氣なき御獨住なりや、

薰君歸二臥
三條宮

と中門の下にて呷きけるを、中納言聞き付け給ひて、可笑とぞ
 思しける、またこの供人どもは、夜の闌けて睡たきに、
 (供衆) 彼の持て傳かれける匂宮の御供の衆どもは、今頃は愉
 快げに酔ひ亂れて、倚り臥しぬらむ、
 と、羨ましきなるめりかし、中納言は、三條宮に入りて臥し給
 ひて、心に、今宵の酒宴、不都合き業かな、仰山しげなる様し
 たる親爺の出で居て、宮とは離れぬ親族しき間柄なれど、此彼
 火明く挑げて、勧め申す盃などを、宮はいと見善く持成し給ひ
 しかな、と、宮の昨夜の御有様を、見善く思ひ出で奉り給ふ、さ
 て實に我にても、もし善しと思ふ女子を持たらましかば、この宮
 にこそ奉らめ、この宮を差置き奉りては、内裡にさへえ進らせざ
 らましと思ふに、誰もく宮に奉らむと志し給へる女子をば、尙

源中納言にこそ奉らめ、と、一人々に言ひ並ぶなるこそ、我が
 勢望の口惜しくはあらぬなるめれ、さるは我のいと餘り世馴れ
 ず古めきたるものを、など、心驕りもせらる、今上の、女二宮を
 我に、と、御氣色ある事、眞實に然思したらむに、かく世離れて
 ばかり物憂く覚えは、如何すべからむ、面目しきことにはあり
 とも、それも如何はあらむ、さるをその女二宮の、故大君にい
 と善く似給へらむ時には、いかに嬉しからむ、と、思ひ寄らる
 るは、さすがに世の中にはえ持て離るまじき心なるめりかし、
 さて中納言は例の寢覺がちななる徒然なれば、母宮女三に侍ふ女
 房按察君とて、他人よりは少し思ひ増し給へるが局におはして、
 その夜は明かし給ひつ、明け過ぎたらむを、人の咎むべきにも
 あらぬに、困しげに急ぎ起き給ふを、按察君尋常ならず思ふべ

打渡し云々
○君は夜深
く急ぎ給へ
どさやうに
人目を憚る
べきにもあ
らずそれも
我が身數な
らればなる
べしとて見
馴れに水價
れをかけた
り
深からず云
々○表面は
浅く見ゆれ
ど裏面は絶
ゆまじとて
元良親王の
浅くこそ人
は見るとも
關川の絶る
心はあらじ
とぞ思ふの

かるめり、

(按歌) 打渡し、世にゆるしなき、關川を、みなれそめけむ、名こそ惜しけれ、

とて、いと美しければ、中納言、

(薰歌) 深からず、上は見ゆれと、關川の、下の通ひは、絶ゆるものかは、

と言ふ、深しと言はむにてさへ、頼もしげなきを、この上の浅さは、按察、君もいと、心疾ましく覺ゆらむかし、中納言は妻戸を推開けて、

(薰) 眞はこの空を見給へ、いかでかこれを知らず貌にては明かさむと思すよ、艶なる人眞似にはあらで、いど、明かし難く成り行く夜々の寢覺には、現世後世までぞ思ひ遣れて哀なることよ、

歌によれり

ることよ、

など、言ひ紛はしてぞ出で給ふ、この中納言別段に風流しき事の數を盡さねど、自然様の艶めかしきは、傍よりの見成にやあらむ、情なくなどは人に思はれ給はず、假始の戯言をも、言ひ初め給へる中納言の、氣近くてなりとも見奉らばやとばかり思ひ申すにやあらむ、世の女どもは、強に世を背き給へる、入道女三宮の御方に、それく縁を尋ねつゝ、参り集りて伺候ふも、皆この中納言おはすが爲にて、その女どもにつけては、身分に分につけつゝ、可憐なる事ども多かるべし、

句宮は六君の御有様を、晝見申し給ふに、いと、御志勝りにけり、六君は大き宜き程にて、様體いと清げなるに、髪の下り端、頭つきなどぞ、人より特にあな愛甚と見え給ひける、色合

句宮傾心
六君

親の身にて
は○人の親
の心は闇に
あられども
子を思ふ道
に惑ひぬる
かな前帖に
引けり

餘りなるまで打匂ひて、物々しく氣高き顔の、目つきいと耻かしげに、愛々しく、凡て何事も満足ひて、容貌美き人と言はむに、飽かぬ所なし、年齢は二十に一二ぞ餘り給へりける、幼稚き程ならねば、片成に不足ぬ所なく、鮮明に盛りの花と見え給へり、況して左大臣の限りなく持て傳き給へるに、更に不十分ならず、實に親の身にては、心も惑はし給ひつべかりけり、唯柔に愛敬づき可愛きことは、彼の中、君をぞまづ思し出でられける、六君の物言ふ返答なども、耻らひ給へれど、また餘り覺束なくはあらず、凡ていと見所多く、才々しげなり、美き若女房どもも三十人ばかり、女童六人、不十分なるまじく、装束なども例の美麗しきことは、匂宮は目馴れて思さるべかるめれば、引き違ひ、心得ぬまで、好み過し、數奇を盡し給へり、左大臣は

三條殿雁井の腹なる大姫君を、春宮に參らせ給へるよりも、この六君をば、いと特別に思ひ掟て申し給へるも、匂宮の御勢望ありさま有様からなるめり、かくて後、二條院なる中、君の方には、匂宮は心安くもえ渡り給はず、輕らかなる御身ならねば、心に思すままに晝の間なども、え出で給はねば、やがて昔おはし、六條院の南町に、年頃ありし様に住みおはしまして、日暮るれば、また六君を引き避ぎても、二條院へえ渡り給はずなどして、待遠なる折々あるを、中、君は心に、かゝらむずること、は思ひしがど、差當りては、いとかくも名残なくやはあるべき、實に心あらむものは、數ならぬ我身わがみを知らで、交際ふべき世にもあらざりけり、と、返すくも、宇治の山路分け出でけむ程、現とも覺えず、後悔しく悲しければ、尙いかで忍びて宇治へ渡りなむ、無下に

中君欲し歸
宇治贈書
薫君

宮を背く様にはあらずとも、暫時古里にて心をも慰めばや、此方より、憎げに待遇しなどもせばこそ、うたてもあらめ、など、心一つに思ひ餘りて、耻かしけれど、中納言に御文奉り給ふ、
 (中文) 故宮の法事の、一日の御事は、阿闍梨の申し傳へたりしにより、委細しく承知り候ひにき、君がかゝる御芳心の、餘波なからましかば、亡き人の御爲、いかにいとほしからむ、と、思ひ候ふ、それにつけても君が御志の、一通ならずばかりあるを、いと嬉しく思ひ申し候ふ、されば自分も親しく御禮申さばやとこそ思ひ候へ、
 と申し給へり、陸奥紙に、引きも修はず、眞實だちて書き給へるも、いと美しげなり、故宮の御忌日に、中納言の、例の御法事ども、いと尊く爲させ給へりけるを、喜び申し給へる様の、仰

山しくはあらねど、中君の實に思ひ知り給へれば、かく申し、なるめり、中納言は、例は此方より奉る御文の御返事をさへ、中君には、打解けず慎ましげに思ひ、確乎しくも書き續け給はぬを、此度は先方より、自分とさへ言ひ越し給へるが、珍しく嬉しきに、心動悸も爲ぬべし、さて心に、宮の、六君に、當世めかしく好み立ち給へる間にて、中君へは思し怠りにけるも、實に氣の毒に推量らるれば、いと哀にて、中納言は艶書めきて風流やかなることなき中君の御文を、打も置かず、引き返し々々見居給へり、御返事は、
 (薰文) 承知りぬ、一日の御法事は、聖めきたる様にて、故意に忍び候ひしも、此事表面に沙汰し候へば、君には宇治へものし給ふべき由言はむかと、かく忍びてぞ執行はせ候ふ、こ

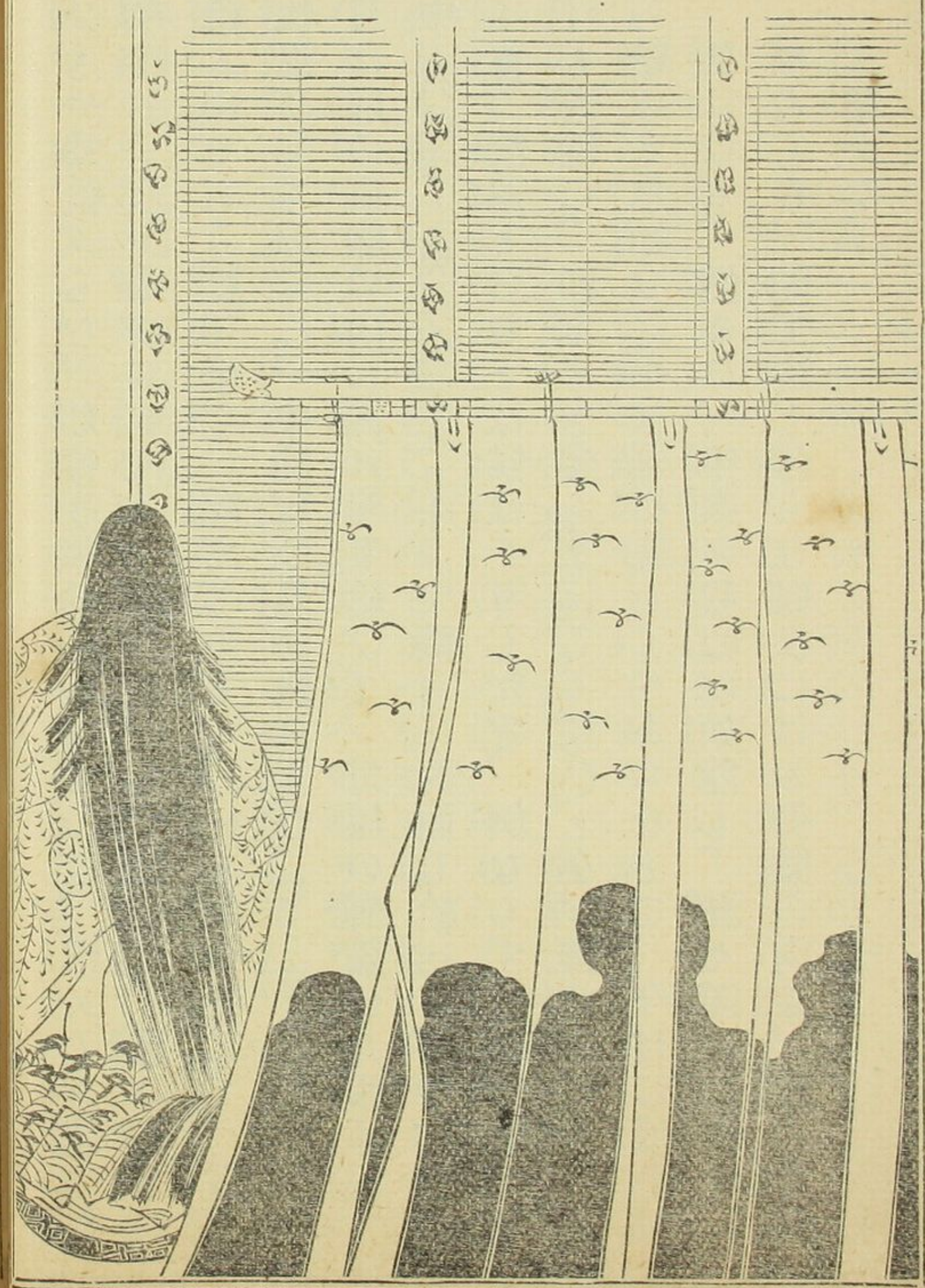
薰君參二
條院面中
君一

れも實は君への心寄に執持候ひしを、元の餘波と言はせたるこそ、少し御心の淺くなりたるやうにと、恨めしく思ひ候はるれ、萬事は今伺候ひてこそ申さめ、あなかしこ、と質直に、白き色紙の剛々しきにてあり、かくて中納言は次の日の夕方ぞ、二條院の西對へ渡り給へる、中納言は中君へ、人知れず思ふ心ぞ添ひたれば、甚く心遣ひせられて、柔和なる御衣どもを、いと、薰物に匂はし添へ給へるは、餘り仰山しきまであるに、丁子染の扇の持馴らし給へる移り香などさへ、譬へむ方なく愛甚し、中君も山里にて一夜添臥せし、怪しかりし夜の事など、思出で給ふ折々なきにしもあらねば、中納言の、眞實やかに、可憐なる御心ばえの、宮にも似ずものし給ふを見るにつけて、さても此人に相添ひてもあらましを、とばかりは思

ひもや爲給ふらむ、幼稚き年齢におはせねば、恨めしき宮の御有様を、思ひ比較ふるには、何事もいと、此上なく思ひ知られ給ふにやあらむ、平生に隔て多かるも、いと氣の毒にて、我の物思ひ知らぬ様に、中納言の思ひ給ふらむ、など思ひ給ひて、今日は廂の御簾の内に入れ奉り給ひて、母屋の御簾に几帳添へて、中君は少し奥に引き入りて、中納言に對面し給へり、中納言は、
(薰) 故意と召しとは候はざりしがど、例ならず許させ給へりし喜悅に、即刻にも參らまほしく候ひしを、宮此方に渡らせ給ふと承知りしかば、折悪しくやあらむとて、今日に成し候ひにける、然るに、年來の我心の効能も、漸々顯はれ候ふにやあらむ、隔て少し薄らぎ候ひにける御簾の内よ、珍しく候ふ業かな、

薰中納言對
面中君圖

○寄生



百四

○寄生



百五

と言ふに、中君は尙いと耻かしく、言ひ出でむ言の葉もなき心地すれど、

(中) 一日故宫の法事の、嬉しく聞き候ひし心の中を、例の唯心にばかり思ひ結ばれながら過ぐし候ひなば、思ひ知る片端をなりとも、いかでかは君に知らせ奉らむと、口惜しきにかくは、

と憤ましげにはかり言ふが、甚く奥に退きて、絶々微に聞ゆれば、中納言は待遠くて、

(薫) いと遠くも候ふかな、眞實やかに申させ承はらまほしき世の物語も候ふものを、

と言へば、中君も實に道理と思して、少し身動き寄り給ふ氣容を、中納言は聞き給ふにも、ふと胸打潰るれど、然りげなく、い

と、鎮めたる様して、

(薫) 宮の御心ばえ、案外に浅くおはしけりと思しく、且は宮を言ひ疎めもし、また君を慰めもし奉りて、方々に静々と扱ひ申さむ、

と申し給ひつゝおはす、中君は宮の御恨めしさなどは、打出で語らひ申し給ふべきことにもあらねば、唯世やは憂き、などやうに思はせて、言寡に紛はしつゝ、彼の山里に、寸時に渡し給へ、と思しく、いと懇切に思ひて言ふ、中納言は、

(薫) 宇治にもものし給ふことはしも、我心一つに任せては、え奉仕るまじきことに候ふなり、尙宮に、心睦しく申させ給ひて、その御氣色に従ひてぞ善く候ふべき、然らずば、少しも違目ありて、心輕くもなど宮の思しものせむに、いと悪しく

世やは憂○
細流抄に世
やは憂き人
やはつらき
海士の茹る
藻に住む虫
の我からぞ
うきとあり

ものにもか
なや○河海
抄に取返す
ものにもか
なや云々と
あり

候ひなむ、然うさへなくば、道の程の御送迎も、某下り立ち
 て奉仕らむに、何の憚かは候はむ、後安く世人に似ぬ我が心
 の程は、宮も皆知らせ給へり、
 などは言ひながら、折々は過ぎにし方の後悔しきを、忘るゝ折
 なく、ものにもがなや、と、取返さまほしき様など、微言しつゝ、
 漸々昏くなり行くまでおはするに、中、君はいと煩く覚えて、
 (中) 然らば心地も惱ましくばかり候ふを、また快しく思ひ候
 はむ間に、何事も申さむ、
 とて奥へ入り給ひぬる氣色なるが、いと口惜しければ、中納言
 は、引き留めむの心にて、
 (薰) さても宇治へは何時ばかりにか思し立つべきにかあらむ、
 いと茂く候ひし道の草も、少し打拂はせ候はむかし、

薰君強入
簾内

と氣嫌取りに申し給へば、中、君は暫時入り止して、
 (中) この月は過ぎぬへかるめれば、九月の初旬の間にも出で
 立たむとこそは思ひ候へ、唯いと忍びてこそは善からめ、何
 か宮の御許を聞くなど、仰山しくはせむ、
 と言ふ聲の、いみじく可愛げなるかな、と、中納言は平生よりも
 昔の大君思ひ出でらるゝに、え包みあへで、倚り居給へる柱の
 下の、簾の下より、やをら及びて、中、君の御袖を控へつ、中、君
 は、さればよ、あな心憂と思ふに、何事かは言はれむ、物も言
 はでいと、引き入り給へば、中納言は引かれ給ふにつれて、い
 と馴れ貌に、半身は簾内に入りて添ひ臥し給へり、
 (薰) 言ひしにあらずや、いと忍びてこそ善からめと、その忍
 びては善かるべく思す御心を、嬉しく我身に聞き取りしは、

辟耳か、と聞き定めむとて、かくは入り候ふぞ、前にもかく添
臥し奉りつれば、疎々しく思すべきにもあらぬを、心憂の御氣
色よ、

と恨み給へば、中君は返答すべき心地もせず、思はずに憎く思
ひなりぬるを、強て思ひ慎めて、

(中) 思の外なる御心の程かな、人の思ふらむことよ、淺まし
と憎めて、泣きぬべき氣色なるを、中納言は、これも少しは道
理なれば、いと氣の毒なれど、

(薫) これは咎ある程の事は、これ程の對面は古宇治にての
事をも思し出でよかし、過ぎにし大君の御許可もありしもの
を、いと此上なく思されにけるこそ、却てうたてあれ、好色
好色しく案外しき心はあらじ、と、心安く思せよ、

とて、いと長閑に待遇し給へれど、月頃後悔しと思ひ渡る心の
中の、困しきまで成り行く様を、つぶくと言ひ續け給ひて、
手放すべき氣色にもあらぬに、中君は爲む方なく、いみじと言
ふも尋常なり、無下に心知らざらむ人よりも、この中納言は平
生に心知れ、ば、却て耻かしく、氣に食はで、泣き給ひぬるを、
中納言は、

(薫) これは何ぞ、あな若々し、

とは言ひながら、言ひ知らず可愛げに、氣の毒なるものながら、
用意深く耻かしげなる氣容などの、前に見し程よりも、此上な
く壯び勝り給へりけるなどを見るに、我心から餘所人に爲成し
て、かく安からず物を思ふことよ、と、後悔しきにもまた實に音
は泣かれけり、近く侍ふ女房二人ばかりあれど、不意なる男の

後悔しきに
も○六帖に
神山の身の
うの花の時

鳥くやしく
もげに音を
のみぞ泣く
とあり

○寄生

入り來たるならばこそは、これは如何なる事ぞとも參り寄らめ、
中納言は、中君とは、かく疎からず申し給ふ御交情なるめ
れば、然る様こそはあらめ、と思ふに、傍痛ければ、知らず貌
にてやをら退きぬるぞ、中君の爲にはいと氣の毒なるよ、中納
言は、古を後悔る心の忍び難きなども、いと鎮め難かりぬべか
るめれど、昔山里にて添臥したる時さへ、實事あり難かりし
御心の用意なるに、況して今はかく宮の御方と定まりぬれば、
尙いと思のまゝにも待遇し申し給はざりけり、かやうの筋は、
詳細にも記者は、得ぞ學び續けざりける、中納言は實事もなく
かひなきものながら、人目のあへなきを思へば、萬事に思ひ返
して出で給ひぬ、また宵と思ひつれど、曉近くなりけるを、見
咎むる人もやあらむ、と、中納言は面倒しく思ふも、中君の御爲

のいと氣の毒なる故ぞかし、さて心に、中君の懷妊にて、惱ま
しげに聞き渡る御心地は道理なりけり、いと耻かしと思ひ給へ
りつる着帶の効に、多くは氣の毒に覺えても止みぬるかな、例
の愚痴がまし心の心よと思へど、押立ちて情なからむことは、尙
いと本意なかるべし、また忽の我心の亂に任せて、無理なる心
を使ひては、後に折重ねて心やすく相逢ふことも、えあらざら
むものながら、是非なく忍び歩かむ間も、心盡しなるに、中君
の方々思し亂れむことも氣の毒よ、など、賢しく思ふに堰止めら
れず、今の間も戀しきぞ是非なかりける、かくて中納言は、中
君を見ずしては、更に世にえあるまじく覺え給ふも、返すく
生憎なる心なりや、中君の昔よりは少し細やぎて、貴に可愛か
りつる氣容などは、中納言は面影に立ち離れたりと覺えず、

○寄生

薰君贈書
中君
徒に云々○
今朝も徒に
歸りしに昔
空しく添臥
せしことを
も思ひ出つ
るとなり
道理知らぬ
○孟津抄に
身を知れば
恨みぬもの
なぞかく
もことわり
しらぬつら
さなるらむ
とあり

身に添ひたる心地して、更に他事も覺えずなりにけり、中、君は
宇治にいと渡らまほしげに思し給ふめるを、然やうにもや渡し
申してましなど思へど、宮は正に許可し給ひてむや、さりとして
忍びて渡し申さむは、またいと便なからむ、如何様にしてかは、
人目見苦しからで、思ふ心の適くべき、など、心もあくがれて、
詠歎め臥し給へり、またいと深き朝に御文あり、例の表面はい
と潔白なる豎文にて、

(薰歌) 徒に、分けつる道の、露繁み、昔覺ゆる、秋の空かな、
御氣色の心憂さは、道理知らぬ辛苦さはかりぞ、申させむ方
なく候ふ、

とあり、中、君は、御返事なからむも、女房どもの、例ならず見
咎むべきを、いと困しければ、

(中文) 承知りぬ、いと惱ましくて、御返事もえ申させず候ふ、
とばかり書き給へるを、中納言は、餘り言寡なるかな、と、物寂
しくて、美しかりつる御氣容ばかり、戀しく思ひ出でらる、さ
て心に、中、君は少し男女間をもし知り給へる故にやあらむ、あれ
程淺ましくわりなしとは思ひ給へりつるものながら、一向に疎
疎しくなどはあらで、いと愛々じく耻しげなる氣色も添ひて、
さすがに懐かしく言ひ作へなどして、出し給へる間の御心はえ
などを、思ひ出るも、妬くも悲しくも、様々に心に懸りて、詫
しく覺ゆ、中、君の、何事も古には、いと多く勝りて思ひ出でら
る、何かは、この匂、宮、離れ果て給ひなば、中、君は我を頼もし
人に爲給ふべきにこそはあるめれ、それにつけても、表面に顯
して心安き様にはえあらじを、忍びつゝまた他に思ひ増す人な

句宮渡三二
條院

き、心の底止にてこそはあらめ、など、中納言は唯この中、君の事ばかり、胸につと覺ゆるぞ、怪しからぬ心なるよ、さて中納言は、あれ程心深げに賢しがり給へど、男といふもの、心憂かりけることには、亡き大君の御悲哀さは、言ふかひなき方にて、いとかく困しきまではなかりけり、この中、君については、萬事にぞ様々思ひ廻らされ給ひける、今日は二條院へ、宮渡らせ給ひぬ、など、人の言ふを聞くにも、中納言は後見の心は失せて、胸打潰れて、いと羨ましく覺ゆ、

句宮は、二條院へ渡り給はで、月頃になりけるは、我が御心さへ恨めしく思されて、俄に此方へ渡り給へるなりけり、中、君は心に、何かは心隔てたる様にも見られ奉らじ、山里にと思ひ立つにも、頼もし人に思ふ中納言も、うたて疎ましき心添ひ給

へりけり、と、見給ふに、世の中いと所狭く思ひ成られて、尙いと憂き身なりけり、唯消えせぬ間は、世に在るに任せて、宮の待遇すまゝに、大様にてあらむ、と、思ひ果て、いと可愛げに、心睦しき様に、持成して居給へれば、宮はいと、愛憐に嬉しく思されて、日頃の無沙汰など、限りなく言ふ、中、君は御腹も少し膨脹かになりたるに、彼の中納言に耻ぢ給ふ標の着帯の、引き結はれたる程など、いと哀に、宮はまたかゝる懷妊の人を、氣近くても見給はざりければ、珍しくさへ思したり、六君の打解けぬ所に習慣ひ給ひては、中、君の、萬事心やすく、懷かしく思さるゝまゝに、一通ならぬ事どもを、盡きせず言ひ契るを、中、君は聞くにつけても、男は何れもかくばかり巧言き業にやあらむ、と、無理なりつる中納言の御氣色も思ひ出でられて、彼の中

納言は、年來可憐なる御心ばえとは思ひ渡りつれど、かゝる懸想の方様あるにつけては、哀情もあるまじきこと、思ふにぞ、この匂宮の御行末の依頼は、いでや如何とは思ひながらも、差當り中納言よりは少し耳留りける、それにつけても彼の中納言は、浅ましく油断させく入り來りしことよ、昔の大君には全く實事なく、疎くて過ぎにし事など語り給ひし心ばえは、實にあり難けれど、それにても尙打解くべくあらざりけりかし、など、中君は愈心遣ひせらるゝにも、宮の久しく問絶え給はむには、またその間に、如何なる事のあらむ、と、いと物恐しかるべく覺え給へば、詞に出で、は言はねど、過ぎぬる方よりは、宮に少し纏綿し様に待遇し給へるを、宮はいど、限なく愛憐と思したるに、中君には彼の中納言の御移香の、いと深く染み給へ

匂宮疑中
君移香

るが、尋常の香の香に入れ、焼き染めたるにも似ず、著き匂ひなるを、この匂宮は香の道また好色の方に、深く心を懸け給ふ人におはすれば、奇怪と咎め出で給ひて、
(匂) 此は如何なりしことぞ、
と氣色取り給ふに、中君は、中納言に添臥せられて、事の外に持て離れぬことにしあれば、言はむ方なく迷惑くて、いと困却と思したるを、宮は御心に、さればよ、必然る事はありなむ、よもや中納言も尋常には思はじと、常に思ひ渡ることぞかし、と御心騒ぎけり、さるは中君は單の御衣なども、脱ぎ替へ給ひてげれと、怪しく案外にぞ、中納言の移香の、身に染みにける、
宮は、
(匂) これほどの移香にては、中納言との事、残る所なくあり

我こそ先に
○六帖に人
よりは我こ
そ先に忘れ
なめつれな
きをしも何
か頼まむと
あり
また人に云
々○我の外
にまた他人
に馴れ染め
ける君が袖
の香を身に
しみて思ひ
しもをこな
りしよとて
薫君の移香
を咎めたる
にてうらみ
は袖の縁に
いへり

しならむ、
と、萬事に聞き悪く言ひ續くるに、中、君は心憂くて、身ぞ置き
所なき、

(句) 其方をば思ひ申す様特別なるものを、たとひ我六君に通
ひたればとて、我こそ先に、など、直に打背きて、かやうに他
人に面向くなどは、いと軽々しく、分際異にこそあれ、また
我とても、御心置き給ふ程の久しき夜離れやはする、思の外
に憂かりける御心かな、

と、凡て眞似ぶべくあらずばかり、いとく氣の毒に申し給へ
ど、中、君は、右も左も返答へ給はぬさへ、宮は妬くて、

(句歌) また人に、なれける袖の、移香を、我身に染めて、う
らみつるかな、

と言ふ、中、君は、宮の淺ましく言ひ續くるに、言ふべき方もな
く、

(中) いかでかくは恨み給ふ、
とて、

(中歌) みなれぬる、中の衣と、頼みしを、かばかりにてや、

懸け離れなむ、

と言ひて、打泣き給へる氣色の、限なく哀なるを見るにも、宮
は御心に、かゝればこそ中納言も心を懸くるぞかし、と、いとバ
心疾ましくて、自分もほろくと涙飜し給ふぞ、色めかしき御
心なるよ、中、君の、たとひ眞にいみじき過失ありとも、一向に
は得ぞ疎み果つまじく、可愛げに氣の毒なる様のし給へれば、
宮は得も恨み果て給はず、言ひ中止つゝ、且は誘調へ申し給ふ、

みなれぬる
云々○今ま
で君と相親
みし交情を
唯こればか
りの事にて
中を絶やす
べきことか
とてかばか
りは唯これ
ばかりとい
ふに唯移香
の一點にて
といふをか
けたり

瞿麥の細長
○表紅梅に
裏青なり

翌日も、宮は、心長閑に御寝り起きて、御手水、御粥なども、この二條院の西對にて進らす、六條院の六君の方の御修飾なども、あれ程に輝くばかり、高麗唐土の錦綾を、裁ち重ねたる目移には、この中、君の方は、尋常に打慣れたる心地して、女房達の姿も、萎ばみたるもの、打混りなどして、いと靜に見廻さる、中、君は柔和なる薄紫色どもに、瞿麥の細長重ねて、打亂れ給へる御様の、何事もいと端麗しく、仰々しきまで盛りなる六君の御粧ひ、何くれに、思ひ比ぶれど、中、君の氣劣りても覺えず、懐かしく美しきは、宮の志の一通ならぬに、愧ちざるなるめり、さて中、君の圓く美しく肥え給へりし身の、少し細やぎたるに、顔色は、彌、白くなりて、貴に美しげなり、宮は御心に、かゝる御移香などの、著からぬ折さへ、中、君は愛敬づき可愛き所などの、

尙地人には多く勝りて覺ゆるまゝには、これを見兄弟などにはあらぬ人の、氣近く言ひ通ひて、事に觸れつゝ、自然聲氣容をも聞き見馴れむは、いかでか尋常にも思はむ、必その間怪し、と思ひ寄りぬべきことなるものを、と、我が心いと隈なき御心習慣に、思し知らるれば、平生に心を懸けて、その形迹著き様なる艶書などあるや、と、近き御厨子、小唐櫃などやうの物をも、然りげなくて見給へど、然る艶書もなし、唯いと質直に詞寡にて、正直しき文などぞ、故意とはなけれど、物に取り混ぜなどしてもあるを、宮は、怪し、尙いとこればかりにはあるまじ、と、常に疑はるゝに、今日は特別にいと、安からず思さるゝ、道理なりかし、彼の中納言の氣色も、心あらむ女の、可憐と思ひぬべきをば、何とてかは事の外には差放たむ、されば中納言と中、君

薰君贈衣類於中君以下女房

とは、いと好き配偶なれば、互にぞ思ひ交すらむかし、と、宮は疑はしく思ひ遣るぞ、詫しく腹立たしく妬かりける、かくて尙いと安からざりければ、その日も二條院をばえ出で給はず、六條院へは御文をぞ二度三度奉り給ふを、此方の老女房どもは、何時の間に積る御言の葉ならむ、と、咄くもあり、

中納言は、匂宮のかく二條院に籠りおはするを聞くにしも、心疾ましく覺ゆれど、是非なしや、これも我心の愚痴がましく悪しきぞかし、中君の爲に、後安くと、思ひ始めてしものを、かやうの仇なる心は、持つべしやは、と、強てぞ思ひ返して、かく妬くはあるものゝ、宮には、中君をば思し捨てざるめりかし、と思ふには嬉しくもあり、さて中君の方に伺候ふ女房達の様子などの、懐かしき程に、衣類などの萎はみたるめりしを思ひ遣

り給ひて、母君女三宮の御方に参り給ひて、

(薰) 美しき儲蓄の布帛ども候ふや、使用ふべきことぞ候ふ、

と申し給へば、母宮は、

九月の法事
○九月は齋
月なれば法
事あるべし

(三) 例の九月の法事の料に、白き布帛どもなどやあらむ、染めたる品などは、今は故意とも爲置かぬを、急ぎてこそ染めさせめ、

と言へば、中納言は、

(薰) 何か仰山しき用意にも候はざれば、故意染めさするにも及び候はず、唯あるに従ひてこそ、

とて御匣殿などに問はせたまひて、女の装束ども、數領に、清げなる細長どもも、唯あるに従ひて調じ、また染めぬ絹綾など取り具し給ふ、中君の御料と思しきには、我が御料にありける紅

御匣○衣服
を調進する
ものなり

の打目、普通ならぬ艶あるに、白き稜どもなど、數多重ね給へるに、袴の具なかりけるに、如何にしたるにかありけむ、腰の一つありけるを、引き結び加へて、

(薰歌) 結びける、契異なる、下紐を、た、一筋に、うらみやはする、

と書きて、大輔君とて、大人々々しき女房の、睦ましげなる人に遣はす、

(薰) 取敢へぬ様の、見苦しきを、宜きやうに執成して參らせよ、

と言ひて、中君の御料の品は、忍びやかなれど、箱に入れて、その表の袋ども特別なり、中君は御覽せさせねど、前々も中納言のかやうなる御心志らひは平生の事にて、目馴れにたれば、こ

結びける云々○君は我から媒介して匂宮に譲りしことなれば今更恨むべき筋もなしとなり

の御贈物を、氣色はみ返しなど、受否ふへきにもあらねば、如何なども思ひ煩はで、女房達に配り散らしなどしたれば、各自衣服に刺し縫ひなどす、若き女房達の、御前近く奉仕るもの、姿などをぞ、まづ取別きては修飾ひ立つべき、下使どもの、甚く萎ばみたりつる姿どもなど、白き衿などにて、掲焉ならぬぞ、却て見善かりける、さて中君をば、誰かは何事をも後見申す人のあらむ、宮は中君に對しては、疎略ならぬ御志の程にて、萬事をいかで後見む、と、思し掟てたれど、小細なる内々の事までは、いかゞは思し寄らむ、宮の限りもなく人にはかり傳かれて、習慣せ給へれば、世間の物に相應はず不足しき事も、如何なるものとも知りたまはぬ、道理なり、されど、艶に花の露を翫弄ぶさへ、そゞろ寒く覺ゆるやうの、風流しき事はかりして、世

は過ぐすべきものと、思したる程よりは、深く思ほす中、君の爲なれば、自然折節につけつゝ、眞實なる事までも扱ひ知らせ給ふこそ、皇子としては、世に有り難く珍かなることなるめれど、中、君の乳母などの中には、いでや中納言に比べ奉りては、など、誹らはしげに申すものもありけり、女童などの姿、鮮麗ならぬが、折々打混りなどしたるを、中、君はいと耻かしく、此院の却て晴れがましき住居にもあるかな、など、人知れず思すことなきにしもあらぬに、況してこの頃は、六、君の世に響きたる御有様の、花やかさに比較べられて、宮の内の女房達の、彼方の目移しに、此方の様を、人氣なきことよ、と、見思ふらむことの耻かしく、思し亂るゝことも添ひて、歎かしきを、中納言の、いと能く推量り申し給ひて、かく種々の衣類ども贈り給へるは、疎

からむ邊には、見苦しく碎々しかりぬべき心あらひの様も、中、君を輕侮るとはなけれど、何かは故意と仰山しく、新に仕立て貌ならむも、却て覺えなく、見咎むる人やあらむと思して、まづはかく有り合せたる物を、贈り給ふなりけり、かく前には取敢へず有り合せたる物贈り給ひしが、中納言は今回ぞまた例の見善き様の衣類どもなど、故意に仕立させ給ひて、御小袿織らせ、綾の料給はせなどし給ひける、この中納言ぞ匂宮にも劣り申し給はず、様特別に傅き立てられて、片輪なるまで心驕もし、世を思ひ澄して貴なる心様此上なけれど、故八宮の御山住を見始め給ひしよりぞ、寂しき所の哀さは、様特別なりけり、と、氣の毒に思されて、凡ての世をも思ひ廻らし、深き情をも習ひ給ひにける、いとほしの修業よ、とぞ、世人は言ふなる、中納言は

かくて中君に對し、いかで後安く大人しき人になりて止みなむ、
 と思ふにも任せず、心に懸りて困しければ、御文などを、前よ
 りは濃細に書き給ひて、ともすれば忍び餘りたる氣色を見せつ
 つ申し給ふを、中君はいと詫しき事添ひにたる身よ、と、思し歎
 かる、さて心に、偏に知らぬ人ならば、あな物狂し、と、辱め差
 放たむにも易かるべきを、この中納言は、昔より様異なる頼も
 し人に習慣ひ來て、今更に中惡しくならむも、却て人目惡しか
 るべし、また中納言の、さすがに淺はかにもあらぬ御心ばえ有
 様の、哀情を知らぬにはあらず、さりとして心交し貌に會釋はむ
 も、いと慎ましく、如何はすべからむ、と、萬事に思ひ亂れ給ふ
 に、中君に伺候ふ女房達も、少し物の言ふかひありぬべく若や
 かなるは、皆新參しき心地して、見馴れたる人としては、彼の山

薰君又參
 二條院

里の古女房達なり、されば中君は、思ふことをも、同じ心に懷
 かしく言ひ合すべき人なきまゝには、故大君を思ひ出で申し給
 はぬ折なし、もし大君にして、おはせましかば、この中納言も、
 かゝる心は添へ給はましや、と、いと悲しく、宮の無情く成り給
 はむ歎きよりも、この中納言の心懸け給ふ事、いと困しく覺ゆ、
 中納言も強ひて思ひ詫びて、例の蕭條なる夕方二條院におはし
 たり、やがて端に御褥差出させ給ひて、
 (中) いと惱ましき間にてぞ、え對面申さぬ、
 と女房して申し出し給へるを聞くに、中納言はいみじく辛くて、
 涙の落ちぬべきを、人目に包めば、強ひて紛はして、
 (薰) 惱ませ給ふ折は、知らぬ僧なども、近く參り寄るを、醫
 師などの列にても、御簾の内には伺候ふまじくやは、それに

かく人傳なる御消息ぞ、かひなき心地する、
 と申し給ひて、いと物々しげなる御氣色なるを、一夜中納言の、
 中君に近着き給ひし、物の様子見し女房どもは、
 (女房) かく不都合く會釋ひ奉りては、實にやいと見苦しく候
 ふめり、

とて母屋の御簾下して、夜居の僧の座に入れ奉るを、中君は眞
 に心地もいと困しけれど、女房どものかく言ふに、對面せざる
 は、うたて掲焉に、却て不審しだつべければ、また如何と愼ま
 しきにより、物憂ながら、少し膝行り出で、對面し給へり、
 いと微に、時々物言ふ御氣容の、昔の大君の惱み始め給へりし
 頃、まづ思ひ出でらるゝも、中納言は忌々しく悲しくて、搔き
 昏す心地し給へば、頓に物も言はれず、猶豫ひつゝぞ申し給ふ、

中君近侍
 女房一面
 君

下安からぬ
 ○孟津抄に
 水鳥の下安
 からぬ思ひ
 にはあたり
 の水も氷ら
 ざりけりと
 あり

さて中君の此上なく奥埋り給へるも、いと辛くて、中納言は簾
 の下より、几帳を少し押入れて、例の馴々しげに、近づき寄り
 給ふが、いと困しければ、中君はわりなしと思して、少將君と
 いふ女房を、近く召寄せて、
 (中) 胸ぞ痛き、暫時押へてよ、
 と言ふを、中納言は聞き給ひて、

(薫) 思ふこと籠めたる胸は、押へたる、いと困しく候ふもの
 を、
 と打歎きて、居直り給ふ間も、實にぞ下安からぬよ、
 (又) 如何なれば、かくも常に惱ましくは思さるらむ、人に問
 ひ候ひしかば、懷妊といふものは、初の間は、暫時こそ心地
 も悪かるなれ、後にはさてまた快しき折もあり、などこそ教へ

候ひしか、餘り若々しく持成させ給ふかし、
と言ふに、中君はいと耻かしくて、

(中) 胸は何時ともなく、かくこそ痛く候へ、故大君も、かや
うにこそ平生に胸痛くものし給ひしか、これは世に長命かる
まじき人のする業とか、世人も言ひ候ふめる、

誰も千年の
○細流抄に
憂くも世を
思ふ心に叶
はぬか誰も
千年の松な
らなくにと
あり

とぞ言ふ、中納言は心に、誰も千年の松ならぬ世を、と思ふに
は、いと氣の毒に哀なれば、彼の召寄せたる女房少將、君の聞か
むも包まねず、傍痛き筋の事をこそ撰り留めては申さね、昔よ
り思ひ申す様などを、中君の御耳一つにはそれと心得させなが
ら、他人はまた片輪にも聞かまじき様に、能く見善くぞ言ひ成
し給ふを、少將、君は、實に有り難き中納言の御心ばえにもこそ
あれ、と、聞き居たりけり、さても中納言は、何事につけても、

故大君の御事をぞ盡きせず思ひ給へる、

(薰) 我は幼稚かりし程より、世間を思ひ離れて、終みぬべき
心遣ひをばかり、習ひ候ひしを、然るべき宿因にや候ひけむ、
疎きものながら、一通ならず故大君に、思ひ始め奉りし一節
に、彼の本意の聖心は、さすがに違ひやしにけむ、大君を思
ふ心の慰めばかりに、此處にも彼所にも行き關係ひて、その
女の有様を見むにつけて、大君を戀ふる心の紛る、こともや
あらむ、など、思ひ寄る折々候へど、更に外様には靡くべくも
候はざりけり、萬事に思ひ詫び候ふては、心の引く方につけ
て、心強くも忍び難き業なりければ、好色がましきやうに思
さるらむ、と、耻かしかれど、懸想など、あるまじき心の、掛
けても候はざこそ、心外しくもあらめ、唯こればかりの程に

て、時々思ふことをも申させ、また承りなどして、隔心なく
 言ひ通はむを、誰かは咎め出づべき、世の人に似ぬ我が實直
 心は、皆人に誹かるまじく候ふを、尙後安くよ思ほしてあれ、
 など恨み、泣きみ申し給ふ、中、君は、

(中) 元より後めたく思ひ申さば、かく怪しと人も見思ひぬへ
 きまでは、申し候はず、年來此方彼方につけつゝ、御志の深
 き程は、見知る事ども候ひしかばこそ、様異なる頼もし人に
 爲奉りて、今は却て此方よりなどさへ申し驚かすことも候へ、
 と言へば、中納言は、

(薰) さやうなる折も終に覺え候はぬものを、今回圖らずもわ
 ざく、此方へと、有り難く思ひ言ふは、何事にか候はむと、参
 りて候へば、彼の宇治へ御出立の用意には、辛うじて召使はせ

給ふなりけり、それも實に御覽じ知る方ありて召使はせ給ふ
 なれば、いかで疎略には思ひ候ふべき、

など言ひて、尙いと物恨めしげなれど、少將、君など、傍に聴く
 人あれば、中納言は思ふまゝにも、いかでかは言ひ續け給はむ、
 外の方を詠め出したれば、漸々昏くなりたるに、虫の聲はか
 り紛れなくて、築山の方小闇くて、何の文目も見えぬに、中納
 言はいと蕭然なる様して寄り居給へるも、簾内には中、君煩はし
 とばかり思さる、中納言は、

(薰) 限りだにある、
 などいと忍びやかに打誦して、

(又) 思ひ詫び候ひて候ふ、音無の里も求めまほしきを、彼の
 宇治の邊に故意と寺などはなくとも、昔覺ゆる大君の木像を

限りだに○
 細流抄に戀
 しさの限り
 だにある世
 なりせばつ
 らきを強ひ
 て歎かさら
 ましとあり

音無の里○
細流抄に戀
ひわびぬれ
をだになか
む聲立てい
つこなるら
む音無の里
とあり
昔覺ゆる云
々○白氏文
集に唐高宗
最愛の王子
七歳にて歿
したるを悲
み香爐峯の
北に遺愛寺
を建てその
木像を安置
したること
あり又漢武
帝李夫人の
死を悲みて
甘泉殿の内
に其像を畫

も作り、繪にも畫き留めて、行法ひ候はむとぞ、思ひ成り候
ひぬる、

と言へば、中、君は、

(中) 哀なる御企願に、またうたて御手洗川近き心地する人形
こそ、故大君の爲、思ひ遣りいとほしく候へ、また繪に畫く
とても、黄金求むる繪師などもこそあれば、後めたくぞ候ふ
よ、

と言ふに、中納言、

(薰) それよ、言はず笑はぬことなれば、その彫工も繪師も、い
かでか心には叶ふべき業ならむ、近き世に、花降らせたる彫
工も候ひけるを、さやうならむ變化の人もがな、
など、右様左様に、大君をば忘れむ方なき由を歎き給ふ氣色の、

いと心深げなるも、いと氣の毒に、煩はしくて、中、君は今少し
滑り寄りて、

(中) その人形の序に、いと怪しく思ひ寄り申し難き事をこそ、
思ひ出で候へ、

と言ふ氣容の、少し懐かしきも、中納言はいと嬉しく可憐にて、
(薰) 何事にか候はむ、

と言ふまゝに、几帳の下より中、君の手を捉ふれば、中、君はい
と面倒く思ひ成らるれど、心には、如何様にして、中納言の、か
かる懸想心を止めて、平穩にあらむ、と、思へば、この近く侍ふ
少將、君の思はむことのおへなくて、手を捉へられたるをば、少
將、君には知らせじとて、然りげなく持成し給へり、

(中) 年來は世に在らむとも知らざりし妹の、この夏頃、遠き

かせ及び童
仲君といふ
ものに命じ
温石にて其
像を彫らせ
しこと見え
たり
御手洗川○
細流抄に戀
せじと御手
洗川にせし
みそぎ云々
とあり人形
は川へ流す
ものなれば
大君の爲い
とほしとな
り
黄金求むる
云々○畫工
毛延壽とい
ふもの黄金
の如何によ
りて肖像を

畫きたり江相公の詩に昭君若贈黄金賄定是終身仕帝王とあり言はず笑はぬ○白氏文集李夫人の詩に不言不笑愁三殺人とあり花降らせたる云々○水原抄に飛驒の工匠を引きたれと此は當時物語にありし事なるべし

○寄生

所よりものして、我方へ尋ね來たりしを、異腹なれど、疎くは思ふまじけれど、また故宮の疎く隔て置き給ひし人なれば、卒爾にさやうにしも何かは睦び思はむ、と、思ひ候ひしを、先頃來りしに、能くく見ればこそ、怪しきまで、故大君の御氣容に、似通ひたりしかば、哀に覺え成り候ひしか、君には我をば、故大君の形見など、思し言ふめれど、こゝなる女房どもは、却て何事も淺ましく持て離れて、姉には似ぬ由言ひ候ひしを、此度參りし妹の、故大君とは同腹にもなきに、いかでかはかく似通ひたりけむ、
と言ふを、中納言は、夢語かとまで聞く、
(薰) さてその妹君よ、然るべき由緒あればこそは、さやうに尋ね參られて、睦び申さるらめ、それをば、何とかは今まで、

中君語ニ異母妹浮舟君事一代ニ我身

忍ぶ草○細流抄に結び置く形見の子だになかりせばなかに忍ぶの草

打隠して、かくも微め言はせざらむ、
と言へば、中君、

(中) いざや、その由緒も、如何なりけむ事とも、思ひ分かれ候はず、故宮には、我々どもを、物果敢なき有様どもにて、世に落ち留り零落へむとすらむ、とばかり心配げに思したりし事どもを、今は唯我身一人に搔き集めて思ひ知られ候ふに、またかゝる落人の、敢なき妹をさへ打添へて、世人も聞き傳へむこそ、故宮の爲にもいとほしかるべけれ、
と言ふ氣色を見るに、中納言は、故八宮の、忍びて物など言ひけむ女の、忍ぶ草摘み置きたりけるなるべし、と、見知りぬ、その妹君、故大君にいと能く似たり、と、中君の言ふ縁に、中納言は耳留まりて、

○寄生

を摘まいし
とあり故八
宮の落胤を
留め置きて
との意なり

(薰) 此事ばかりにても、同じくは、言ひ果てさせ給ひてよ、
と不審しがり給へど、中君はさすがに傍痛くて、え詳細にも申
し給はず、

(中) その事尋ねむと思す心あらば、その邊とは申しつべけれ
ど、委細しくもえ知り候はずよ、また餘り残りなく申さば、御
心劣りも爲つべきことにぞ候ふ、

と言へば、中納言は、

世をうみ中
○世を倦み
といふより
海中にかけ
たり海中は
蓬萊山にて
玄宗の楊貴
妃の魂魄を
尋ねさせし
ことを引け

(薰) 故大君を慕ふにつけては、世をうみ中にも、その魂魄の
在所尋ねには、心の限り進みぬべきを、その妹君、いとさや
うにまでは、思ふべきにはあらざるなれど、いとかく慰めむ
方なきよりは、その妹君をなりとも見む、とは思ひ寄り候ふ、
人形の企願ばかりには、何とてかはその妹君を尋ね取り、宇

るなり

治に安置きて、彼の寺の本尊にもと思ひ候はざらむ、尙慥に
言はせよ、

と卒爾に責め申し給ふ、中君は、

(中) いざや、故宮の御子としも數まへ給はで、その御許可も
なかりし事を、かくまで漏し申すも、且はいと口輕けれど、
變化の彫工求め給ふ御氣の毒さにこそ、かくも申すに候ふ、
とて

(又) この妹君、いと遠き東國に、年頃經にけるを、その母な
る人の、いと憂愁はしき事に思ひて、無理に尋ね寄りしを、
先方には、不都合くもえ返答はで候ひしかば、かくは此方へ
連れ來りしなり、微に見し故にやあらむ、能くも分かねど、何
事も思ひし程よりは、見苦しからずぞ見えし、これをその母

人は、如何様に待遇さむ、と、持て煩らひ歎くめりしに、山寺の佛にならむは、いと此上なく有り難きことにこそはあらめ、されど然やうにまでは、いかでかは待遇さむ、

と申し給ふ、中納言は心に、中君は然りげなくて、かく面倒き我心を、いかで言ひ放つ業もがな、と、思ひて、この妹君を我に譲るならむ、と、推察るは辛けれど、さすがに哀なり、さて中君の我に親しく對面するは、あるまじき事と、深く思ひ給ふものながら、顯證に不都合き様にはえ待遇し給はぬも、我が心中を見知り給へるにこそはあるめれ、と、中納言は思ふ心動悸に、夜も甚く更け行くを、簾内には、中君、人目いと傍痛く覺え給ひて、暇乞もせず、中納言に油斷させて、入り給ひぬれば、中納言、道理とは返すく思へど、尙いと恨めしく口惜きに、思

ひ鎮めむ方もなき心地して、涙の翻るゝも人様悪ければ、萬事に思ひ亂るれど、一向に淺はかならむ待遇も、また尙いとうたて、我が爲、中君の爲にも、愛なかるべければ、念じ返して、常よりも歎き勝にて出で給ひぬ、中納言は心に、かくばかり思ひては、いかゞすべからむ、苦しくもあるべきかな、如何にしてかは大方の世の誹謗あるまじき様にて、さすがに思ふ心の叶ふ業をばすべからむ、など思ひて、戀路には下り立ち練じたる心ならねばにやあらむ、我が爲中君の爲も、心安かるまじきことを、わりなく思し明かす、さてまた故大君に似たり、と、中君の言ひつる妹君をも、いかでかは眞實かとは見るべき、母人の、それ程の平人の分際なれば、思ひ寄らむに難くはあらずとも、その妹君の、我が本意にもあらずば、面倒くこそあるべけれ、など

薰君訪二字
治空宮

尙其方様には、心も急き立たず、
 中納言は宇治の宮を、久しく見給はぬ時は、いと、故大君の昔
 遠くなる心地して、不覺に心細ければ、九月廿餘日の程に、宇
 治におはしたり、いと、しく風ばかり吹き拂ひて、心凄く荒ま
 しげなる水の音ばかり宿守にて、人影も別段に見えず、中納言
 は見るにまづ搔き昏らし悲しき事ぞ限りなき、辨の尼召し出で
 たれば、辨、尼は障子口に、青鈍の几帳を差出して参れり、
 (辨) かく几帳を隔つるは畏多けれど、甚く老いて恐しげなる
 形貌になり候へば、況して慎ましくぞ候ふ、
 とて正面には出で來ず、中納言は、
 (薰) 其方の此所に居残りて、いかに詠め給ふらむと思ひ遣る
 に、同じ心なる人もなき物語も申さむとてぞ、かくは尋ね参

りし、果敢なくも積る年月かな、

とて涙を一目泛けておはするに、辨、尼はいと、更に涙もせきあ
 へず、

秋の風は○
 孟津抄に秋
 吹くはいか
 なる風の色
 なれば身に
 染むばかり
 人の戀しき
 とあり

(辨) 故大君の匂、宮の御問絶を歎き給ひて、中、君の爲に、敢な
 く物を思すめりし頃の空ぞかし、と、思ひ出で候へば、何時と
 は候はぬ中にも、秋の風は身に染みて辛く覺え候ふて、實に
 大君の後めたく歎かせ給ふめりしも著き、中、君の近來の御有
 様よ、匂、宮には尊き御方出で來て、中、君の事の外に物思ひし
 給ふと、微に承はるも、様々にぞ悲しく候ふ、
 と申せば、中納言は、

(薰) 右あることも左かることも、世に長在ふれば、直るやう
 もあるを、彼の匂、宮をば、中、君には我が媒介申せしことなれ

ば、中君の味氣なく思し染みけむこそ、我が過失のやうに、尙
 悲しけれ、宮の此頃の御有様にては、中君の外に六君おはす
 ればとて、何か支障あらむ、それこそ尋常の事なれ、されど
 中君につけては、別段に後めたげには見え申し給はざるめり、
 とにかく言ひてもく、故大君の、虚しき空に、昇りぬる烟
 ばかりこそ、誰もく終には遁れぬことながら、後れ先だつ
 間は、尙いと云ふかひなかりけれ、
 と言ひても、また泣き給ひぬ、かくて中納言は、阿闍梨召して、
 例の故大君の一廻忌の、經佛の事など言ふ、
 (又) さてこの宇治の宮に、かく時々ものするにつけて、昔を
 思ひ出るも、かひなきことの安からず覺ゆるが、いと益なき
 を、この寢殿毀ちて、彼の山寺の傍に、堂建てむとぞ思ふを、

薰君命ニ阿
 闍梨毀ニ宇
 治宮爲レ寺

同じくは疾く創立めてむ、

と言ひて、

(又) 堂幾棟、廊云々、僧坊、
 など、あるべき事ども、書き出で言ひなど爲させ給ふを、阿闍
 梨は、

(阿) そはいと尊き事にぞ候ふ、

とて、功德の事ども申し知らず、中納言は、

(薰) 故八宮の、由緒ある御住居に、占め作り給ひけむ所を、引
 き毀たむも、無情きやうなれど、故宮の御志も、寺院にも、と
 の功德の方には進みぬべく思しけむを、跡に残り留り給はむ
 姫君達を、思し遣りて、さやうにも寺院には、え掟てざりけ
 るにやありけむ、今は此所、匂兵部卿宮の北、方中、君こそは

領り給ふべければ、匂宮の御料とも言ひつべくなりたり、
 さればこの古宮の、土地ながら寺院になさむことは、便なか
 るべし、因て心に任せてもさやうにはえ爲じ、且所の有様も、
 餘りに川面近く、顯證にもあれば、尙寢殿を毀ち移して寺院
 となし、更に別様にも、其跡に新しく寢殿を作り替へむの心
 にてぞある、

と言へば、阿闍梨は、

(阿) 右様左様に、いとも畏く尊き御心なり、昔別を悲みて、骨
 を裹みて、數多の年、頸に懸けて候ひける人も、佛の御方便
 にて、彼の骨の袋を捨て、終に聖の道にも入り候ひにける、
 君のこの寢殿を御覽するにつけて、御心動きおはしますらむ、
 偏に宜しからざる御事なり、それをば毀ちて寺院に爲給はむ

昔別を悲みて○河海抄に觀音勢至因位の昔人の子にて二人おはしましけるに繼母の爲に殺されければ其親骨を頸

に懸けて歎きしが終に佛道に入りけるなり云々とありこれに寢殿を其儘置き給は骨を包みて持たるやうのことなればそれを取り崩して寺に爲し給は骨を捨て佛に成りたる如しとの意なり

ことは、また後世の功德の御勸めともなるべきことに候ひけ
 り、さては急ぎ奉仕らすべし、曆の博士の撰び申して候はむ
 日を承りて、物の由緒知りたらむ大工二三人を賜りて、詳細
 なる事どもは、佛の御教のまゝに奉仕らせ候はむ、
 と申す、中納言はとかく言ひ定めて、御庄の人ども召して、此
 間の事ども、阿闍梨の言はむまゝに爲べき由など、仰せ給ふに、
 果敢なく日も昏れぬれば、その夜はこの宮に逗留りぬ、さて中
 納言は心に、この寢殿も愈打毀つべければ、この度こそは能く
 見め、と、思して、立ち廻りつゝ、見給へば、佛も皆彼の山寺に移
 してげれば、辨尼の行法の具ばかりあり、いと果敢なげに住居
 たるを、如何にして過ぐすらむ、と、哀に見たまふ、やがて辨尼
 に、

(薰) この寢殿は改め更へて建つべきやうあり、新に作り出でむ間は、彼の廊に移り住み給へ、京の中、君に取り渡さるべき物などあらば、御庄の人召して、あるべかるやうに、持参させ給へ、

など眞實やかなる事どもを、語らひ給ふ、他にては、中納言は、これほど年齢過ぎたらむ女を、何かと見入れ給ふべきにもあらねど、この辨、尼ばかりは、夜も傍近く臥させて、昔物語など爲させ給ふ、辨、尼は、故柏木權大納言右衛門督の御有様も、傍に聽く人なきに、心安くて、いと詳細に申す、

(辨) 故權大納言殿の、臨終となり給ひし間に、女三宮の、君をば珍らしく御誕生おはしますらむ御有様を、不審しきものに思ひ申させ給ふめりし御氣色などの、今更思ひ出で候はるるに、かく思ひ懸けぬ世の末に、かくて君を見奉り候ふぞ、彼の權大納言殿の御世に、睦しく奉仕り置きし効驗の、自然候ひける、と、嬉しくも哀しくも思ひ知られ候ふ、心憂き命の間にて、故柏木君、故八宮、故大君の御事など、かく様々の事を、見過ぐし思ひ知り候ふぞ、いと耻かしく心憂く候ふ、中君よりも、時々は京へも参りて見奉れ、覺束なく其地に絶え籠り果てぬるは、此上なく思ひ隔てけるなるめり、など、言はする折々候へど、かく忌々しき身にてぞ、阿彌陀佛より外には、見奉らまほしき人も、なくなりにて候ふ、
など申す、此他故大君の御事ども、また盡きもせず年來の御有様など語りて、何の折には何と言ひし、など、花紅葉の色を見ても、果敢なく詠み給ひける歌語などを、相應なからず打慄き

辨尼詳説
浮舟君事

語り出でたれば、中納言は心に、大君の深窓娘しく、言寡なるものながら、美しかりける御心ばえかな、とばかり聞き添へ給ふ、中君は、大君よりは今少し當世めかしきものながら、心許さざらむ人の爲には、硬直しく不都合く待遇し給ひつべくこそものし給ふめるを、我にはいと心深く情々しく會釋ふとは見え、いかで過ぐしてむとこそおもへれ、など、心の中に、姉君妹君の心を思ひ比べ給ふ、さて物の序に、中納言は彼の木像代の妹君の事を言ひ出で給へり、辨尼は、

(辨) その妹君、京にその頃候はむとはえ知り候はず、その京に來しといふこと、人傳に承りし事の筋なるなり、故宮のまだからる山住も爲給はず、故北方亡せ給へりける間近かりける頃、中將、君とて伺候ひける上臈の、心はせなども怪しうは

候はざりけるを、故宮のいと忍びて、果敢なき程に物言はせけるを、更に知る人も候はざりけるに、女子をぞ生みて候ひけるを、宮の、吾が御胤にもやあらむ、と、思ふことのありけるながらに、あへなく面倒しく、物々しきやうに思し成りて、中將、君の出産後は、またとも御覽じ入るゝことも候はざりけり、此より宮には、敢なくその事に思し懲りて、やがて大方聖心にならせ給ひにけるを、中將、君は伺候ひ申さむも不都合く思ひて、それよりえ伺候はずなりにけるが、後に陸奥、守の妻になりて、陸奥國に下りけるを、一年上洛りて、その娘君無事にもものし給ふ由、宮の邊にも微言し申したりけるを、宮聞召しつけて、更にかゝる消息あるべきことにもあらず、と言はせ放ちければ、中將、君はかひなくてぞ歎き候ひける、さ

てその夫陸奥守、常陸介になりて、また常陸に下りけるが、其後音にも聞えざりつるが、この春上洛りて、彼の二條院には尋ね参りたりけるとぞ、微聞き候ひし、彼の娘君、年齢は二十歳程になり給ひぬらむかし、いと美しく生ひ出で給ふが、慈悲しきことよ、などこそ、中頃は、母君の文にさへ、東國より書き續けて寄越し候ひしか、

と申す、中納言は、この妹君の由來を、始めて精しく聞き明らかめ給ひて、心に、さらば中君の、故大君に似通ひたり、と言ひしは、眞實にてもあらむかし、見ばや、と思ふ心出で來ぬ、

(薰) 昔の大君の御氣容に、懸けても觸れ似たらむ人あらば、知らぬ國にまでも、尋ね知らまほしき心地のするを、その娘君、故宮の御子には數まへ給はざりけれど、思ふに幾分か大

君達に、氣近く似通ひたる人にこそはあるなれ、故意とはなくとも、その娘君、この邊に音なふ折あらむ序に、我がかくぞ言ひし、と、傳へ給へ、

などばかり、言ひ置く、辨尼、

(薰) 彼の母少將君は、故宮の北方の御姪なり、辨にも從姪に當りて、離れぬ間柄に候ふべきを、當時は外々に離れ居り候ふて、精しくも見馴れ候はざりき、先頃京より、女房大輔が許より申し來りしは、彼の娘君ぞ、いかで故宮の御墓になりとも参らむ、と言ふなる、因て然る用意せよ、など候ひしが、ど、その娘君、未此方には故意音はず候ふめり、さらば今さやうの序に、君よりかゝる仰せ言ぞ候ふ、と、傳へ候はむ、と申す、明けぬれば、中納言は歸京り給はむとて、昨夜御供の

木虱○蕨の一種なり虱の物に取付きたるやうに木に寄生れる故にか

後れて持て参れる、絹綿などやうの物を、阿闍梨に贈らせ給ふ、また辨尼にも賜ふ、阿闍梨の弟子の法師達、辨尼の召使ふ下衆どもの料にとて、布などいふものをさへ、京より召寄せて頒ち賜ふ、辨尼心細き住居なれども、中納言の、かゝる御訪問撓まざりければ、身の分限には、いと見善く静寂にてぞ、行法ひける、木枯の風の堪へ難きまで吹き徹したるに、残る梢葉もなく散り布きたる黄葉を、踏み分け、る跡も見えぬを、中納言は見渡して、頓にもえ出で給はず、いと氣色ある深山木に、宿りたる蕨の色ぞまた残りたる、木虱など少し引き取らせ給ひて、中君への土産と思しくて、持たせ給ふ、
(薰) 宿り木と、思ひ出でずば、このもとの、旅寝もいかに、淋しからまし、

と獨言ち給ふを聞きて、辨尼、

(辨歌)

荒れ果つる、朽木のもとを、宿りぎと、思ひ置きける、

ほどの悲しさ、

とて、飽まで古めきたれど、由緒なくはあらぬをぞ、中納言は、少許の慰情には思されける、

中納言は京に歸り給ひて、宇治の紅葉を、二條院なる中、君に奉り給へれば、折節句、宮おはします間なりけり、御使は右の紅葉に御文つけて南宮より、とて、何心もなく持て参りたるを、中君は、中納言の例の面倒しき事もこそあれ、と、迷惑しく思せど、取り匿さむやうもなし、句、宮は、

(句) こは面白き蕨かな、

と尋常ならず言ひて、召寄せて見給ふ、御文には、

宿り木云々
○昔宿りし
所と思ひ出
でずばい
かの旅寝も
かからむと
かりさむと
やとりぎと
云は毛詩の
注なりと寄
生この歌や
がて本帖の
題名となり
ぬ
荒れ果つる
云々○荒れ
る陸を何と
も思はでし
夜を明かし
給へるは誠
昔を思ひ給
へる御心ぞ
哀なるとな
り
南宮○中納
言の居る三
條宮をいふ

二條院を北院といひしに對せり二條は北に三條は南に當れり
峯の朝霧○細流抄に雁のくる峯の朝霧晴れずのみ思ひ盡きせぬ世の中のうさとあり
薰君贈ニ字治紅葉於中君

(薰文) 日頃何事かおはしますらむ、一日山里に參り候ふて、いと、峯の朝霧に惑ひ候ひつる御物語も、自分親しくぞ申さむ、彼宮の寢殿、堂に爲すべき事、阿闍梨に申し付け候ひにき、御許可候ひてこそは、他に移すことも申し付け候はめ、辨の尼君に、然るべき事仰せ遣はせ、
などぞある、宮は、

(匂) 能くもつれなく、何事もなげに書き給へる文かな、我こ、にあり、と、中納言の聞きつらむ、
と言ふも、實に少しは、中納言のさやうに知りもしつらむ、中君は、この御文の何事もなきを、嬉しと思ひ給ふに、宮の無理にかく言ふを、わりなしと思ひ、打怨じて居給へる御様、萬の罪も恕しつべく美し、宮は、

中君返書
薰君

岩窟の中○細流抄にいかならむ岩ほの中にすまばかは世の憂きことの聞えござらむとあり

(匂) 返事書き給へ、我は見じよ、
とて他様に背面き給へり、中君はあまへて書かざらむも、却て怪しければ、

(中返) 山里の御歩きの、羨ましくも候ふかな、彼宮は實にさやうに堂に成してこそは善く候へ、と、思ひ候ひしを、故意にまた他の岩窟の中求めむよりは、尙元の宮荒らし果つまじく思ひ候ふを、いかにも然るべき尊き様に爲させ給はゞ、一通ならず嬉しからむ、

と申し給ふ、匂宮は、中君と中納言とは、かく憎き氣色もなき御親睦なるめり、と、見給ひながら、我が好色の御心習慣に、尋常ならじ、と、疑ひ思すが、安からぬなるべし、枯々なる前裁の中に、尾花の他草より特別に、手を差出して招くが面白く見ゆ

穂に出でぬ
云々○薫君
の折々かや
うの文通は
しあれば下
には思ふ心
のあるべき
と匂宮の推
し給ふなり
るに、また穂に出で兼ねたるもありて、露を貫き留むる玉の緒、
果敢なげに打靡きなどして、例の事なれど、夕風尙哀なりかし、
宮、

(句歌) 穂に出でぬ、物思ふらし、篠薄、招ぐ袂の、露をげく
して、

と詠み給ひて、懐かしき御衣どもに、直衣ばかり着給ひて、琵琶
を弾き居給へり、黄鐘調の搔合を、いと哀に弾き成し給へば、
中、君も音楽は心に入り給へることにて、物怨じもえ爲果て給は
ず、小き御几帳の端より、御懷妊の間なれば脇息に倚り懸りて、
微に差出で給へる、いと見まほしく可愛げなり、中、君は、
(中歌) 秋果つる、野邊の景色も、篠薄、ほのめく風に、つけ
てこそ知れ、我身ひとつの、

我身ひとつ
○細流抄に

大方の我身
ひとつの憂
きからにな
べての世を
も恨みつる
かなとあり

とて、涙催まるゝが、さすがに耻かしければ、扇を紛はしてお
はする心の中も、宮は可愛く推量らるれど、かゝるにつけてこ
そ、彼の薫君も、え思ひ放たざらめ、と、疑はしきが尋常ならで、
恨めしきなるめり、菊の故意と作るひ立てさせ給へるが、また
能くも移ろひ果てずして遅きに、こは如何なる一本にかあらむ、
とて宮はいと見所ありて移ろひたるを、取り別きて折らせ給ひ
て、

(句) 花の中に偏に、
と誦し給ひて、

花の中に○
朗詠に不
是花中偏愛
菊此花開後
更無花と
あり
某の皇子云
々○敦實親
王の御子西

(又) 某の皇子の、此花愛てたる夕ぞかし、古天人の翔りて、
琵琶の秘手教へけるは、いかに物事勝れたりけむを、何事も
浅くなりたる今の世は物憂しや、

宮左大臣源雅信をいふ皇子なられど王孫なればかくいひ成せり河海抄に西宮左大臣庭前、靈物降居樹上、詭前遊小兒、詠此詩、教作者本意盡字、兼請琵琶、授秘手曲、小兒醒、廉承武之靈也、授上唄元石上流泉曲、天人琵琶を教へたることは稱覺の物語にあり廉承武か事なりと

○寄生

とて御琵琶差置き給ふを、中、君は口惜しと思して、

(中) 今の人の心こそ淺くもあらめ、昔を傳へたらむ琵琶の秘曲までは、何とかさやうにもあらむ、されば一曲遊ばせ、

とて、覺束なき秘手などを、ゆかしげに思したれば、宮、

(句) さらば獨絃は、物寂しきに、合奏へ爲給へかし、

とて、女房召して、箏の御琴取り寄せさせて、弾かせ奉り給へ

ど、中、君は、

(中) 昔こそ學ぶ人を持ち候ひしがど、確乎しくも聞き留めず

なりにしものを、

とて慎ましげにて、手も觸れ給はねば、宮は、

(句) これほどのことも、隔て給へるこそ心憂けれ、近來見る

六君は、またいと心解くべき間にもあらねど、片成なる初琴

あり稱覺物語今の世に見えず

伊勢の海○催馬樂の歌にてこれ律の歌なり

をも、隠さず弾くことにこそあれ、凡て女は、柔和に、心睦しきぞ善きこととこそ、彼の中納言も評定むめりしか、彼の君には、またかくも其方は包み給はじ、此上なき御交情なるめれば、

など眞實に恨みられてぞ、中、君は打歎きて、少し調べ給ふ、箏の絃の緩びたりければ、宮は更に盤涉調に合せ給ふ、搔合など、

中、君の瓜音面白く聞ゆ、宮の伊勢の海謠ひ給ふ御聲の、貴に面白きを、女房達、物の後に近づき参りて、笑み廣がりて居たり、

(女房) 宮の、六君中君、二心おはしますは、辛けれど、それも宮の御身分としては道理なれば、尙吾が中、君の御前をば、幸

福人ところそ申さめ、かゝる二條院の賑はしき御有様に、交際ひ給ふべくもあらざりし、年來の宇治の御住居を、君にはま

○寄生

た歸りなまほしげに思して、言はするこそ、いと心憂けれ、
など、只言ひに言へば、若き女房達は、

(若女) あな喧よ、

と制す、宮は中、君に、御琴ども教へ奉りなどしつゝ、三四日この西、對に籠りおはして、御物忌などに託け給ふを、六條院なる六、君の御方にては、恨めしく思して、夕霧左大臣内裡より退出で給ひけるまゝに、二條院に参り給へれば、宮は、

(匂) 左大臣の、仰山しげなる様して、何しに此所へはいましつるぞとよ、

と立腹り給へど、寢殿に渡り給ひて、左大臣に對面し給ふ、左大臣は、

(夕) 故六條院源おはしまさで後、この二條院をば、見ずして

夕霧左府
参二條院

夕霧左府
誘二匂宮
還二六條院

久しくなり候ふも、哀にこそあれ、

など昔の御物語など、少し申し給ひて、やがて主人の宮を引き連れ申し給ひて出で給ひぬ、子息の殿達、または然らぬ公卿殿上人なども、いと多く引き續き給へる、御勢盛大を見るに、中、君は六、君に並ふべくあらぬぞ、頭痛かりける、女房達左大臣を覗きて見奉りて、

(女房) 然も清らにおはしける大臣かな、あれほど何れともなく、若く盛りにて、清げにおはさうする御子息どもの、父大臣に似給ふべき人もなかりけり、あな愛甚よ、

といふもあり、また、

(又) あれほど尊げなる、左大臣の御様にて、故意と御婿君の、御迎に参り給へるこそ憎けれ、さても安げなの世よ、

中君御産修
法

など打歎くもあるべし、中君は御自身も、來し方を思ひ出るよ
 り始め、彼の六、君の花やかなる御交際に、立ち交るべくもあら
 ず、微かなる身の勢望を、と、思ひ續くるに、愈心細ければ、尙
 心安く宇治に籠り居なむばかりこそ見善からめ、など、いと、思
 し給ふ、
 果敢なくて年も暮れぬ、正月の晦日方より、中君は例ならぬ様
 に惱み給ふを、匂宮は御産の事など、また御覽じ知らぬことに
 て、如何ならむ、と、思し歎きて、御修法など、所々にて、數多
 爲させ給ふ、この上尙更に御修法始め添へさせ給ふ、中君はい
 と甚く煩ひ給へば、明石、中宮よりも御訪問あり、匂宮には宇治
 へ通ひ始め給ひしより、かくて三年になりぬれど、中君へ對し
 ては、宮一所の御志こそ一通ならね、大方の世には、物々しく

女二宮着裳
用意

作物所○御
所の細工を
掌る役所な
り
受領○國司

も待遇し申し給はざりつるを、この御懷妊の折ぞ何處にもく
 聞し召し驚きて、御訪問ども申し給ひける、中納言にはこの中、
 君の御懷妊の事につけては、宮の思し騒ぐらむにも劣らず、如
 何におはせむ、と、歎きて、氣の毒にも心配くも思さるれど、限
 ある御訪問ばかりこそあれ、餘りもえ詣で給はで、忍びてぞ御
 祈禱なども爲させ給ひける、然るは女二宮の御裳着の事、唯こ
 の頃になりて、世の中響き營み騒ぐ、母女御、もおはさぬに、今
 上の御心一つなるやうに思し用意げば、御後見なきもぞ、却て
 目出度げに見えける、故女御の爲置き給へる事をばそれとして、
 作物所または、然るべき受領どもなど、各自に營み奉仕る事ど
 も、いと限なし、今上よりは中納言に、やがて御裳着の間に、女
 二宮の方へ、參り始め給ふべきやうに、救命ありければ、婿君

をいふ朝廷の御用を承り奉仕るなり

直物○縣官式は京官叙任の後に執筆直物として申し行ふことありこれに先度の叙任參着の事等を直すの意にてかくいへり
中納言源薰
任權大納言兼右近衛大將

にも心遣ひし給ふ頃なれど、中納言は例の心の癖なれば、女二宮の方様には心も入らで、この中、君の御懷妊の事ばかり、いとほしく思し歎かる、

二月の朔日頃に、直物とかいふ事に、中納言源、薰は權大納言に任りて、右近衛大將兼け給ひつ、紅梅右大臣、左近衛大將兼けておはしけるが、辭し給へるにより、今までの右大將なる人後を襲ぎて、その闕けたる所に薰君は補られしなりけり、かくて薰君は新任の拜賀に、内裡より始めて各所歩き給ひて、二條院にも參り給へり、中、君の懷妊の御煩ひにて、いと苦しく爲給へば、匂宮には恰もこの西、對におはす間なりければ、薰、右大將はやがて此方に參り給へり、宮は、
(匂) 僧など伺候ひて、いと便なき方に、おはしましつるよ、

薰君行新
任拜賀饗

垣下の云々
○近衛大將
新任の饗宴
には中將以下將監に至るまでを招請し親王公卿を請伴に招くこれを垣下の王卿といふ

と驚き給ひて、鮮麗なる御直衣、御下襲など着給ひ、引き修ひて、南階に下りて、答拜し給ふ、御有様ども、何れも一人々々にいと愛甚し、右大將にはやがて今宵、近衛府の人々に祿賜ふ、かくて薰大將は、御饗の所に、と、匂宮を請じ奉り給ふを、宮は中、君の病惱によりてぞ、思し猶豫び給ふめる、この御饗は、夕霧左大臣の曾て爲給ひける例の儘にせむとて、六條院にてぞありける、垣下の親王達、公卿等、大臣の大饗にも劣らず、餘り騒がしきまでぞ集ひ給ひける、この匂宮も終に渡り給ひて、例の御惱によりて靜心なければ、また宴會果てぬに、急ぎ二條院に還り給へるを、六、君の御方には、左大臣を始め、いと飽かず心外しくと言ふ、中、君も親王の御女なれば、六君には劣るべくもあらぬ御分限なるを、夕霧左大臣の、當今の御勢望の、花やかさに

中君生三王子

若手の錢○
誕生の禮に
若を打たせ
て遊ばする
ことあり其
碁打の賭物
にする錢な
り

思し驕りて、六、君をば本臺と思して、中、君などは物の數にもあ
らず、壓制ちて待遇し給へるなるめりかし、中、君には辛うじて、
その曉に、男子生れ給へるを、匂、宮も、かひある様にて、嬉し
く思したり、薰大將も御誕生の慶賀に添へて、嬉しく思す、昨
夜宮の饗宴におはしたりし御禮に、やかでこの御誕生の慶賀も
打添へて、二條院には産穢の間なれば、薰大將は立ちながら參
り給へり、匂、宮には、産穢の間はかく二條院に籠りおはしませ
ば、世の人皆慶賀に參り給はぬはなし、若君の御産養、三日は
例の唯宮の御私事にて、五日の夜薰大將より、屯食五十具、碁
手の錢、椀飯などは世の常のやうにて、産婦の御前の衝重三十、
乳兒の御衣五重にて、御襁褓などぞ、仰山しからず、忍びやか
に爲成し給へれど、精細に見れば、大將のいと故意と目馴れぬ

粉熟○五穀
を五色に形
どりて粉に
して餅に成
し湯に熟し
て甘葛を掛
け捏れ合せ
て細き竹の
筒に入れ衝
き出して其
様双六の調
度の如く見
せたるもの
にて後世の
饅頭を彩色
したるやう
のものなり

珍らしき心ばえにぞ見えける、匂、宮の御前にも、染香の折敷高
衝どもにて、粉熟參らせ給へり、女房の御前には、衝重をばそ
れとして、檜割籠三十に、様々爲盡したる事どもあり、外観に
仰山しくなどは、大將は事更に爲成し給はず、七日の夜は、明
石中宮よりの御産養なれば、參り給ふ人々と多かり、中宮大
夫を始めて、殿上人上達部、數知らず參り給へり、今上にも聞
召して、

(帝) 兵部卿、宮にも、今回子持となりて、大人び給ふなるは、い
かでか徒には置かれむ、
と宣はせて、御太刀奉らせ給へり、九日も御産養を夕霧左大臣
より奉仕らせ給へり、左大臣方よりは、この御産養、快しから
ず思す邊なれど、匂、宮の思さむ所あれば、子息の君達など、二

女二宮行
着裳式
薰大将爲
今上御婿

條院に参り給ひて、御慶賀など凡ていと思ふ事なげに愛甚ければ、中、君の月頃物思はしく、心地の惱ましきにつけても、心細く思し渡りつるに、かく面目起しく、當世めかしき事どもの多ければ、少しは慰みもや爲給ふらむ、薰大将は心に、中、君の若君生み給ひて、かくばかり大人び果てたまふめれば、いと、我が方様は氣遠くやならむ、また宮の御志も、益え一通なるまじ、と、思ふは口惜しけれど、また最初よりの心掟を思ふには、いと満足に嬉しくもあり、かくてその月の廿日餘の程にぞ、女二宮の御裳着の事ありて、次の日ぞ薰大将は御婿として参り給ひける、その夜の御婚禮は仰々しからで、忍びたる様なり、世間には、天下響きて、嚴重しく見えつる御傳きの女二宮に、薰大将の平人にて、御婿とし

帝王の御婿
云々○嵯峨
帝の皇女源
潔姫藤原良
房に嫁し宇
多帝の皇女
源順子藤原
忠平に嫁し
醍醐帝の皇
女勅子内親
王藤原師輔
に嫁せし例
あれど此等
多くは帝脱
履の後或は
崩御の後に

て具し奉り給ふぞ、尙飽かず氣の毒に見ゆる、今上の然る御許可はありながらも、唯今かやうにしも急がせ給ふまじき事ぞかし、と、誹謗はしげに思ひ言ふ人もありけれど、今上は思し立ちぬる事は、潔白しくおはします御心にて、來し方の先例なきまで、同じくは待遇さむと思し置きつるなるめり、さて帝王の御婿になる人は、昔も今も多かれど、かく今上の榮盛の御世に、平人のやうに婿取り急がせ給へる類例は、少くやありけむ、夕霧左大臣も、

(夕) 珍らしかりける大将の御勢望宿世なり、故六條院源さへ、朱雀院の御末世にならせ給ひて、今はと法皇に御姿を窺し給ひし際にこそ、彼の大將の母宮女三宮を得奉り給ひしか、我は況して人よりも許されぬ、落葉宮を拾ひたりしよ、

て在位の天皇の皇女の臣下に配せし例は少し潔姫は在位の間にありつれどこれは源姓を賜はりて後なり

女三尼宮
爲女二宮
讓三條宮

○寄生

と言ひつれば、落葉宮は、實にと思すに、耻かしくて、御返答もえ爲給はず、三日の夜の御式には、女二宮の外戚大藏卿より始めて、凡て女二宮の御方の心寄になさせ給へる人々、家司に、救命賜へて、忍びやかなれど、大將の御先駈、隨身、車添、舍人などまで、祿賜はず、その間の事は、平人の婿扱ひのやうに、いと懇切に、私事めきてぞありける、かくて薰、大將は忍びく、に女二宮の御方へ参り給ふ、心の中には、尙忘れ難き故大君の事はかり思ひて、晝は里邸に起き臥し詠め暮らして、昏るれば心より外に女二宮の御方へ急ぎ参り給ふも、これまでかゝる事には習はぬ心地に、いと物憂く困しく覺えて、女二宮をば、吾が里邸なる、二條宮に退で渡させ奉らむことをぞ、思し掟てける、母君女三宮には、いと嬉しき事に思して、吾がおはします

寢殿を、残らず女二宮に譲り申し給ふべく言へど、大將はさてはいと畏多からむ、とて、寢殿の内を二に分けて、西面の方と御念誦堂との中間に、廊を續けて作らせ給ひ、さて母君女三宮にはその西面に移らせ給ひて、これまで母宮のおはしつる東面に、女二宮をぞ渡させ給ふべきなるめる、東の對どもなどは、焼失て後、壯麗しく新しく、あらまほしく作られたるを、愈々磨き添へつ、緻密に修飾はせ給ふ、かゝる大將の御心遣を、今上にも聞召して、女二宮の、婚禮の間もなく、打解け、私邸へ移徙ひ給はむを、如何と思したり、帝王と申せども、子を思ふ心の闇は、平人と同じ事にぞおはしましたしける、今上より母宮女三宮の御許に敕使ありけるが、御文にも唯この女二宮の御事はかりぞ申させ給へりける、故朱雀院の取別きてこの女三宮の御事

○寄生

をば、申し置かせ給ひしかば、女三宮のかく世を背きて、入道宮となられ給へれど、御勢望今に衰へず、何事も元のまゝにて、入道宮女三の奏せさせ給ふ事などは、今上には必聞召し入れつ、御用意深かりけり、主上も母宮も、かく尊き御心どもに、互に限りもなく持て傳かれ騒がれ給ふ大將の面目起しさも、如何なるにかあらむ、心の中には、格別に嬉しくも覺えず、尙ともすれば、故大君の事を思出し、打詠めつ、宇治の寺造る事をぞ急がせ給ふ、

薰大將は、匂宮の若君の五十日になり給ふ日を、數へ取り給ひて、その餅の用意を心に入れて、籠物、檜破籠などまで、見入れつ、世の常の普通なる様にはあらず、と思し志して、沈、紫檀、白銀、黄金など、道々の細工ども、いと多く召し伺候はせ

薰大將密參
二條院二面
中君

給へば、その細工人ども、我劣らじ、と、五十日の御儀式に要る器物ども、様々に爲出づめり、大將は例の匂宮のおはしまさぬ隙に、二條院の西對におはしたり、心の成し方にやあらむ、大將は官職も進み、主上の婿にもならなければ、是までよりは、今少し重々しく、尊げなる氣色さへ添ひにたり、と、見ゆ、中君は、心に薰君は今女二宮にも相添ひ給へれば、然りとも面倒しかりし不覺事などは、思ひ紛れ給ひにたらむ、と思して、心安く對面し給へり、されど大將は、有りしなからの氣色に、まづ涙催まれて、

(薰) 心にもあらぬ女二宮の交際、いと、思の外なるものにと、そあれ、と、世を思ひ亂る、事ばかりぞ勝りにたる、と愛立なくぞ愁訴へ給ふ、中君は、

(中) さやうの御心、いと有るまじき御事かな、人もこそ自然
微にも漏り聞き候へ、

などは言へど、心には、大將の主上の御婿にもなり給ひて、あ
れ程愛甚げなる事どもにも慰まず、故大君の事を忘れ難く覚え
給ふらむ心深さよ、と、哀に思ひ申し給ふに、一通にもあらず、
その心情を思ひ知られ給ふ、かくて大君、今におはせましかば、
いと嬉しからむ、と、口惜しく、中、君は思ひ出で申し給へど、も
しも今におはせましかば、大君もまたこの女二宮の事につけて、
我が有様のやうに、妹も姉も互に羨み合ひなく、各々その身を
恨むべかりけりかし、何事も身の數ならでは、世の人めかしき
事も、あるまじかりけり、と、覺ゆるにぞ、故大君の、いと、彼
の大將に、打解け果てずして、止みなむ、と、思ひ給へりし御心

掟は、尙特別に重々しく思ひ出でられ給ふ、薰大將は、若君を
切にゆかしがり申し給へば、中、君は耻かしけれど、何かは今更
隔て貌にもあらむ、彼の心懸け給ひし、わりなき一事につけて
は、如何にしても従はれぬことなれば、その一事の恨は負ふべ
くも、その他はいかでこの大將の御心には違はじ、と思して、自
分はともかくも返答へ申し給はで、乳母して若君を差出させ給
へり、この若君よ、匂宮の御子にして、中、君の御腹なれば、言
ふも更なることなれど、兩親君に似げなからむやは、忌々しき
まで白く美しくて、高やかに物語るやうに打笑み給へる顔を見
るに、大將は我が子にして見まほしく、羨ましきにつけても、
世間思ひ離れ難くなりぬるにやあらむ、と、我ながら思す、言ふ
かひなく成り給ひにし故大君の、世の常の御有様にて、その御

腹に、かやうならむ我が乳子を留め置き給へらましかは、いかに嬉しからむ、とばかり、大將は心に覺えて、此頃面目起しげなる女二宮の邊に、何時しか御子の生れ給はなむ、などは思ひ寄らぬこそ、餘り可爲なき大將の御心なるめれ、それにつけても、大將のかく女々しく曲けて、女のやうに、御覽じ籠めたる所こそ、いとほしけれ、さやうに悪び不十分ならむ人を、主上の取別き、婿に爲給ひて、切に近づけ睦び給ふべきにあらじものを、實々しき方様の御心掟などこそは、見善くものし給ひけめ、とぞ推測るべき、薰大將は、中君の、實にいとかく若君の幼稚き間を、隔心なく見せ給へるも、可憐なれば、例よりは物語など委細に申し給ふ間に、日も暮れぬれば、大將は女二宮にもものし給へれば、心安く夜をさへ更すまじきを、困しく覺ゆれば、歎

くく歸り出で給ひぬ、西對の若女房達は、

(女房) 美しの人の御匂ひよ、折りつればとかいふやうに、鶯も尋ね來ぬへかるめり、など、面倒しがるものもあり、

夏にならば、女二宮のおはします藤壺の方よりは、三條宮は塞る方角になりぬべし、と、陰陽師ども勘へ定めて、四月朔日頃、節分とかいふ事に入らぬ先に、大將は女二宮を三條宮に渡し奉りぬ、さて明日渡し奉らむとの日、藤壺に今上渡らせ給ひて、藤の花の宴爲させ給ふ、南の廂の御簾上げて、御倚子立てたり、公事にて、主人の女二宮の奉仕り給ふにはあらず、公卿殿上人の饗など、内藏寮より奉仕れり、夕霧左大臣、紅梅右大臣、藤中納言、左兵衛督、親王達は、匂宮、常陸宮など伺候ひ給ふ、南の庭の藤の花の下に殿上人の座はしたり、軒廊の東に、樂所の

折りつれば
○孟津抄に
折りつれば
袖こそ匂へ
梅の花あり
とやこいに
鶯の鳴くと
あり

主上爲ニ女
二宮留別
爲ニ藤花宴

藤中納言左
兵衛督○共
に鬚黒大臣
の子息なり
常陸宮○匂

夢に傳へし
云々○此事
柏木帖にあ
り

○寄生

人々召して、暮れ行く間に、雙調吹きて、主上の御樂遊に女二宮の御方より、御琴ども笛など出させ給へば、左大臣を始め奉りて、人々、主上の御前に取次ぎつゝ、参り給ふ、故六條院の御手づから書き給ひて、入道宮女三に奉らせ給ひし琴の譜二卷を、五葉の枝に付けたるを、左大臣取り次ぎ給ひて、奏し給ふ、次に、琴、箏の御琴、琵琶、和琴など、朱雀院の御物どもなりけり、笛は彼の左大臣の夢に傳へし、柏木權大納言の、古の形見のを、二なき物の音なり、と、今上豫て愛てさせ給ひければ、この折の清器なり、または何時かは光榮しき序のあらむ、と思して、左大臣の取出で給へるなるめり、左大臣は和琴、匂宮は琵琶を一人々に賜ふ、薰大將の御笛は、今日ぞ世になき音の限りは、吹き立て給ひける、殿上人の中にも、唱歌に堪へたる

人どもは、召し出でつゝ、いと愉快く樂遊ぶ、女二宮の御方より、粉熟進り給ふ、沈の折敷四枚、紫檀の高衝、藤村濃の打敷に、藤の折枝縫ひたり、銀の揚器、瑠璃の御盃、瓶子は紺瑠璃なり、左兵衛督、御賄ひ奉仕り給ふ、主上より夕霧左大臣へ、天盃参り給ふに、左大臣、

(夕)かく天盃頻りては、便なかるべし、親王達の御中にこそ、とて見渡せど、いづれも近しき御間柄にて、また然るべき御方もおはせねば、薰大將に譲り申し給ふを、大將遠慮申し給へど、主上の御氣色もいかゞありけむ、大方それへと有りつらむ、大將天盃捧げて、應と言へる聲遣ひ、持成さへ、例の公事なれど、人に似ず勝れて見ゆるも、今日はいとゞ見成しさへ添ふにやあらむ、天盃差返し賜はりて、下りて舞踏し給へる間、いと比類

○寄生

なし、上藤の親王達、大臣などの、天盃賜はり給ふさへ、目出度き事なるを、この薰大將は、況して御婿にて持て囃され給へる、御勢望一通ならず珍しきに、位次の制限あれば、下り座に返り着き給ふ間、氣の毒までにぞ見えける、紅梅右大臣は我こそ女二宮を得て、かゝる目も見むと思ひしか、薰大將に取られて妬の業よ、と、思ひ居給へり、この右大臣は、この女二宮の御母、藤壺女御をぞ、昔家におはせし頃より心懸け申し給へりけるを、女御入内り給ひて後も、尙思ひ離れぬ様に申し通はしなど爲給ひて、果はこの女二宮を得奉らむの心着きたりければ、今上に、この姫君の御後見企望む氣色漏らし申しけれど、今上は聞召しさへ傳へずなりにければ、右大臣いと心疾ましと思ひて、

(紅) 大將の、人柄は實に宿因特別なるめれど、何とて在位の帝王の、かく仰山しきまで、婿傳きし給ふべき、かゝる例は二とあらず、九重の内におはします皇女に、主上の殿近き間にて、平人の打解け伺候ひて、果は藤の宴や、何やかや、と持て騒がるゝことは、

などいみじく誹譏り呶き申し給ひけれど、さはいへ、さすがに今日の御宴もゆかしければ、參會りて、心の中にぞ腹立ち居給ひけるが、紙燭差して歌ども奉る人々、文臺の下に寄りつゝ、懷紙を置く間の氣色は、各々爲たり貌なりけれど、例の然したる歌もあるまじく、いかに怪しげに古めきたりけむ、と、思ひ遣れば、無理に不殘も尋ね書かず、一の町の人も、上藤とて御口つきどもは、格別なる歌も見えざるめれど、今日の紀念ばかり

すべらきの
云々○主上の
の御爲なれ
に袖をかめ
て折れる枝
頭そとへ及
ばぬ枝とい
宮をいへ女

萬代を云々
○行末萬々
なるまげれ
ども飽かす
日延喜帝
の飛舎の
藤宴の御製
かまくてそ
見まてほし
かれて萬代
る藤波のへ
とあるに花
れり

君が爲云々
○拾遺集に
延喜御時藤
壺の藤花の
宴に藏人藤

原國章、藤
の花部の内
は紫の雲か
とのみぞあ
やまたれぬ
よるとある
歌なり
世の常の云
々○薫君に
女二宮を得
を思ひてか
くよめり
あな尊○催
馬樂にあな
尊あな尊今
日の尊さ古
もはれ古も
かくやあり
けむやあり
の尊さ云々
とあり

とて、一つ二つぞ問ひ聞きたりし、左の歌は薫大將の下りて、藤の花を、御挿頭に折りて、進らせ給へりけるとか、

(薫歌) すべらぎの、挿頭に折ると、藤の花、及ばぬ枝に、袖かけてげり、

とて、大將の女二宮をば、我が物貌に誇りたるぞ憎きよ、(帝歌) 萬代を、懸けて匂はむ、花なれば、今日をも飽かぬ、色

とこそ見れ、また誰とか言ひけむ、大方夕霧、左大臣にもやあらむ、(夕歌) 君が爲、折れる挿頭は、紫の、雲に劣らぬ、花のけし

きか、この外に、また一首、(紅歌) 世の常の、色とも見えず、雲るまで、立ち昇りける、

藤波の花

これや彼の腹立つ右大臣の歌なりけむ、と、こそ見ゆれ、その他は拙詠にもやありけむ、かやうに特別なる面白き節もなくばかりぞあるなりし、夜更くるまゝに御樂遊はいと面白し、薫大將の、あな尊、と、謠ひ給へる聲ぞ、限なく愛甚かりける、紅梅、右大臣も、昔勝れ給へりし御聲の餘波なれば、今もいと物々しく打合せ給へり、夕霧左大臣の御七郎、童にて、笙の笛吹く、いと美しかりければ、今上御衣纏頭け賜はず、父の左大臣畏まり、下りて舞踏し給ふ、曉近くなりてぞ、今上は還御せ給ひける、祿ども、親王達公卿には、今上より賜はず、殿上人、樂所の人人には、女二宮の御方より、差々に賜はりけり、その夜ぞ、女二宮は、薫大將の三條宮に退出でさせ奉り給ひける、儀式いと

女二宮移
三條宮

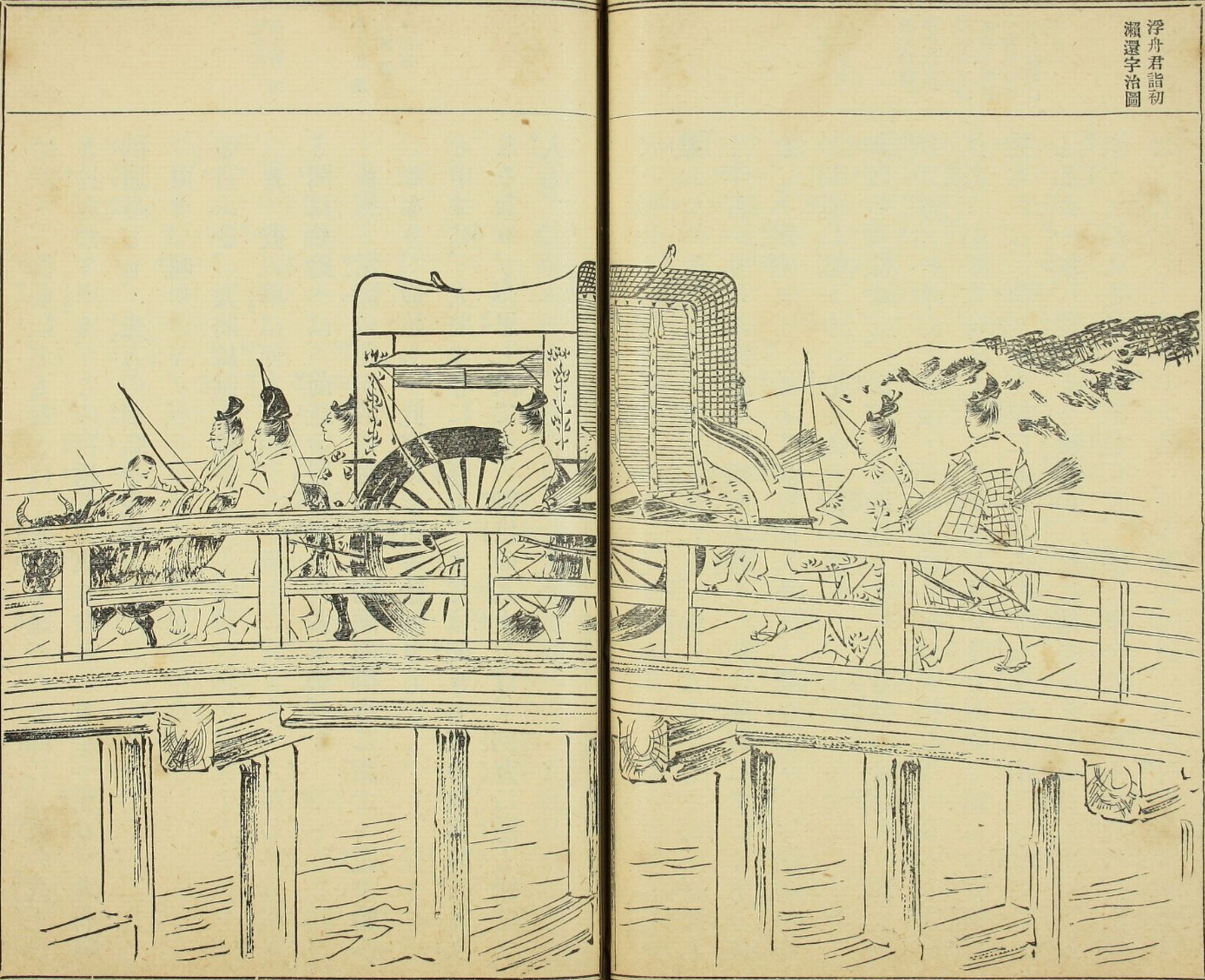
心特別なり、禁中の女房、藤の宴に伺候ひしものどもは、その
 まゝ残らず御送り奉仕りける、女二宮は廂の御車にて、その他
 は廂なき糸毛車三輛、檳榔毛の黄金作りの車六輛、普通の檳榔
 毛の車二十輛、網代車二輛、上藤中藤、次々の女房、併せて三
 十人、女童下使八人づゝ侍ふに、薰大将よりは、また迎の下車
 十二輛、本所より御迎の人々載せてぞありける、御送りの公卿
 殿上人、六位など、言ふ限なく、清華を盡させ給へりけり、大
 將はかく女二宮を我が邸に迎へ取りて、心安く打解けて見奉り
 給ふに、いと美しげにおはす、その様、細小に貴に、静婉にて、
 こゝはと見ゆる所なくおはすれば、大将は、我が宿世の程、口
 惜しからざりけり、と、心驕りせらるゝものながら、過ぎにし大
 君の事の、忘らればこそあらめ、尙この女二宮にも紛るゝ折な

薰大将訪
宇治故宮
朽木の下
○薰君と贈答
の辨尼の朽
木の歌前に
あり

く、物ばかり戀しく覺ゆれば、とても我身は、現世にては慰め
 兼ねつべき業なるめり、未來にて、佛になりてこそは、奇怪し
 く辛苦かりける大君との宿因の程を、何の應報にてかくありけ
 る、と、辨明めて、始めて思ひ離れめ、と、思ひつゝ、宇治の造寺
 の用意にはかり、心を入れ給へり、
 加茂の葵祭など、騒がしき間過ぐして、廿餘日の程に、薰大将、
 例の宇治へおはしたり、造らせ給ふ御堂見給ひて、爲べき事ど
 も掟て言ひなどして、さて例の朽木の下を見過ぎ給はむが尙可
 愍なれば、辨尼の方様におはするに、女車の仰山しき様にはあ
 らぬが一輛、荒ましき東男の、腰に録負へる數多具して、下人
 數多く頼もしげなる氣色にて、橋より今渡り來るが見ゆ、大将
 は、田舎びたるものかな、と、見給ひつゝ、まづ宇治の宮に入り

浮舟君詣初
瀬還字治圖

○寄生



百九十二

○寄生

百九十三

給ひて、御前駈どもなどは、未立ち騒ぎたる間に、彼の武士引き具したる車も、この宮指して来るなりけり、と、見ゆ、大將の御隨身ども、先方の前駈を見て、

(隨身) 呵やく、

と言ふを、大將は制し給ひて、

(薰) 彼の車は何人ぞ、

と問はせ給へば、前駈の聲打訛りたるもの、

(前駈) 常陸の前司殿の姫君の、初瀬の御寺に詣で、還り給へ

るなり、最始も、此宮にぞ宿り給へりし、

と申すに、大將は心に、應よ、さては聞きし彼の故宮の落胤人

なるなり、と、思し出で、御供の人々をば、別方に隠し給ひて、

人して、

浮舟君 詣
初瀬 還入
宇治宮

(薰) 御車入れよ、此所にまた人宿り候へど、北面に居候ふ、

とぞ言はせ給ふ、大將方の御供の人も、皆狩衣姿にて、仰山し

からぬ姿どもなれど、尙我が君の氣容や著からむ、と、供人ども

は煩はしげに思ひて、皆馬ども引き避けなどしつゝ、畏まりつ

ゝぞ居る、彼の車は入れて、廊の西の端にぞ寄する、この新造

しき寢殿はまた落成らで、顯露にて簾も懸けず、格子下し籠め

たる中の二間に、立て隔てたる障子の穴より、大將は覗き給ふ、

御衣の鳴れば、脱ぎ置きて、直衣指貫の限りを着てぞおはする、

車なる姫君は頓にも降りずして、辨、尼に消息して、

(姫君) かく尊げなる客のおはするは、誰ぞ、

など案内するなるべし、大將は車の中のこの様子を、それと聞

き給へるより、急ぎ辨、尼の方に、

薰大將 覗
浮舟君

(薰) ゆめその客に、我ありと言ふな、
と口禁めさせ給ひてければ、辨尼などは、皆さやうに心得て、消
息の返答には、

(辨) 早や降りさせ給へ、客人はものし給へど、別方にぞ居給
ふ、

と言はせたり、若き女房の供に乗れるが先降りて、車の簾打上
ぐめり、前駆どもの無骨なる様よりは、この御許京馴れて見善
し、また姫君の乳母にやあらむ大人びたる女房の今一人乗り添
ひたるが降りて、

(老女) 早う、

と言ふに、車の中にて、

(姫君) 怪しく顯露なる心地こそすれ、

若苗色○薄
青の少し過

と言ふ聲、微なれど、いと貴やかに聞ゆ、この大人びたる女房
(老女) 先度にも此方に宿り給ひて、今始めたる所にも候はず、
例の御事にて格子も下し籠めてばかりこそは候ふめれ、さて
はまた何處の顯露なる所か候ふべきぞ、
と心を遣りて言ふ、かくてその姫君は、尙人の見るべきと、用
意して、慎ましげに降るゝを見れば、まづ頭つき様體、細やか
に貴なる程は、いと能く故大君に似たり、と、思ひ出でられぬべ
し、されど扇をつと差隠したれば、顔は見えぬ間、不安心くて、
大將は胸打潰れつゝ見給ふ、車は高く、降るゝ所は低く下りた
るに、打板の用意もなきを、彼の女房どもは安らかに降り成し
つれど、姫君はいと困しげに、稍暫く見て、久しく降りて膝行
り入る、紅の濃き袿に、瞿麥と覺しき細長、若苗色の小袿着た

ぎたるなり

り、四尺の屏風を、大將の覗ける、この障子に添へて立てたるが、その上より見る穴なれば、残るべくもあらず見ゆ、姫君は此方をば後めたげに思ひて、彼方様に向きてぞ添ひ伏しぬる、女房どもは、

泉河○今の木津川にて初瀬街道なり

(女房) 我が姫君には、然も御氣毒げにおはしましつるかな、泉河の舟渡も、眞に今日はいと恐ろしくこそありつれ、この二月に初瀬に詣でし折には、水の少かりしかば、善かりしなりけり、いでや旅行は、東國路を思へば、何處か恐ろしき所あらむ、

など二人して、困しとも思ひたらず言ひ居たるに、主の姫君は、音もせずして、帔伏したり、腕を差出たるが、圓らかに美しげなる程も、常陸殿の女などいふべくも見えず、眞に貴なり、大

將は漸々腰痛きまで立ちすくみ給へど、尙動かで見給ふに、若き女房は、

(若女) あな香ばしや、いみじき香の香こそすれ、尼君の焼き給ふにやあらむ、

と驚く、老い女房は、

(老女) 眞にあな愛甚の物の香や、京人は、尙いところ風流に當世めかしけれ、一年常陸の館にて、守殿の合せたりし焼物も、天下にいみじき事と思したりしがど、東國にては、かゝる焼物の香は、え合せ出で給はざりきかし、この尼君の住居は、かくいと微におはすれど、装束のあらまほしく、鈍色青色といへど、いと清らにぞあるよ、
など褒め居たり、彼方の簀子より、女童來て、

(女童) 御湯など、參らせ給へ、
 とて、折敷どもも取り續きて、差入る、菓子取り寄せなどして、
 物承る、老女房は姫君に、

(老女) これ食せ、

など起せど、疲れ寝給ふにやあらむ、驚かねば、二人して、栗
 などやうの物にやあらむ、ほろくくと食ふも、大將の曾て聞き
 知らぬ心地には、傍痛くて、退き給へど、またゆかしくなりつ
 、尚立寄りく見給ふ、さて大將はこれより勝る分際の人々
 を、中宮を始めとして、此處彼處にて、容貌美き人も、心貴な
 る人も、幾多飽くまで見慣らし給ふべけれど、絶世ならでは、
 目も心も留まらず、餘り世人に誹謗るゝまでものし給ふ御心地
 に、只今は彼の姫君、何程勝れて見ゆることもなき人なれど、

かく立ち去り難く、強にゆかしきも、いと奇怪しき心なり、辨
 尼はこの大將殿の御方にも、御消息申し出したりけれど、御供
 の人々は、只今大將の、頻に垣間見し給へれば、
 (供人) 吾君には、御心地惱ましとて、今の間打休息ませ給へ
 るなり、

と心知りて言ひたりければ、辨尼は心に、大將には、この女君
 を尋ねまほしげに思し言ひしかば、かゝる序に、この女君に物
 言ひ觸れむと思すによりて、かく日を暮らし給ふにやあらむ、と
 思ひて、大將のかく覗き給らむとは知らず、例の大將の御庄の
 預人どもの進献れる、破籠や何や、と、辨の方にも入れたるを、
 彼の東國人どもにも食せなどして、辨尼は、佛事ども行ひ置き
 て、打化粧じて、姫君の方に来たり、前に褒めつる装束、實に

辨尼面ニ浮
舟君一

いと清潔かばらにて、見る目めも尙なほ由緒よし々々しく清きよげにぞある、

(辨) 昨日きのふおはし着つきなむ、と、待まちち申まをさせしを、何なとか今日けふも

日ひ高たかけては、おはし着つき給たまはざりし、

と言いふめれば、この老おい女房にようぼう、

(老女) 姫君ひめぎみには、いと怪あやしく困くるしげにばかり爲せさせ給たまへれば、

昨日きのふは彼かの泉河いづみがはの渡わたりに逗留とまりて、今朝けさも無期むごに御心おんこころ地ち猶豫ためらひ

て、遅おそくぞなり候まをひし、

など返答こたへへて、姫君ひめぎみを揺ゆり起おこせば、姫君ひめぎみは、今いまぞ始はしめて起おき居ゐ

たる、辨は尼にを耻はぢらひて、側見そばみたる傍目かたはらめ、大將おほしげの方かたよりは、い

と能よく見みゆ、真まことにいと由緒よしある目めつきの程ほど、髪かみの生はひ際ぎはの邊わたり、大

將おほしげは彼かの大君おほぎみをも、精細くわんじゆしく熟ま々まとしも見給みたまはざりし御顔おんかほなれ

ど、この女君おんなぎみを見るみるにつけて、唯ただ彼かの大君おほぎみと思おもひ出いでらるゝに、

例れいの涙落なみだおちぬ、またこの女君おんなぎみの、辨は尼にへ返答こたへする聲こゑ、氣容けいようの、微ほろ

なれど、中君なかつきみへにも、いと能よく似にたりと聞きゆ、されば大將おほしげは心こころ

に、可憐あはれなりける人ひとかな、かくも能よく大君おほぎみ姉妹いもうとに似にたりけるも

のを、今いままで尋たづねも知らで、過すぐしけることよ、此人こゝれより下くだり

たる、口惜くちをしき分際きはの人品しななりとも、大君おほぎみの縁者ゆかりにてさへあり

て、これ程ほど似通にがよひ申まをしたらむ人ひとを見ては、一通おほにはえ思おもふまじ

き心地こころちするに、況まして此人こゝれは、故八宮こはちのみやの御子みことして知しられ奉たてまつら

ざりけれど、真まことに故宮こゝれの御子みこにこそはありけれ、と、大將おほしげは見成みな

し給たまひては、限かぎりなく哀あはれに嬉うれしく覺おぼえ給たまふ、この女君おんなぎみのこゝに

おはするは、やがて只今ただいまも大君おほぎみの這はひ寄よりて、人間よのなかにおはしけ

るものを、と言いひ慰なぐさめまほし、方士ほうしして、蓬萊ほうらいまで美人をんなを尋たづ

ねて、花鈿かんとんばかりを形見かたみに傳つたへて見給みたまひけむ皇帝みかどは、尙なほいと悒いよ

方士して云々
○支宗楊
貴妃を尋ね
ること長恨

歌を引きて
桐壺帖にあ
り

薰大将召
辨尼問三浮
舟君事

○寄生

鬱かりけむ、これは大君とは別人なれど、現在その妹君にて、
況して能く似たれば、慰め所ありぬべき様なりと覺ゆるは、こ
の女君に、大将は宿因のおはしけるにやあらむ、辨尼は物語少
し爲て、疾く吾が室に入りぬ、これは女房の咎めつる薰香を、大
將の近くて覗き給ふならめ、と、辨尼の心得てければ、打解言も
語らずなりぬるなるべし、日も暮れ行けば、大将もやをら出
で、御衣など着給ひてぞ、例も召出る障子口に、辨尼召出し
給ひて、母君の有様など問ひ給ふ、

(薰) 折しも嬉しく、こゝに詣で來合ひたるを、彼の前に申せ
し女君の事は、如何せしぞ、
と言へば、辨尼は、

(辨) さやうに仰言、候ひし後は、然るべき序候はゞと待ち候

ひしに、去年は過ぎて、この二月にぞ、初瀬詣の便に對面し
て候ひし、彼の母君に、君の思召したる様は、微言し候ひしか
ば、母君は、この女兒、大君に擬へて思し言はむこと、いと
傍痛く、辱き御言にこそは候ふなれ、とぞ申し候ひしがと、
その頃ほひは、君には藤壺宮宮女二の御方へ參り給ひしとかに
て、長閑にもおはしまさず、と、承知りし、折便なく思ひ包み
てぞ、かやうになども、御返事を申させ候はざりしを、彼の
姫君、また此月にも初瀬に詣で、今日歸り給へるなるめり、
行き返りの中宿には、かく立寄り睦びらるゝも、唯過ぎにし
故宮の御氣容を、尋ね申さる、故にぞ候ふめる、彼の母君は、
差支る事ありて、このたびは姫君一人ものし給ふめれば、か
く君の、今此所におはしますとも、何かは知らせ申し候は

○寄生

む、

と申す、大將は、

(薰) 田舎びたる東國人どもに、我が忍び窺れたる旅行も見せ
じ、と、供の衆に口禁めつれど、如何はあらむ、下衆どもは隠
れもあらず、打漏らしつらむかし、さては如何すべき、姫君
一人ものし給ふらむこそ、却て心安かれ、さればかく宿因深
くてぞ、互に参り來合ひたる、と、姫君に傳へ給へかし、

と言へば、辨尼は、

(辨) 突然に、何時の間なる御契にか候はむ、

と打笑ひて、

(又) 然らば、さやうに傳へ候はむ、

とて彼方に入るに、薰大將は、

貌鳥の云々
○故大君を
今に忘れざ
るにより其
人に似たる
ものを尋れ
ありくとな
り

(薰歌) 貌鳥の、聲も聞きしに通、ふやと、茂みを分けて、今
日ぞ尋ぬる、

と、唯口吟のやうに言ふを、辨尼は入りて、姫君に語り申しけ
り、この姫君ぞやがて浮舟君なる、

此帖は薰君
二十六歳の
秋なり

筑波山○古
今集に筑波
山葉山茂山
まげけれど
思ひ入るに
はさばらざ
りけりとお
りこの浮舟
君は實は八
宮の末女に
おはすれど
今は常陸前
司の養女と
成り居れば
大將の身分
を以てさる
受領の女に
通はむも外
聞いかいと
憚るなり

第五十帖 (宇治六) 東屋

薰大將は宇治の旅宿に、常陸前司が繼女、浮舟君を、垣間見
しより、筑波山を分け見まほしき御心はありながら、葉山の茂
りまで、強に思ひ入らむも、外聞いと軽々しく、傍痛かるべき
分限なれば、思し憚りて、御消息をさへ、え傳へ給はず、彼の辨
尼の許よりぞ、浮舟君の實母北方に、大將の言ひし様などを、
度々微言し寄起しけれど、母君は心に、大將の眞實に御心留る
べきこととも思はねば、唯尋常に尋ね知り給ふらむ事とばかり、
面白く思ひて、大將の御身分の、現今世に二人と有り難げにお
はすなるを、吾が姫君の數なる身ならましかば、さやうに大將
に進らせても、いかに嬉しからむ、などぞ、萬事に思ひける、

前司の子ど
も○前妻の
腹には男は
藏人式部丞
女は源少納
言の妻讃岐
守の妻あり
後妻の腹に
は男は藏人
右近將監女
は小君左近
少將の妻な
り

前司の子どもは、亡くなりける前妻の腹に數多、この浮舟、君の實母なる後妻の腹にも、姫君と名つけて傳くあり、また幼き子など、次々に五六人あれば、前司は様々に子の扱ひをしつゝ、浮舟、君を他人と思ひ隔てたる心のありければ、母北方は、いと無情きものに、前司をも恨みつゝ、心に、いかでこの浮舟、君を引き勝れて、面起しき程に、爲成しても見せにしがな、と、日暮思ひ扱ひける、母君は、この浮舟、君の様容貌の普通にて、前司の子と取混ぜてもありぬべくば、いとかやうにも、何かは苦しままでも、持て惱まゝし、尙前司の子と思はせてもありぬべき世を、この君の物にも混らず、可憐に辱く、美しく生ひ出で給へば、可惜しく氣の毒なるものに思へり、前司が女多かりと聞きて、生君達めく人々も、音なひ言ふもの、

常陸前司家
族財産

いと數多ありけり、前妻の腹なる子ども一三人は皆様々に配嫁りて、大人びさせたり、今はこの浮舟、君を、思ふやうに縁付けても見奉らばや、と、母君は朝夕守護りて、撫で傳くこと限なし、前司も元より賤しき人にはあらざりけり、公卿の筋にて、一門の間柄も、物汚き人ならず、財産豊饒しくなれば、分限分限につけては思ひ上りて、家の内も嘩煜しく、物清げに住み成し、好事したる程よりは、怪しく荒らかに、田舎びたる心ぞ着きたりける、若き間より、然る東國の方の、遙なる世界に埋没れて、年経ければにやあらむ、聲など殆打訛みぬべく、物言ふ様少し鈍みたるやうにて、豪家の邊恐ろしく、面倒しきものに憚り怖ぢ、凡ていと全く正直なる心もあり、風流しき様なる琴笛の道は遠く、弓をぞいと能く引きける、受領の直々しき邊とも

鈍みたるや
うにて○拾
遺集にあつ
まにて養は
れたる人の
子は舌だみ

てこそ物は
言ひけれと
あり

庚申○庚申
を守るなり
庚申經に人
腹中有三
尸爲大害
常庚申之夜
上告天帝
記人品過
絶人生籍
庚申夜不
寢則不得
天上云々
とあり許渾
の詩に年長
毎勞推甲
子夜寒初
共守庚申
と見えたり

左近少將寄
意浮舟君

○東屋

言はず、この前司の勢力に引かされて、善き若人ども集ひ聚り、
装束有様は、一通ならず整へつゝ、腰折れたる歌合、物語、ま
たは庚申をし、目眩く見苦しく、遊び勝に好事めるを、彼の懸
想の生君達、この浮舟君を、愛々しくこそあるべけれ、容貌ぞ
いみじかるなる、など、美しき方に言ひ成して、心を盡し合へる
中に、左近少將とて、年齢廿二三ばかりの程にて、心ばせ沈着
に、才藝ありといふ方は世人に許されたれど、清華しく當世め
いてなどは、えあらぬにやあらむ、思ふ女として今まで通ひし
所も絶えて、いと懇切にこの浮舟君に言ひ渡りけり、母君は、
數多かる事言ひ寄る人々の中に、この左近少將は、人柄も見
善かるなり、心定まりて、物思ひ知りぬべかるめるを、人品も
貴なりや、この少將より勝りて、仰山しき分際の人、またか

かる受領の邊を、たとひ財産富饒しとはいへ、さすがに尋ね寄
るまじ、と、思ひて、この少將の御文を、吾が女、浮舟君に取次
ぎて、然るべき折々は、面白き様に返事など爲させ奉る、かく
て母君は心一つに思ひ設けて、前司こそ繼女として疎略に思ひ
成すとも、我は一命をも譲りて傳きてむ、この女君の様容貌の
愛甚きを、彼の少將の見着きなば、然りとも普通になどは、よ
もや思ふまじ、と、思ひ立ちて、婚禮は八月ばかりと豫約りて、
その用意に調度を設け、果敢なき翫弄事を爲させても、爲様特
別に、容子面白く、蒔繪螺鈿の、精細なる心ばえ勝りて見ゆる
ものをば、母君はこの浮舟君に、と、取り隠して、劣りの品をば、
これぞ善きとて前司に見すれば、前司は能くも見知らず、そこ
はかとなき、つまらぬ者どもの、人の調度といふ限は、唯取り

○東屋

内教坊○俗
人妓女など
の居る所な
り

集めて買ひ求め、並べ居るつゝ、目を纔に差出で、見るばかりにて、吾が實女どもには、琴琵琶の師匠とて、内教坊の邊より、迎へ取りつゝ、習はず、さてその女の、手一曲弾き取れば、前司は師匠をば起居拜みて悦び、祿を取らすること、身も埋まる程に多くして待遇し騒ぐ、師匠は女に、急速なる曲の音楽など教へて、面白き夕暮などに、師弟弾き合せて樂遊ぶ時は、父の前司は感涙も包まず、愚痴がましきまで、荒らかなるものゝ、さすがに物賞でしたり、かゝる事どもを、後妻は、少し物の由緒知りて、いと見苦しと思へば、別段に會釋はぬを、前司は、後妻の己が女浮舟、君ばかりを傳きて、吾女をば思ひ貶し給へり、と平生に恨みけり、かくて彼の左近少將は、母君と豫約りし間を待ちつけて、同じくは疾くと迫めければ、母君は、吾夫の前

司の、浮舟、君をば繼女として取合はざるに、我が心一つにて、かく思ひ急ぐもいと愼ましく、また少將の眞心も知り難きを思ひて、最初より傳へ始めたる媒人の來たるに、近く呼び寄せて、(母) この女君、前司には繼女にて、萬事思ひ憚ることのあるを、彼の少將のかく言ひて程の經ぬるを、少將の普通の人にものし給はねば、辱く氣の毒にて、この月に取結ばむ、と思ひ立ちにたるを、實父などものし給はぬ女なれば、我が心一つなるやうにて、氣の毒に、前司が實子にもなければ、少將を婿としても、萬事相應はぬ様に見られ奉ることやあらむ、と、豫て心苦しくぞ思ふ、前司の實子には、若き女子ども數多候へど、父をも具したるは、自然それに思ひ譲られて、心苦しくも思はねど、この女君は、かく實父もものし給はね

ば、この御事をばかりぞ、果敢なき世の中を見るにも、後め
 たくいみじきを、少將の物思し知らぬべき御心様と聞きて、
 かく萬事の愼ましさを、忘れぬべかるめるに、もし少將の案
 外なる御心ばえも見えなば、人笑に悲しくぞあるべき、
 と言ひけるを、媒人は直に少將の許に詣で、母君の言ひし事
 どもを、

(媒) 云々ぞ候ふ、

と申しけるに、少將は聞いて、氣色悪しくなりぬ、

(少) 彼の女君は、我は最初より、更に前司の御女にあらずとい
 ふことをぞ聞かざりつる、繼女にても前司の家に居れば、そ
 の女と同じ事なれど、人聞氣劣りたる心地して、彼家に婿と
 して出入せむにも、善からずぞあるべき、其方は能くも案内

せずして、浮びたる言傳へけることよ、
 と言ふに、媒人は氣の毒になりて、

(媒) 實は某とても、精しくも知り候はず、某の妹どもの、彼
 方に知る便ありて、仰せ言を傳へ始め候ひしに、前司には數
 多ある女子の中に、北方の特別に傳く女子とばかり聞き候へ
 ば、全く前司の實子にこそはあれ、と、こそ思ひ候ひつれ、他
 人の子持給へらむとも、問ひ聞き候はざりつるなり、容貌、心
 も勝れてものし給ふこと、母上の慈愛しく爲給ひて、面起し
 く氣高き事をせむ、と、崇め傳かる、と、聞き候ひしかば、それ
 に君の、いかで彼の邊の事、傳へ言ふべからむ人もがな、と
 言はせしかば、某には、然る便知り候ふ、と、執り次ぎ申し、
 なり、更に浮びたる罪候ふまじき事なり、

と腹悪しく、辯多かるものにて申すに、少將は利慾にはかり心懸けて、高尚ならぬ様にて、

(少) かやうに受領の邊に婿として往き通はむこと、世人の專許さぬことなれど、これも當世風の事にて、受領とても、能く婿を持て崇めて、後見だゝむに、世人の許さぬことも、別段に咎あるまじく、罪隠してぞある類もあるめるを、繼女とても實子と同じ事と、内々には思ふとも、餘所の見る目には、いかにも舅に阿諛ひて通ふこととぞ、世人は言ひ成すべき、源少納言、讚岐守などの、前司の實女に婿として、誇りたる氣色にて出て入らむに、それに我の、繼女に婿として、前司にも專請けられぬ様にて、交際はむぞ、いと人げなかるべき、と言ふ、この媒人、追蹤深く、うたてある人の心にて、少將の

源少納言讚岐守○二人先妻の女の婿なり

事違ひたるを、口惜しく思ひて、少將の方にも、前司の方にも、

此方彼方に對し、氣の毒に思ひければ、媒人は、少將に、

(媒) 眞に前司の實女と思さば、また年若くなどおはすとも、その實女をと、さやうに傳へ候はむ、今の北方の腹に、三人の實子ある、中に當れる女ぞ、姫君とて、前司はいと鍾愛しく爲給ふなる、

と申す、少將は、

(少) いざや、最初より浮舟君に、と、さやうに言ひ寄れることを差置きて、またその中、君にと言はむこそうたてあれ、されど吾が本意は、彼の前司の主の人柄も、物々しく大人しき人なれば、後見にもせまほしく、いさゝか見る所ありて思ひ始めし事なり、專顏容貌の勝れたらむ女の企望もなし、人品貴

に、艶ならむ女を企望はゞ、容易く得つべし、されど財産乏しく、事相應はぬ、風流好める人の、果々は物清くもなく、世人にも、人とも思はれたらぬを見れば、少しは世人に誹謗らるゝとも、凡て物足りて、平穩にて世の中を過ぐさむことを願ふなり、前司にかくぞと相談ひて、前司のさやうにも、と、許す氣色あらば、我は何かはさやうにも否とは言はむ、

と言ふ、この媒人は、その妹の、彼の西の御方浮舟、君の方に伺候ふ便によりて、かゝる少將の御文なども取り傳へ始めけれど、前司には、媒人は精しくも見え知らぬものなりけり、されどこの媒人、紹介もなく、只往き、前司の居たりける前に往きて、

(媒) 此方に執り申すべき事ありてぞ、參り候ふ、

と言はす、前司はこの媒人、この邊に時々出入すとは聞けど、前には呼び出でぬ、前司はこの媒人の、何事言ひにか來たらむ、と生荒々しく木強なる氣色なれど、媒人は、

(媒) 左近少將殿の、御消息にてぞ候ふ、

と言はせられたれば、前司はやがて出で逢ひたり、前司の語らひ難げなる顔してあれば、媒人は恐るゝ近く居寄りて、

(媒) 月頃内房の御方に、少將殿より御消息ありて、姫君の御事申させ給ひしを、御許可ありて、この月の間に取結ばむ、と契約り申させ給ふ事候ふを、少將殿には吉日を計らひて、何時しかと待ち思ほす間に、或人の申しけるやう、その姫君は、眞に北方の御腹にもものし給へど、前司の殿の御女にはおはせず、されば君達のおはし通はむに、世の外聞ぞ諛諂ひた

るやうならむ、受領の御婿になり給ふかやうの君達は、舅殿の、その婿君を、唯私の君の如く、崇め思ひ傳き奉りて、手の掌に捧げたる珠の如く、思ひ扱ひ後見奉るに懸りてぞ、然る受領の婿になる事をし給ふ人々あるめるを、少將殿のさすがにさやうの後見を企望み給ふ御志願にて、強に前司殿の御女の邊に言ひ寄り給ひながら、その御女生憎にも繼女におはして、前司殿には專請けられ給はで、源少納言や讚岐守などに、氣劣りておはし通はなむこと、便なかるべき由をぞ、切に誹謗り申す人々、數多候ふなれば、少將殿には目下思し煩ひてぞ、前司殿をば、最初より唯光榮しく、我が後見と頼み申さむに、堪へ給ふべき御勢望を撰び申して、北方に申し始め申し、なり、更に前司殿には繼女ものし給はむといふこと、

知らざりければ、少將殿の元の御志のまゝに、實の御女のまいた幼き姫君も、數多おはすなるを、それをば許し給はゞ、いと嬉しくぞ候ふ、とにかく前司殿の御氣色見て詣で來よ、と少將殿より仰せられつれば、かく參り候ふ、
と言ふに、常陸前司は、

(常) 少將殿より、我妻に、かゝる御消息候ふ由、更に委細しく承知らず、繼女として、我妻の子なれば、眞に我が女と、同じ事に思ひ候ふべき人なれど、我には善くもあらぬ童男女數多候ふて、確乎しからぬ身に、様々思ひ扱ひ候ふ間に、母なるもの、この繼女を他人と思ひ分けたる如く、曲り言ふこと候ふて、ともかくも我に口入れさせぬ人の事に候へば、實は微に、少將殿よりさやうにぞ仰せらるゝ事候ふとは、聞き候

ひしがど、少將殿の拙者を取り所に思しける御心は、更に知り候はざりけり、さやうに拙者を便に思し給ふは、いと嬉しく思ひ候ふ御事にこそ候ふなれ、また拙者には、いと可愛しと思ふ女の童候ふ、數多の女の中に、これをぞ命にも替へむと秘藏に思ひ候ふ、諸方より望み言ふ人々あれど、當世の人の、御心定めなく申し候ふに、さやうの人を婿に取り候ふては、却て胸痛き目をや見むの遠慮に、いまだその婿をば、思ひ定むることもなくぞ、いかで後安くも見置き候はむ、と日暮慈愛しく思ひ候ふを、少將殿に於き奉りては、御父の大將殿にも、拙者は若くより参り奉仕りき、即ち家子にて見奉りしに、少將殿には、その頃よりいと警策におはしたれば、引き續き奉仕らまほし、と、心着きて思ひ申し、がど、生憎遙

なる陸奥や常陸に、打續き任務めて、過ぐし候ふ年頃の間、今は初々しく覺え候ふてぞ、参り奉仕らぬを、少將殿の、かかる御志の候ひけるを、返すく、拜承りながら、仰せ言請け奉らむは、容易き事なれど、繼女の君の、月頃の御心違へたるやうに、この母の思ひ候はむことをぞ、思ひ候ふばかりに候ふ、

といと詳細に言ふ、媒人は、されば前司には承知げなるめり、と心に嬉しく思ふ、

(媒) 何かと思し憚るべき事にも候はず、彼の少將殿の御志は、唯前司殿一所の御許し候はむを、志願ひ思して、姫君の幼稚く年足らぬ程におはすとも、眞實の親の、尊く思ひ掟て給へらむをこそ、本意叶ふことには爲め、専ら實子にもなき所に

往き通ふ、邊詣ひたらむ舉動すべきにもあらずとぞ言ひつ、
 さて少將殿の人品は、いと尊く、勢望奥ゆかしくおはする君
 なりけり、若き君達とて、世の人のやうに、好色々々しく、
 貴びてもおはしませず、世の有様もいと能く知り給へり、ま
 た領じ給ふ所々も、いと多く候ふ、今の間は御位も淺く、御
 財産なきやうなれど、自然人の御氣容の御財産ありける様は、
 直人の限りなき富といふめる勢には、勝り給へり、來年は四
 位になり給ひなむ、今度の藏人頭は、疑ひなく天皇の御口づ
 から、勅定し給へるなり、さてその勅定には、萬の事満足ひ
 て、見善き少將の朝臣の、何とて妻をぞ定めざるや、然るべ
 き人撰りて、早く後見設けよ、朕かくてあれば、公卿には、今
 日明日といふばかりに任し擧げてむ、と、こそ仰せらるなれ、

何事も唯この少將殿ぞ、天皇にも親しく奉仕り給ふなる、御
 心もまたいみじく警策に、重々しくぞおはしますめる、可惜
 人の御婿を、かく自分から申し給ふ程に、思し立ちなむこそ
 善からめ、彼の少將殿には、我もく、婿に取り奉らむと、諸
 方より申し出で候ふなれば、此方に澁々なる御氣容あらば、
 少將殿には、外様にも思し成りなむ、これ唯前司殿の御爲、
 後安きことを執り申すなり、
 と詞多く事善げに言ひ續くるに、この前司いと淺ましく鄙びた
 る人にて、打笑みつゝ聞き居たり、

(常) 少將殿が、今の間御財産などの、心もとなからむ事は、
 な言ひそ、拙者命の候はむ間は、頂にも捧げ奉りてむ、不安
 心く、何を飽かぬとか思すべき、たとひ拙者、生命堪へずし

て、奉仕り中止とも、残りの寶物、領じ候ふ所々、皆この中の女に譲りて、一つにてもまた取り争ふべきものなし、子ども多く候へど、この女は様特別に、思ひ染めたる秘藏者に候ふ、唯少將殿の真心に思し顧みさせ給はば、少將殿の、大臣の位を求めむと思し企願ひて、世になき寶物をも盡くさむと爲給はむに、その寶物なきもの候ふまじ、當時の天皇、さやうに少將殿を愛恵み申し給ふなれば、拙者御後見は、不安心かるまじく、随分に奉仕るべし、これ彼の少將殿の御爲にも、拙者が秘藏女の爲にも、幸福となるべき事にや候はむかも知らず、

と快諾げに言ふ時に、媒人はいと嬉しくなりて、妹にも、かゝる事ありとも語らず、浮舟君の母君の方にも寄り付かて、直に少將の許に参りて、常陸前司の言ひつる事を、いともく善げに目出度し、と思ひて申せば、少將は、前司の、少し鄙びてぞあるとは聞き給へど、憎からず打笑みて聽き居給へり、されど大臣にならむ贖勞を取らむなどいふ事ぞ、餘り仰山しき事よ、と、少し耳留りける、

(少) さてこの事、彼の北方には、かくと申しつや、北方には浮舟君を、と志特別に思ひ始め給ふらむに、今俄にそれに引き違ひて、更に前司の實女に移らむこと、辟々しく曲けたるやうに執り成す人もあらむ、いざや如何せむ、と思ひ猶豫びたるを、媒人は、

(媒) 何か候はむ、彼の中の姫君も、同じく北方の御腹にて、いと尊きものに、思ひ傳き奉り給ふなりけり、但彼の繼女浮舟、

贖勞○錢を出して官を得ることなり前に前司がその寶物なきもの候ふまじと言ひたるをいふなり

君は、女達の中についての姉にて、年齢も大人び給ふを、母君の氣の毒に思ひて、其方にと面向けて申されけるなり、と申す、少將は心に、この媒人、月頃は母君の彼の繼女を、二なく尋常ならず傳くと言ひつるものの、突然にかく言ふも如何ならむと思へども、尙一旦は彼の母君に無情と思はれ、世人には少し誹謗らるゝとも、寧前司の實女に乗替へ、長在へて頼もしき事をこそ爲め、と、利慾に懸けては、いと全く狡き人にて、媒人の云ふまゝに、かく思ひ取りてければ、曩に彼の母君と豫約りし通りに、その日さへ取更へずして、前司の實女姫君といふにぞ、其日の夕暮より通ひおはし始めける、さて浮舟君の母北方は、吾が女君の婚禮に、人知れず用意ぎだちて、女房達の装束せさせ、室の内の修飾など、由緒々々しく

左近少將迷
利變し約

爲給ふ、浮舟君をも頭髮洗はせ、取修ひ見るに、少將などいふ身分の人に見せむも、いと可惜しき様を、哀や父宮に知られ奉りて、生ひ立ち給はましかば、よし父宮のおはせずなりにたりとも、薰、大將殿の言ふらむ様に、負ふ氣なくとも、何どかは思ひ立たざらまし、されど内々にこそかくは思へ、外の評判は、前司の子とも、子ならずとも、思ひ分かず、唯受領の女と思ひ貶しめむ、また實なる故宮の御子といふことを、尋ね知らむ人も、故宮の御子に數まへ給はざりし事を思はゞ、却て貶しめ思ひぬべきこそ悲しけれ、など、母君は思ひ續く、されど如何はせむ、女君の盛過ぎ給はむも敢なし、少將の賤しからず見善き分限の人の、かく懇切に言ふめるものを、など、心一つに思ひ定むるも、媒人の、かく詞美くいみじく言ひ立つるに、前司さへ欺かざる

るを、況して女は瞞されたるにやあらむ、少將の婿入を、明日
明日後と思へば、心惚忙しく急がしきに、浮舟、君にも心長閑に
居られたらず、忙しくそゝめき歩くに、前司外より入り来て、媒
人の言ひし次第を、長々と滞る所もなく言ひ續けて、

(常) 其方は我を思ひ隔て、吾女への御懸想人を、奪はむと
し給ひけるが、負ふ氣なく幼稚き事よ、餘りに愛甚からむ其
方の御女をば、要ぜさせ給ふ君達は、よもや世にあるまじ、
賤しく異様ならむ拙者が女子こそ、苟も左近少將殿の尋ね言
ふめれ、其方の御女を、少將殿にと、賢く思ひ企てられけれ
ど、肝腎の少將殿には、其方の御女には専本意なしとて、外
様へ思ひ成り給ひぬべかるなれば、同じくは我が女に、と思
ひてぞ、然らば少將殿の御心次第に任せ奉らむ、と、許し申し

つる、

など怪しく奥深き心もなく、人の思はむ所をも察らぬ人にて、言
ひ散らし居たり、北方は呆然れて、物も言はれずして、暫時思
ふに、世の中の心憂さ、人の心の定めなきを、搔き列ね、涙も
落ちぬばかり思ひ續けられて、やをら起ちぬ、さて西の御方に
渡りて、浮舟、君を見るに、いと可愛げに美しげにて居給へるに、
母君は、さりととも人には劣り給はじ、とは思ひ慰む、かくて乳
母と二人して、

(母) 心憂きものは、人の心なりけり、我は前司の子も、我が
子も、同じ事に思ひ扱ふとも、この女君の婿と思はむ人の爲
には、一命をも譲りぬべくこそ思へ、それを少將の、この女
君の父親なしと聞き侮りて、また幼稚く成り合はぬ妹女を、

この姉君に差越えて、かくは言ひ成るべしよ、かく心憂く、近
 き邊に、此事見じ聞かじと思ひぬれど、前司のかく少將を、
 中女に婿取ること、面目起しき事と思ひて、請け取り騒ぐめ
 れば、淺ましく、前司の心と少將の心と、合ひくたる、世
 の人の薄情き有様を、凡てかゝる事に口入れじと思ふ、いか
 で此所ならぬ別所に、暫時移るへてありにしがな、
 と打歎きつゝ言ふ、乳母も、吾が姫君を、かく貶しむる事よ、と
 いと腹立たしく思ふに、
 (乳) 何か歎くにも及び候はむ、この事違ふことも、却てこれ
 より勝る御幸福あらむ爲かも知らず、少將の、かく口惜しく
 いましける君なれば、この姫君の、可惜美しき御様をも、見
 知らざるなるべし、この我が姫君をば、心ばせある物思ひ知

りたらむ男にこそ、見せ奉らまほしけれ、薰、大將殿の、御様
 容貌の、微に見奉りしに、さも命延ぶる心地し候ひしがな、
 さて大將殿よりもまた愛憐に申し給ふなり、されば姫君の御
 宿因に任せて、大將殿の申し給ふ通り、さやうにも思し寄り
 ねかし、

と言へば、母君は、

(母) あな恐しや、人の言ふを聞けば、大將殿には、年頃一通
 ならむ女をば見じ、と言ひて、夕霧左大臣殿、紅梅右大臣殿
 式部卿宮などの、御婿に、といと懇切に微言かし給ひけれど、
 皆聞き過ぐして、今上の御傳き皇女を得給へる君には、如何
 ばかりの女をか、眞實には思さむ、よしそれとても、彼の母
 宮女三宮などの御方に預け置かせて、時々も見む、とは思し

も爲なむ、それもまた實に愛甚き御邊なれど、いと胸痛かるべきことなり、匂宮におはします中君の上の、かく幸福人と、世間に申すなれど、六條院の姫君故に、物思はしげに思したるを見れば、如何にもく二心なからむ人ばかりこそ、夫として目安く頼もしきことにはあらめ、我が身の上にても知りなき、故宮の御有様は、いと情々しく、愛甚く美しくおはせしがど、我をば人数にも思さざりしかば、如何ばかりかは心憂く辛苦かりし、この今の前司は、いと言ふがひなく、情なく、様悪しき人なれど、一面向きに二心なきを見れば、却て心安くて年頃をも過ぐしつるなり、折節の心ばえの、今度のやうに、愛敬なく用意なきことこそ憎けれ、平生は歎かしく恨めしきこともなく、互に打喧嘩ひても、心に合はぬこと

をば、やがて胸を霽らし明きらめつ、公卿、親王達などの、風流に心耻かしき人の御邊といふとも、我身數ならではそのかひあらず、萬の事、凡て我が身分からなりけり、と思へば、この女君の御事、萬事にいと悲しくこそ見奉れど、如何にかして、人笑ならず、爲立て奉らむ、と語らふ、前司は我が女の婚禮の事、急ぎ立ちて、北方に、(常)女房など、見善き數多あるなるを、此間は此方へ寄越し給へ、やがて帳なども、新しく爲立てられたるめる西の方を、事急遽になりたるめれば、彼方へ取渡し、とかく改むるも面倒しければ、この儘、此方にて、我が女の婚禮はせむ、とて、やがてこの西の方に来て、起居とかく修飾ひ騒ぐ、母君の、我が女君浮舟君の新婚の爲に、見善き様に清潔に、邊々あるべ

き限り修飾ひたる所を、前司の賢らに屏風ども持て来て、鬱陶
 きまで建て集めて、厨子に二階など、怪しきまで爲加へて、心
 を遣りて急げば、北方見苦しく見れど、口入れじと言ひてしか
 ば、唯見聞く、かくて西の御方浮舟、君は已むなく北面に移り居
 給へり、前司、

(常) 北方の御心は見知り果てぬ、我が女とて唯同じ子なれば、
 然りともいとかくは思ひ放ち給はじとこそ思ひつれ、さばれ
 世に母なき子もあるものを、よし我一人傳かむ、
 とて我が女を、晝より乳母と二人して、撫で修ひ立てたれば、
 憎げにもあらず、年齢は十五六の程にて、いと小やかに、満ら
 かなる女の、髪美しげにて、丈は小桂の程なるが、末いと房や
 かなり、前司はこれをいと愛甚しと思ひて撫で修ふ、

母君托ニ浮
 舟君於中君

(常) 何か北方の、その女浮舟、君の爲に、思ひ構へられける少
 將をしも、我が女の婿にはせむ、と思へども、少將の人品の、
 可憎しく警策にもものし給ふなれば、我もくと、婿に取らま
 ほしくする人の多かるなるに、人に取られなむも口惜しくて
 ぞ、かくは我の迎へ取るなる、

と、彼の媒人に謀られて言ふも、いと愚痴なり、左近少將も、常
 陸、前司の、此間の財産の厳めしく思ふやうなることよ、と、萬事
 の罪あるまじく思ひて、契約りしその夜も變更ず、來始めぬ、
 母君并に浮舟、君の乳母は、いと淺ましく思ふ、かくて浮舟、君を
 こゝに置き奉りて、とかく見扱ふも氣に喰はず、辟々しきやう
 なれば、匂宮の北方中、君の御方に預け奉らむとて、母君より中、
 君の御許に文奉る、

(母文) その事と申し候はでは、馴々しくや候はむと畏入りて、え思ひ候ふまゝにも申させぬを、實はこの女君君の慎むこと候ふて、暫時方違ひさせむと思ひ候ふに、其方の御方に、いと忍びて侍ひ給ひぬべき、隠れの方候はゞ、いともく嬉しくぞ候ふ、女君の、數ならぬ我が身一つの蔭に隠れもあへず、哀なる事ばかり多く候ふ世なれば、頼もしき君の御上の御方には、先づ預け參らせまほしくてぞ、かくは願ひ申し候ふ、と打泣きつゝ、書きたる文を、中君は可愍とは見給ひけれど、心に、故宮の、あれ程に許容し給はで終みにし妹君を、我一人跡に残りて、知り語らはむもいと慎ましく、また妹君の、見苦しき様にて、世に零落れむも、知らず貌にて聽かむこそ、氣の毒なるべけれ、さてさやうに妹君の世に零落れむを、餘所に見成し

て、我も此世に別段なる事もなくて、二人互に世に散落はむも、亡き故宮の御爲に、見苦しかるべき業を、と、思し煩ふ、かくて女房大輔が許にも、浮舟君の事を、母君よりいと氣の毒げに言ひ遣りたりければ、大輔は中君に、

(大) 常陸の前司の北方より、かく申し來りしも、全く然るやうこそは候はめ、彼の姫君をば、人悪く、不都合くもな言ひそ、かゝる劣腹の姫君の、君達の御中に交り給ふも、世の常の事なり、たとひ故宮の御許容なかりしとも、餘りいと無情く言ふまじき事なり、

など申して、母君の方に、

(大) 然らば彼の二條院の西の方に、隠ろへたる所爲出で、いと燕雜しげなるめれど、それにても過ぐし給ひつべくば、

常陸前司厚
待・婿君左
近少將

姫君には、暫時の間、来ておはしませ、
と返事、言ひ遣はしつ、母君はいと嬉しと思ひて、浮舟、君をば、
人知れず出し立てつ、さて浮舟、君も、彼の姉君中、君の御邊をば、
睦び申さまほしと思ふ心なれば、却てかゝる少將の違約の事ど
も出て来るを、嬉しと思ふ、前司は我が婿君少將の取扱ひを、
如何ばかり目出度き事を爲むと思ふに、その盛華しかるべき事
も知らぬ心には、唯荒らかなる東絶どもを、押圓がして投げ出
でつ、食物も所狭きまでぞ運び出で、言ひ騒ぎけるを、少將
の下衆などは、それをいと畏多き情に思ひければ、少將もいと
嬉しくあらまほしく、心賢く前司の秘藏女には取り寄りにけり、
と思ひけり、北方はこの間の事を見捨て、知らずあらむも、
辟みたらむことと思ひ念じて、唯前司が爲るまゝに任せて、見

居たり、婿君少將の出居と、少將の侍人の居る所とを、修飾ひ
騒げば、家は廣けれど、前腹の婿君源少納言は東の對に住む、こ
の他男子などの多かるに、明きたる所もなし、されば彼の浮舟、
君の住み居たる西の方に、婿君少將は前司の實女と住み着きぬ
れば、西の方の廊など近き、邊はみたらむ所に、浮舟、君を住ま
せ奉らむも、母君は飽かず氣の毒に覺えて、とかく思ひ廻らす
間に、中、君の御方に移し参らせむとは思ふなりけり、さてこの
浮舟、君の御類親には、數まへ給ふ人のなきを、人の輕蔑るなる
めりと思へば、特に許容し給はざりし、中、君の邊を、強に依頼
みて参らす、乳母と若き女房二三人ばかりして、二條院の西の
廂の、北に寄りて、人氣遠き方に局したり、
母北方は、中、君には、年頃かく遙に隔たり居つれど、元より疎

浮舟、君移
二條院西廂

浮舟君母君
面中君一

く思すまじき人なれば、此方に參る時は、中君は耻ぢず逢ひ給ふ、かくて母北方は、中君を見奉れば、いとあらまほしく氣容特別にて、若君の御扱ひをしておはする御有様、羨ましく覺ゆるも哀なり、されば心に、我も、故宮の北方には、姪に當れば、中君にも離れ奉るべき身にはあらず、北方となり給ふと、宮仕せしと、言ひしばかりの違ひにて、數まへられ奉らず、さてかく人には輕侮らるゝと思ふには口惜しくて、かく強ひて中君に睦び申すも味氣なしとぞ思ふ、さて此處には、浮舟君の御物忌にて籠りおはしますと、言ひてければ、人も通はず、母北方も二三日ばかり此處に居たり、今回は母君は、心長閑に中君の御有様を見る、かくて匂宮渡り給ふ、母君ゆかしくて、物の狹間より覗き見れば、いと清らに、恰も櫻を折りたる様し給ひて、

繼子の式部
丞○常陸前
司が前妻の
子なり

我が頼もし人に思ひて、辛く恨めしけれど、心には違はじ、と思ふ夫常陸前司より、様容貌も、人の身分も、此上なく勝りて見ゆる五位四位ども、相跪き伺候ひて、此事彼事と、邊々の事ども、家司などして申す、また若やかなる五位ども、顔も知らぬものども、多かり、我が繼子の式部丞にて藏人兼ねたるが、内裡の御使にてこの宮に參れり、宮の御邊にも、え近く參らず、此上なき宮の御氣容を、あはれ此は何人ぞ、かゝる尊き宮の御邊におはする中君の愛甚さよ、餘所に思ふ時は、愛甚き人々と申すとも、二心ありて辛き目見せ給はゞ、如何に物憂からむ、と推測り申させつらむ淺ましきよ、匂宮の、この御有様容貌を見れば、七夕程にても、かやうに見奉り通はむは、いといみじく嬉しかるべき業かな、と思ふに、宮は若君抱きて、鍾愛しむ

七夕○孟津
抄に契りけ
む心ぞつら
き七夕の年

に一たび逢ふは逢ふかはとあり

おはす、中、君は短き几帳を隔て、おはするを、宮は押遣りて、物など申し給ふ、御容貌どもいと清らに、二所とも似合ひたり、母君は、故八宮の物寂しくおはせし御有様を、思ひ比ふるに、同じ親王達と申せど、いと此上なく寂寞れたる業にこそありけれ、と覺ゆ、宮は几帳の内に入り給ひぬれば、若君をば、乳母などと翫弄び申す、人々参り集れど、宮は惱ましとて御寝り暮らしつ、御膳此方に参る、萬の事氣高く、心特別に見ゆれば、母君は前司の家において、我が萬事いみじき事を盡すと見思へど、受領などの、平凡しき人の邊は、口惜しかりけり、と、思ひ成りたれば、我が女君浮舟、君も、かやうにして、差並べたらむに、片輪ならじかし、我が前司の、富饒き勢を頼みて、その女を后妃にもなしてむ、と、思ひたる、これも同じく我が一腹の子なれど、

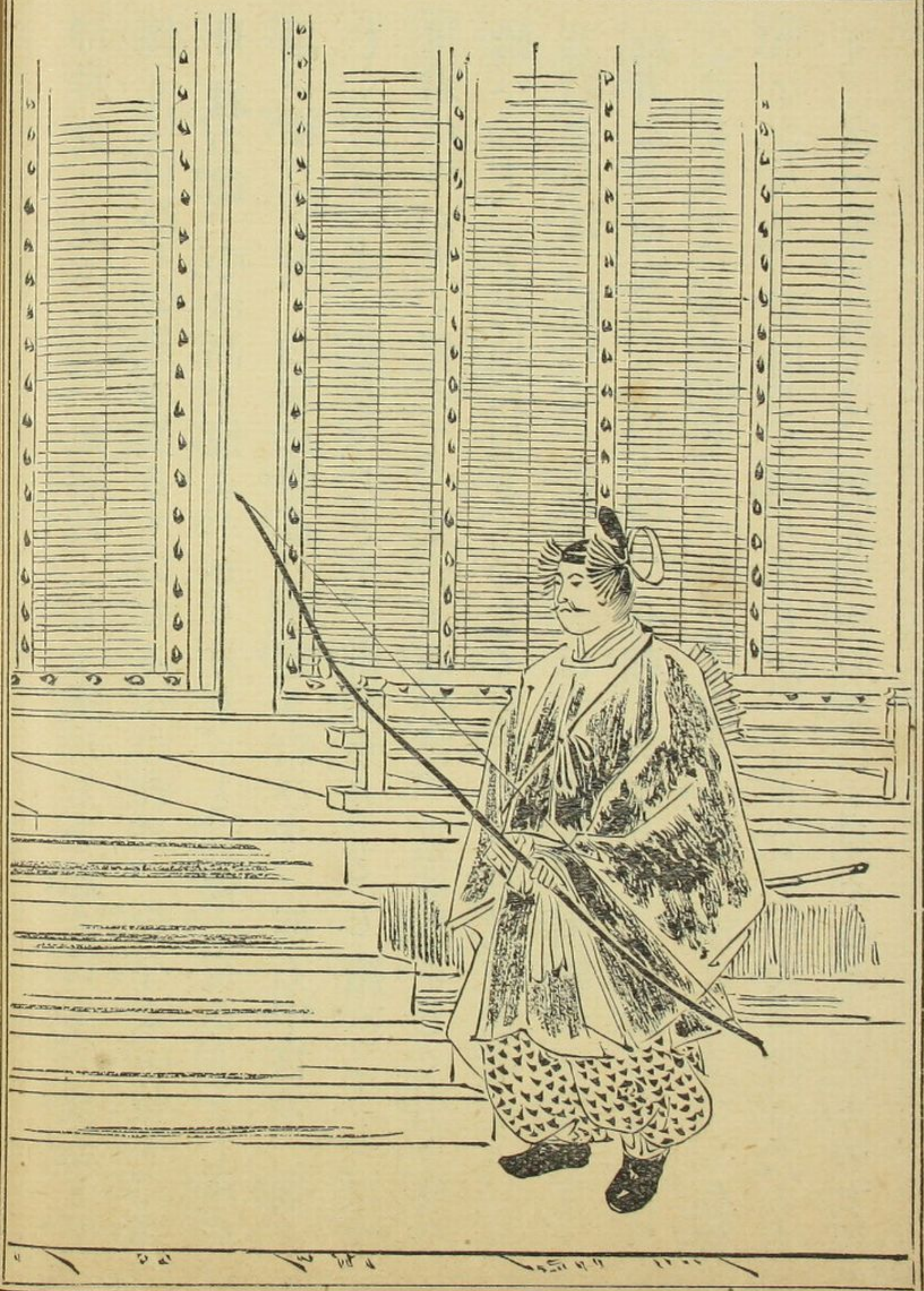
匂宮参内

浮舟君母君
竊見二匂宮

浮舟、君に比ぶれば、氣容此上なく劣れるを思ふにも、皇族と受領とは自然その胤も異なるものなるべければ、尙今より後も、浮舟、君の爲、心は高く使ふべかりけり、と、夜一夜あらまし事に、思ひ續け、り、匂宮は日高けて起き給ひて、明石中宮の、惱ましく爲給へば、参るべしとて、御装束などし給ひておはす、母君はゆかしく覺えて、またも覗けば、宮は端正しく引き修ひ給へるも、また他に似るものなく氣高く、愛敬づき清らにて、若君を見捨て給はで、翫弄びおはす、御粥、強飯など参りてぞ、此方なる西、對より出で給ふ、今朝より参りて、侍所の方に休息ひける人々、今ぞ参りて、物など申す中に、清げだちて、何條事なき人の、不用じき顔したるが、直衣着て、太刀帶きたるあり、宮の御前にては、何とも物の數にも見えぬを、此方の女房

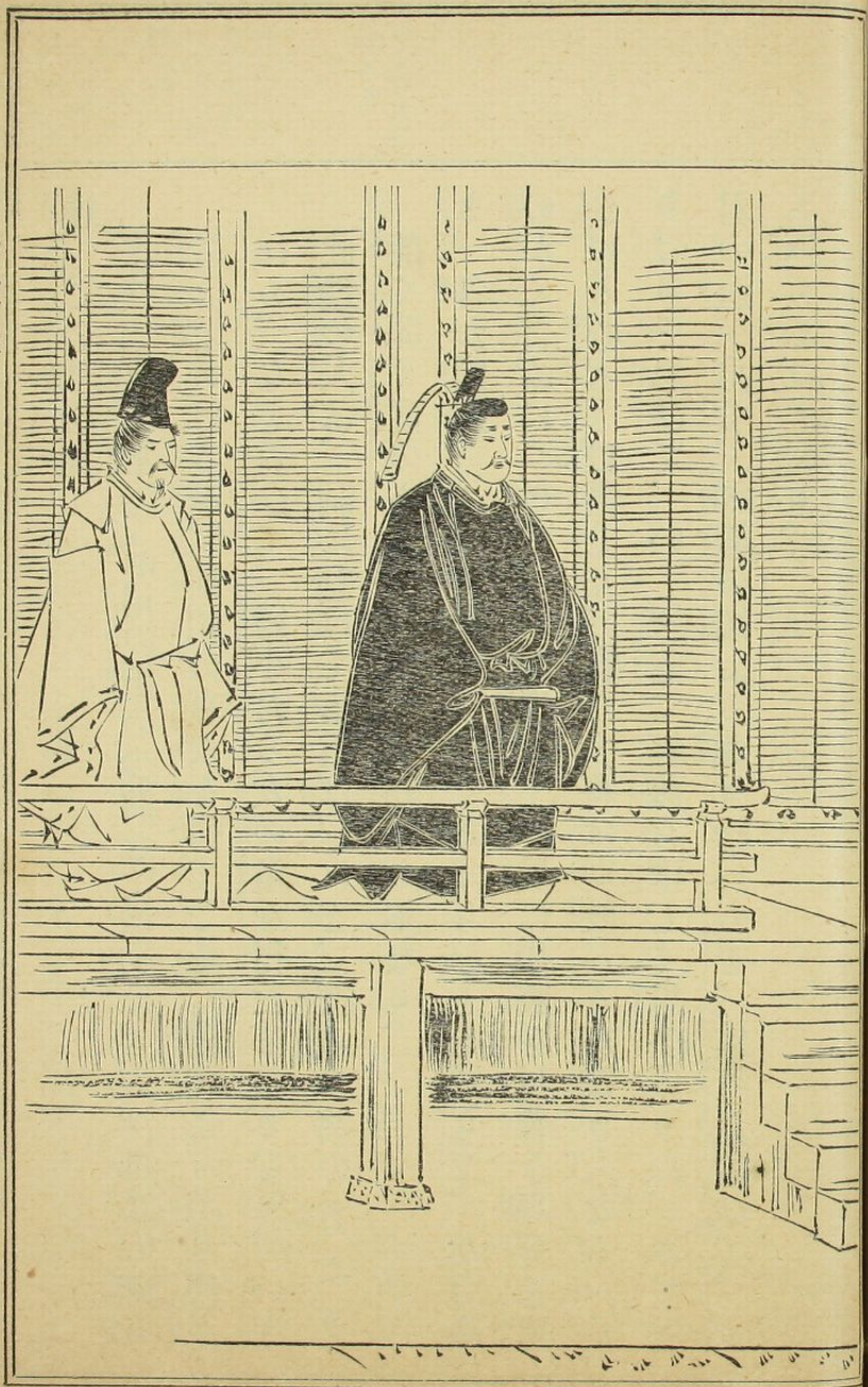
左近少將拜
謁勾宮圖

○東屋



二百四十八

○東屋



二百四十九

達、この人を見て、

(女房) 彼ぞ常陸前司の婿の少將な、最初はこの浮舟君の御方にと定めけるを、前司の實女を得てこそ、前司より勞り傳かれめ、など言ひて、矮小たる女の童を得たるなるなり、いざ此邊の人は、詞に懸けても言はざれど、彼の少將の方より、能く聞く便のありて、かくは知りつるなり、

と、各が同志言ふ、母君の、かく聞くらむとも知らで、女房達のかく言ふにつけても、胸潰れて、曩に少將を見善き身分と思ひける心も、口惜しく、實に少將は別段なる事なき人なるべかりけりと思ひて、いとゞしく輕蔑らはしく思ひ成りぬ、さて若君の這ひ出で、御簾の端より覗き給へるを、宮打見給ひて、立ち返りおはしたり、

浮舟君母君
語中君

故北方○八
宮の北方に
て中君の母
君なり

(匂) 中宮の御心地、快しく見え給はゞ、やがて退出でなむ、それとも御心地尙苦しくし給はゞ、今夜は内裡に宿直せむ、今は一夜を隔づるも、覺束なきこそ困しけれ、
とて、暫時若君を慰め遊ばして、出で給ひぬる様の、返すぐ見るともく、飽くまじく、匂ひやかに美しければ、宮の出で給ひぬる餘波、母君は物寂しくぞ詠めらるゝ、さて母君は中君の御前に出で来て、いみじく宮を賞て奉れば、中君は、母君をば、田舎びたりと思して、笑ひ給ふ、母北方は、

(母) 故北方の亡せ給ひし間は、君には言ふかひなく幼少き御程にて、この後如何にならせ給はむと、傍より見奉る人も、故宮も思し歎きしを、此上なき御宿因の、いみじくおはしければ、彼のやうなる宇治の山懷の中にも、生ひ出でさせ給ひし

にこそありけれ、但故大君のおはしまさずなりにたるこそ、
口惜しくも飽かぬ事なれ、

など打泣きつゝ申す、中、君も打泣き給ひて、

(申) かくてはあれど、世の中の恨めしく心細き折々もあり、
されどまたかく長在ふれば、少しは思ひ慰めつべき折もある
を、古頼み申しける兩親の御影どもに後れ奉りけるは、却て
世の常の事に思ひ成されて、特に母親には、見奉り知らずな
りにければ、さてもあるを、尙彼の故大君の御事は、今に盡
きせずいみじう悲しくこそあれ、薰大將殿の、故大君の事を
思すにつけては、萬の事に心の移らぬ由を、愁へつゝ、淺か
らぬ御心の様を見るにつけても、故大君の此世におはしまさ
ぬ事、いとこそ口惜しけれ、

と言へば、母北方は、

(母) 大將殿は、あれ程世に例なきまで、今上の傳き思したる
に、心驕りし給ふらむかし、故大君の今におはしまさしか
ば、尙この女二宮の事、急かれもし給はざらましょ、
など申す、中、君は、

(中) いざや、我もかく六君に壓されたれば、故大君も存生へ
給はゞ、女二宮に壓され給ひて、我と同様のものと、人笑はれ
なる心地もせましを、却て存生へ給はぬも、心安くやあらま
し、凡て見果てぬにつけて、奥ゆかしくもある世にこそはあ
れ、と思へど、彼の大將は如何なるにかあらむ、怪しきまで
物忘れせず、故宮の御後世をさへ、思ひ遣り深く追善を爲給
ひ、また何かと後見歩き給ふめる、

など、心美しく語り給ふ、母北方、

(母) 大將殿には、彼の過ぎにし大君の御代りに、尋ねて見む、と數ならぬこの女君君浮舟をさへぞ、彼の辨の尼君には、言ひける、かく大將殿の言はすまゝに、さやうにも參らせやせむ、と思ひ寄り候ふべき事には候はねど、一本故にこそは言ふなれ、と、辱けれど、可憐にぞ思ひ候はるゝ大將殿の御心深さなる、

など言ふ序に、この浮舟君を持って煩ふことを泣くく語り、さて母北方は、心に、彼の事件、詳細にはあらねど、人も聞きけり、と思ふに、左近少將の、浮舟君をば思ひ侮りて、契約を違へける様など微言して、

(母) この女君、何につけて、朝夕の慰めにて見過ぐしつべく

一本故に○古今集に紫のひともと故に武藏野の草はみながらあはれとぞ見るとあり

や、我の打捨て候はむ後は、案外なる様に零落ひ候はむが悲しさに、寧その前に尼になして、深き山にや居る置きて、然る方に世の中を思ひ絶えて候はまし、などぞ、思ひ詫びては、さやうに思ひ寄り候ふ、

と言ふ、中君は、

(中) 實に氣の毒なる御有様にこそはあるなれど、何か、人に侮らるゝ御有様は、かやうに孤子になりぬる人の習にこそあれ、さりとも浮世は、さすがに思ひ捨てられぬ業なりければ、我は、故宮の無下に宇治に絶え籠るべきやう、思ひ掟て給へりし身をさへ、かく心より外に、浮世に長在ふれば、況して妹君の此世を捨て給ふこと、いとあるまじき御事なり、それにまた妹君の、尼に窺し給はむも、いと惜しげなる御様にこそ

浮島○花鳥
餘情に鹽竈
の前に浮き
たる浮島の
うきて思ひ
のある世な
りけりとな
り夫陸奥守

あれ、
など、いと大人びて言へば、母北方、いと嬉しと思ひたり、さてこの母北方、年闌けたる様なれど、由緒なからぬ様にして清けなり、但甚く肥え過ぎにたるぞ、常陸殿の妻とは見えける、
(母) この女君、故宮の御子にも數まへ給はず、辛く情なく思し放ちたりしに、いと人げなく、人にも輕蔑られ給ふ初となり候ふ、と、見候へど、かく君にも申し入れ、御覽せらるゝ事になりたるにつけてぞ、古の憂さも、始めて慰み候ふ、
など年來の物語、浮島の哀なりし事も、申し出づ、
(又) 我身一つのとはかり、言ひ合はする人もなき、筑波山の有様も、今はかく説明申させて、何時もくいとかくて伺候はまほしく思ひ成り候ひぬれど、前司の館には、良からぬ

にて母北方
奥州にあり
ける時の憂
き事どもな
り
我身一つ○
この引歌寄
生帖に擧げ
たり
筑波山の有
様○此は夫
常陸守にて
母北方常陸
に居りし時
の辛き有様
なり

彼の木像求
め給ふ○此

賤しのもものども、いかに我等をば、立ち騒ぎ求め候はむぞ、さすがに心惚忙しく思ひ候はるゝ、かゝる受領の身分の妻などに、身を窶すは、口惜しきものにぞ候ひける、と、我身にも思ひ知らるゝを、この女君ばかりは、我身のやうに、受領の妻などには成さじと思へば、唯君に一任せ申させて、我は知り候はじ、
など託ち申し懸くれば、中君は、實にもその妹君、世に見苦しく零落れてもあせらじ、と、見給ふ、さて妹君浮舟君は、容貌も心様も、え憎むまじく可愛げなり、物耻も仰山しからずして、様善く深窓娘たるものながら、才なからず、近く伺候ふ女房達にも、いと能く隠れて居給へり、物など言ひたるも、昔の大君の御様に、怪しきまで似奉りてぞあるよ、中君は彼の木像求め

事寄生帖にあり

薰大将参

二條院

給ふ薰、大将に見せ奉らばや、と、打思ひ給ふ折しも、大将参り給ふ、と、人申せば、中、君は、例の几帳引き修ひて、心遣ひす、母北方は、

(母) その大将殿をば、いで見奉らむ、彼の大将殿をば、微に見奉りける人の、いみじきものに申すめれど、匂宮の御有様には、え並び給はじ、

と言へば、御前に伺候ふ女房達、

(女房) いざや、大将殿と、宮の御前とは、何れとも、えこそ申し定めね、

と申し合へり、中、君は、

(中) 大将と宮と、相對ひておはせし様を見れば、宮の方は、いと情なげに、見苦くこそ見え給ひしか、取り放ちて、一人づ

つにして見れば、何れも、右も左も分かれず、さても容貌美き人は、他人を押し消すこそ憎けれ、
と言へば、女房達笑ひて、

(女房) されど宮の御前は、大将殿には壓され奉り給はざるめり、如何ばかりの人か、宮の御前をば、消し奉らむ、
など言ふ間に、大将は今ぞ車より降り給ふなり、と、聞く間、喧囂しきまで、警蹕りて、頓にも見え給はず、待たれたる程に、歩み入り給ふ様を、母北方見れば、實にあな愛甚、風流しげとも見えぬながらぞ、艶めかしく、貴に清げなるよ、母北方は、物越なれど、我方よりは、不覺に見られ苦しく、耻かしくて、額髪なども引き修はるゝに、大将には心耻かしげに、用意多く、際もなき様ぞし給へるが、内裡より参り給へるなるべし、御前駈

どもの様子數多して、大將は、

(薰) 昨夜中宮の、惱み給ふ由、承はりて、参りたりしかば、御腹の親王達の、伺候ひ給はざりしかば、いと御氣の毒に見奉りて、此方の宮の御代りに、今まで伺候ひ候ひつる、今朝も宮には、いと解怠して遅く参らせ給へるを、これは君の敢なく留め給ひし御過失に、推測り申させてぞ候ふ、

と申し給へば、中、君は、

(中) 御代理は、實に一通ならず、思ひ遣り深き御用意にぞ候ふ、

とばかり返答へ申し給ふ、大將は、匂宮内裡に宿直り給ひぬるを見置きて、尋常ならぬ心にて、中、君の方にはおはしたるなるめり、例の物語、いと懐かしげに申し給ふ、さて大將は、事に觸れ

岩木なられ
ば○白氏文
集に人非木
石皆有情
とあり
御禊○細流
抄に戀せし

て、唯故大君の忘れ難く、世の中の物憂く成り勝る由を、女二、宮の事につけて、内裡邊に憚れば、顯には言ひ成さで、微め愁へ申し給ふ、中、君は心に、大將の、彼のやうにも、いかでか世を経て、故大君の事を、心に離れずばかりはあらむ、大將の眞實には思さざらめど、昔より淺からず我にも言ひ始めてし事の筋なれば、今も尙名残なくはあらじ、と、ばかりにやあらむ、など見成し給へど、大將の眞實に思ひ給ふ御氣色は、著きものなれば、見持て行くまゝに、愛憐なる大將の御心様を、中、君も岩木ならねば、思ほし知る、さて大將は恨み申し給ふこと多かれば、中、君はいとわりなく打歎きて、大將のかゝる御心を止むる御禊を爲させ奉らまほしく思ほすにやあらむ、中、君には、彼の人形言ひ出で、

と御手洗川にせしみそぎ云々とあり後に人形といふにつけてかくいへり

山寺の本尊
○浮舟君の事をいふ此
事寄生帖にあり

大君に似て
○大君は中

(中) 例の女君は、いと忍びてこの邊にぞ候ふ、
と微言かし申し給ふを、大將はその浮舟君も、宇治の故宮にて垣間見給ひしより、普通の心地はせずゆかしくなりにたれど、突然にふと其方に移らむ心地もまた爲す、

(薰) いでやその山寺の本尊、願満て給ふべくばこそ尊くもあらめ、時々心疾ましく相見るばかりにては、何のかひなく、却て山水も濁りぬべくやあらむ、

と言へば、果々は、中君の、

(中) うたての御聖心よ、

と、微かに笑ひ給ふも、母北方は、心に可笑しく聞ゆ、大將は、

(薰) いでさらば、我が心を、その母君に、言ひ傳へ果てさせ給へかし、この御遁れ詞こそ、思ひ出づれば、また彼の大君

君に譲りて
遁れ中君は
又浮舟君に
譲りて遁る
いと似たり
とはいへり

見し人の云々
○見し人は大君にて
形代は人形
撫物はこの
人形にて我
が體を撫て
災殃をこれ
に負せて水
に流すもの
なり我は
大君の戀しき
思をこれに
負せて祓ふ
べしとなり

御禊川云々
○撫物は捨
つるものな

に似て、忌々しく候へ、

と言ひても、また涙催みぬ、

(薰歌) 見し人の、形代ならば、身に添へて、戀しき瀬々の、撫物にせむ、

と、例の戲言に言ひ成して、紛らはし給ふ、中君は、

(中歌) 御禊河、瀬々に出ださむ、撫物を、身に添ふかげと、

誰か頼まむ、引く手数多にとかや、賢らなれど、彼の女君の

爲、いと氣の毒にぞ候ふよ、

と言へば、大將、

(薰) 終に寄る瀬は、更にも言はず其方に候ふよ、憂れたきやうなる我身は、いと果敢なくて、水の泡にも争ひ候ふかな、かやうにして其方に搔き流さる、我身の撫物は、いで眞實ぞ

れば大將の心は頼み難しとなり、引く手数多○伊勢物語に大ぬさの引く手あまたになりぬれば思へどえこそ頼まざりけれとあり御禊川といひしかば大ぬさの歌を引きたれど下句頼まざりけり
の意を取れ
るなり
終に寄る瀬
○伊勢物語
に大ぬさと
名にこそ立
てれ流れて

かし、されば少許の人形にては、いかで慰むべきことぞ、
など言ひつゝ、昏くなるも、中君は面倒ければ、大將に、
(中) 假始にもものしたる客人母北も、奇怪と思ふらむが愼まし
ければ、今宵は尙疾く歸り給ひね、
と誘調へ遣り給ふ、大將は、
(薰) さらばその客人に、女君へは、かゝる心の企願、年經ぬ
るを、我が卒爾になど言ひ出づるも、淺くは思ひ成るまじく、
君より言はせ知らせ給ひて、母君の不都合なるまじく、許
容し給はゞこそ、嬉しくもあらめ、かやうの戀路には、我は
初々しくて、また練習はぬ身に候へば、何事も愚痴がましき
までにぞ候ふ、
と語らひ申し置きて、出で給ひぬるに、この客人母北方は、大

も終に寄る瀬はありけるものなりあり
乳母の不意に思ひ寄りて云々○此事前にあり
天の川○孟津抄の七夕の歌前に引けり
浮舟君母君竊見薰大將
倚り居給へりつる○河海抄に我妹子がきては倚り添ふ眞木柱そもむ

將をば、
(母) いと愛甚く、思ふやうなる御様かな、
と賞で、心に、この女君の乳母の、不意に思ひ寄りて、姫君
をば、大將に進らせよ、と、度々言ひしことを、あるまじき事に
言ひしがど、大將の今日の御有様を見るには、たとひ天の川を
渡りても、女君には、かゝる彦星の光をこそ待ちつけさせめ、
我が女君は、普通ならむ人に見せむは、惜しげなる様を、是ま
で東夷めきたる人をばかり、見慣らひたる目移しに、彼の少將
を、賢きものに思ひけるを、母北方は、今は後悔しきまで、思
ひ成りにけり、さても彼の薰、大將の倚り居給へりつる眞木柱も
褥も、その名残に匂へる移香、言へばいと事更めきたるまで有
り難し、時々見奉る此方の女房達さへ、その度毎に賞で申す、

つましきゆかりと思へばとあり
藥王品云々
○法華經に
若有レ人、聞
是藥王菩薩
本事品、能
隨喜讚善者、
是人現世、
口中常出青
蓮華香、身毛
孔中、常出
牛頭梅檀之
香、とあり牛
頭山に生ず
る梅檀なり

(女房) 經などを讀みて、功德の勝れたることあるめるにも、
香の香ばしきを、尊き事に、佛の言ひ置きけるも、道理なり
や、藥王品などにも、取別きて言へる、牛頭梅檀とかやいふ、
仰山しき物の名なれど、遠く説經などに聞くばかりならず、
まづ眼前に、彼の大將殿の近く振舞ひ給へば、佛は眞の言を
言ひけり、とこそ覺ゆれ、大將殿には、幼少くおはしける間
より、行法もいみじく爲給ひければ、かく香ばしきならむよ、
など言ふもあり、また、

(女房) 彼の殿の前世こそゆかしき御有様なれ、

など、口々賞つることどもを、母北方は、不覺に笑みて、嬉し
く聽き居たり、中、君は、大將の忍びて言へる、浮舟、君の事を、
母北方に微言かし言ふ、

(中) 彼の大將は一日思ひ始めつる事は、執念きまで、輕々し
からずものし給ふめるを、實に目下女二宮を迎へ給ひし有様
などを思へば、面倒しき心地すべけれど、彼の世を背きて、尼
にも成し給はむなど、思ひ寄り給らむも、同じ事に思ひ成し
て、女君をば、大將に進らせ試み給へかし、
と言へば、母北方、

(母) この女君には、世の辛き目見せず、人に輕侮られじ、の
心にてこそ、鳥の聲も聞えざらむ住居まで、思ひ置き候ひつ
れ、實に大將殿の御有様氣容を見奉り候ふには、下使の身分
になりても、かゝる人の御邊に、馴れ申さむは効能ありぬべ
し、況して若き女君などは、心着け奉りぬべく候ふめれど、
數ならぬ身には、却て物思の種をや、いと、蒔かせて見候は

鳥の聲も○
河海抄に飛
ぶ鳥の聲も
聞えぬ奥山
の深き心を
人は知らな
むとあり
數ならぬ○
孟津抄に數

ならぬ身に
は思のなか
れかし人な
みくくに濡
る袖かな
とあり

む、高きも卑きも、女といふものは、かゝる嫉妬愛執の道に
てこそ、現世後世まで、苦しき身となり候ふなれ、と思ひ候
へばぞ、女君の爲、いと氣の毒に思ひ候はるゝ、それも誰君
の御心にぞ任せ奉る、ともかくも思し捨てずものさせ給へ、
と申せば、中、君はいと面倒しくなりて、

(申) いざや我は、大將の來し方の心深さに打解けて言ふにて、
行先の有様は知り難きをよ、
と打歎きて、別段に物も言はずなりぬ、

明けぬれば、常陸前司が方より、北方の迎に、車など率て來て、
前司の消息など、いと腹立たしげに脅迫したれば、母北方は、
中、君に、

(母) 女君の事、辱く萬事に頼み申させてぞ、嬉しく候ふ、尙

常陸前司迎
其妻浮舟君
母君

岩窟の中○
引歌前に掲

暫時隠させ給ひて、岩窟の中にも、また如何やうにとも、
思ひ廻し候ふ間、數には候はずとも、思し放たず、何事をも
教へさせ給へ、

など、打泣きつゝ、申し置きて、この女君浮舟、君も、いと心細く、
是まで習はぬ心地に、母君に立ち離れむことを悲しく思へど、
中、君の當世めかしく、美しく見ゆるこの二條院の邊に、暫時も
見馴れ奉らむと、思へば、さはいへさすがに嬉しく思ほえけり、
北方の車引き出る間の、少し曉明くなりぬるに、匂宮は内裡よ
り退出で給ふ、さて宮には若君をば覺束なく覺え給ひければ、
忍びたる様にて、御車なども、例ならでおはしますに、北方の
車、宮の御車に差合ひて、押停めたれば、宮は廊に御車寄せて降
り給ふ、

匂宮從
内
裡退出

(句) 何その車ぞ、また闇き間に急ぎ出るは、
 と宮は彼の薫、大將の事も御心にあれば、特別に目留めさせ給ふ、
 さて御心に、かやうにてぞ、忍びたる所には、紛れ出るぞかし、
 と我が好色の御心習慣に、思し寄るも、氣味悪し、さて北方の
 迎の者どもは、

(迎) 常陸殿の退出でさせ給ふなり、
 と申す、宮の御前駈の若き者どもは、かくと聞きて、

(若) この宮にて、殿呼はりこそ過分なれ、
 と嘲笑ひ合へるを、北方は聞くも、實に此上なく違ふ身の分限
 よ、と、悲しく思ふ、これも唯この女君の事を思ふ故に、己も人
 人しくならまほしく覺えける、況して本人浮舟君を、平凡しく、
 受領の妻に窶して見むことは、いみじく可惜しく思ひ成りぬ、

句宮は内に入り給ひて、中君に、

(句) 常陸殿といふ人を、此方に通はし給ふか、心ある朝ぼら
 けに、急ぎ出でつる車添などこそ、事更めきて見えつれ、
 など尙思し疑ひて言ふ、中君は聞き悪く傍痛と思して、

(申) 女房大輔などが、また若くての頃の友達にてありける女
 の、特別に當世めかしくも見えざるめるが、訪ひ来て歸りし
 なるを、由緒々々しげにも言ひ成すことかな、人の聞き咎め
 つべき事をばかり、常に疑はしく執り成し給ふこそ辛けれ、
 我を思さむと思し給はば、さやうに無き名は立てずして、唯
 忘れて居給へよ、
 と打背面き給ふも、可愛げに美し、かくて宮には、明るるも知
 らで御寝りたるに、人々數多參り給へば、やかで寢殿に渡り給

無き名は○
 河海抄に思
 はむと頼め
 しこともあ
 るものを無
 き名はたて
 る唯に忘れ
 れとあり

中君沐髮

ひぬ、明石中宮は仰山しき御病惱にもあらで、平癒り給ひにければ、夕霧左大臣の君達など、心地快げにて、圍碁、韵塞などしつ、遊び給ふ、夕方宮は寢殿より西、對に渡らせ給へれば、中君は御沐髮の間なりけり、女房達も各々打休息などして、御前には人もなし、小き女童のあるして、宮は中君に、

(句) 折悪しき御沐髮の間こそ見苦しかるめれ、物寂しくてや詠めむ、

と申させ給へば、女房大輔は、

九月十月○
沐髮は正、
五、九月を
忌むまた十

(天) 實に例は、宮のおはしまさぬ隙々にこそ、御沐髮は爲させ給へ、君には怪しく日頃も御沐髮懶がらせ給ひて、今日過ぎなば、この月は日もなし、九月十月は、忌む月なれば、いかでかは爲させ給はむとて、今日奉仕らせつるものを、生憎

月は神無月
(髪無月)と
て忌むなり

にも宮のおはしつることかな、

匂宮瞥見
浮舟君

と御氣の毒がる、若君も寢給へりければ、女房ども、其方に此彼伺候ふ間に、宮は佇立み歩き給ひて、西の方に、例ならぬ少女の見えつるを、新參の女房にてもあるか、など思して、差覗き給ふ、中の間なる障子の細目に開きたるより見給へば、障子の彼方に、一尺ばかり引き避けて、屏風立てたり、その端に、几帳を簾に添へて立てたり、帷子、單を打掛けて、紫苑色の花やかなるに、女郎花の織物と見ゆるが重りて、袖口差出でたり、屏風の一枚疊まれたるより、心にもあらで見ゆるなるめり、宮は新參の女房の、口惜しからぬなるめりと思して、いと密に障子押開け給ひて、やをら歩み寄り給ふも女君は知らず、さて女君浮舟君は、此方の廊の壺前栽の、いと面白く、色々に咲き亂

れたるに、遣水のわたり石高きほど、いと面白ければ、端ちかく添ひ伏して詠むるなりけり、宮は今少し障子押開けて、屏風の端より覗き給ふに、浮舟君は、宮とは思ひも懸けず、例此方に来馴れたる女房にやあらむ、と思ひて、起き上りたる様體、いと美しく見ゆるに、宮には例の好色の御心は過ぐし給はで、衣の裾を捉へ給ひて、前に開け給ひし此方の障子は引き立て給ひて、屏風の狭間に居給ひぬ、浮舟君は、怪しと思ひて、扇を差隠して、見返りたる様、いと美し、宮は扇を持たせながら捉へ給ひて、

(句) 誰ぞ、名告こそゆかしけれ、

と言ふに、浮舟君は氣味悪くなりぬ、宮は然る屏風の面に、顔を外様に持て隠して、いと甚く忍び給へれば、浮舟君は心に、

これは彼の尋常ならず微言かし給ふらむ薫、大將にやあらむ、香ばしき氣容なども、それと思ひ渡さるゝに、いと耻かしく爲む方なし、かくて浮舟君の乳母は、人氣の尋常ならぬを、奇怪と思ひて、彼方なる屏風を押開けて來たり、

(乳) これは如何なる事にか候はむ、奇怪しき業にも候ふかな、と申せど、宮は遠慮り給ふべき事にもあらず、かく突然なる御爲業なれど、詞多かる御性質なれば、何やかやと言ふに、日は暮れ果てぬれど、

(句) 誰とか、名を聞かざらむ間は、許さじ、

とて、馴々しく臥し給ふに、乳母は、始めて句宮なりけり、と思ひ果つるに、言はむ方なく呆れて居たり、彼方にては女房達(女房) 御燈臺は燈籠にて、北、御方中只今常の御方へ渡せら給

ひなむ、

と言ふなり、中君の常の御方ならぬ方の御格子どもぞ今下すなる、浮舟君のおはする西の方は、離れたる方に爲成して、高き棚厨子、一具ばかり立て、屏風の疊まれて、袋に入れ籠めたるを、所々に寄せ懸け、何かの荒らかなる様に爲放ちたり、かく俄に浮舟君の移り住み給へばとて、通ふ道の障子一間ばかりぞ開けたるを、右近とて、大輔が女の、中君の方に伺候ふが来て、格子下して、此方に寄り来るなり、

(右) あな暗や、また御燈臺も参らざりけり、御格子を、また暮れぬに、急ぎ下して、闇に惑ふよ、

とて、格子一枚を引き上ぐるに、宮も生困しと聞き給ふ、乳母もまたいと困しと思ひて、一體この乳母は、物包みせず短慮に、

且つ愚鈍き人にて、右近の来るに、

(乳) 物申し候はむ、此所にいと奇怪しき事の候ふに、見困じてぞ候ふ、え動き候はでぞ、爲む方なく候ふ、

と言ふ、右近は、

(右) 何事ぞ、

とて探り寄るに、袿姿なる男の、いと香ばしくて、浮舟君に添ひ臥したるを、右近は宮の、例の怪しからぬ御様よ、と、思ひ寄りにけり、さて右近は、浮舟君の決して心合せ給ふまじき事よ、と推量らるれば、

(右) 實にいと見苦しき事にも候ふかな、右近は如何に申させむ、今彼方に参りて、上の御前にこそは、忍びて申させめ、とて立つを、淺ましく片輪に、誰もく思へど、宮は更に怖ぢ

給はず、女君を見て、御心に、淺ましきまで貴に美しき人かな、
 尙何人ならむ、右近が敬ひて言ひつる氣色を思ふにも、いと普
 通の新參の女房にはあらざるめり、と、心得難く思されて、女君
 に、右言ひ左言ひ、恨み給ふ、浮舟君は、氣に喰はずげに、氣
 色ばみても持成さねど、唯いみじく死ぬばかりに思へるが、い
 と氣の毒なれば、宮は情ありて、誘調へ慰め給ふ、右近は中君
 に、

(右) 宮には只今、然々こそおはしませ、女君には、いと御氣
 の毒に如何に思すらむ、

と申せば、中君は、

(中) 宮にはまた例の心憂き御様かな、彼の母君も、いかに憎
 々しく、怪しからぬ様に思ひ給はむとすらむ、母君には、こ

の女君を、後安く、と、返すぐ、我に言ひ置きつるものを、

と、いと氣の毒に思せど、宮へは如何申さむ、宮にはこれまで、
 伺候ふ女房達も、少し若やかに美しきものは、見捨て給ふこと
 なく、怪しきまで好色給ふ御癖なれば、今また忽ちかゝる事も
 おはすなり、それにつけても、彼の女君の邊に、宮は如何して
 かは思ひ寄り給ひけむ、と、淺ましきに、中君は物も言はれ給は
 ず、右近は、

(右) 今日の上達部數多參り給ふ日にて、宮には寢殿にて遊び
 戯れ給ひて、例もかゝる時は、西對へは遅くも渡り給へば、
 女房達皆打解けて休息み候ふぞかし、さて油斷したる間に、
 かゝる事は候ふ、それにつけても如何にすべきことぞ、彼の
 乳母こそ愚鈍ましかりけれ、右近ならば、女君につと添ひて

居て守護り奉り、宮をば引きも搔投り奉りつべくこそ思ひたりつれ、

と、女房少將といふものと、二人して、浮舟君をば氣の毒がる間に、内裡より御使参りて、明石中宮、この夕暮より、御胸惱ませ給ふを、只今いみじく重く惱ませ給ふ由申さす、右近は、

(右) 生憎、心なき折の御病惱かな、宮へ申さむ、とて起つ、少將は、

(少) 今申したりとも、宮には動き給ふまじければ、かひなくもあるべき事を、愚痴がましく、餘りな脅迫し申し給ひそ、

と言へば、右近は、

(右) 否、また實事はなかるべし、と、二人忍びて私語き交すを、中君は心に、いと聞悪き宮の御

明石中宮病
召三宮

性質にこそあるめれ、かく仇々しくましませば、少し心あらむ人は、我が邊をまで、疎みぬべかるめりと思す、右近は宮の御前に参りて、御使の申すよりも、中宮の御惱みの事を、今少し惚忙しげに申し成せば、宮は更に動き給ふべき様にもあらぬ御氣色に、

(右) 内裡よりは、誰が御使に参りたる、例のまた仰山しく脅迫すよ、

と言へば、右近、

(右) 中宮の侍に、平茂常とぞ名告り候ひつる、と申す、宮は出で給はむことの、いとわりなく口惜しきに、人目も思されぬに、右近立ち出で、彼の御使を、故意と宮に聞ゆるやうに、西面に呼びて問へば、御使に申次ぎつる人も寄り

来て、

(御使) 中務、宮も早や参らせ給ひぬ、中宮、大夫は口今ぞ、某が参りつる道に、御車引き出るを見候ひつ、

と申さすれば、宮は聞召して、御心に、實に中宮には、俄に時惱み給ふ折々もあるを、右近の申しつるは眞實なりけり、と思すに、人の思すらむことも不都合くなりて、女君へはいみじく恨み契り置きて出で給ひぬ、浮舟、君は、恐しき夢の覺めたる心地して、汗に押浸されて、伏し給へり、乳母は打扇ぎなどして、

(乳) かゝる御住居は萬事につけて、慎ましく便なかりけり、かく匂宮のおはしまし始めては、終には更に善き事候はじ、あな恐しや、宮はいかに限なき人と申すとも、安からぬ御有

様は、いと味氣なかるべし、寧餘所の差離れたらむ人にこそ、善しとも悪しとも、思はれ給はめ、北方と御姉妹の間にて、宮に關係らひ奉らむこと、外聞も傍痛きことよ、と、思ひ候ふて、降魔の相を出して、つと宮を見奉りつれば、宮はいと氣味悪く、下衆々々しき女と思して、某が手を、甚く摘ませ給へるこそ、平人の懸想事めきて、いと可笑くも覺え候ひつれ、彼の前司殿の館には、今日も前司殿は、母君と、夫婦いみじく喧嘩ひ給ひけり、前司殿は、母君にはその女君唯一所の上を見扱ひ給ふとて、吾が女どもをば思し捨てたり、婿君左近少將殿のおはする間の、御旅居は、いと見苦し、と、荒々しきまでぞ申し給ひける、下人さへ聞くがいと氣の毒なりけり、凡て彼の少將殿ぞ、いと愛敬なく覺え候ふ、この少將殿の御事

候はざらましかば、御夫婦の間、内々は安からず、面倒しき事は、折々候ふとも、年來のまゝにて、平穩におはしますべきものを、

など打歎きつゝ言ふ、浮舟、君は、只今の所は母君の事など、ともかくも思ひ廻らされず、唯匂宮の事の、いみじく不都合く、また見知らぬ目を見つるに添へても、中、君の如何に思すらむと思ふに、詫しければ、俯伏に伏して泣き給ふ、乳母はいと困しと見扱ひて、

(乳) 何かかく思す、母親おはせぬ人こそ、便なく悲しかるべけれ、餘所の思はくは父親なき人はいと口惜しけれど、吾君には、かくて母君ましませば、父君ましまさずとも、不良き繼母に憎まれむよりはいと安し、ともかくも爲奉りてむ、な

思し屈せそ、さりとも初瀬の観音おはしませば、可愍と思ひ申し給はむ、習はぬ御身に、度々頻りて詣で給ふことは、世人のかく輕侮り様にはかり思ひ申したるを、姫君にはかくもありけり、と、その世人どもの、驚き思ふほどの、御幸福おはしませとこそ、観音に祈願ひ候へば、吾君には、よも人笑にては止み給ひなむや、

と、世を安げに慰め言ひ居たり、匂宮は急ぎて内裡へ参り給ふなり、さて内裡近き方にやあらむ、西の御門より出で給へば、宮の物言ふ御聲も、浮舟、君の居給ふ方に聞ゆ、いと貴に限りもなく美しく聞えて、心ばえある古詩など打誦し給ひて、過ぎ給ふ間、浮舟、君は不覺に面倒しく覺ゆ、移馬ども引き出して、宿直に伺候ふ十餘人ばかり、御供にして参り給ふ、中、君は、浮舟、

移馬○移の鞍を懸けたる馬にて行粧の爲なり

中君召浮舟君

君のいと氣の毒に、うたて思ふらむ、と思して、宮の御事は知らず貌にて、女房して、

(中) 大宮中宮 惱み給ふとて、宮は參り給ひぬれば、今夜は歸り給はじ、我は沐髮の餘波にやあらむ、心地も惱ましくて起き居候はぬを、君には此方へ渡り給へ、徒然にも思さるらむ、と申し給へり、浮舟、君は、

(浮) 亂り心地の、いと困しく候ふを、今少し猶豫ひて、參り候はむ、

と乳母して申し給ふ、中君は、

(中) 如何なる御心地ぞ、

と立ち返り訪らひ申し給へば、浮舟、君は、

(浮) 何心地とも覺えず、唯いと困しく候ふ、

と申し給へば、女房少將、右近の二人、互に目瞬きをして、

(少右) 女君浮舟 には、實事もありつるか、と、北の御上君中君の傍

痛くぞ思すならむ、

と言ふも、尋常なるよりは、いと氣の毒なり、中君は心に、い

と口惜しく、氣の毒なる業かな、妹君には、彼の薰大將の、心

留めたる様に言ふめりしを、この事聞召しなば、いかに憎々しく

思ひ貶さむ、宮のやうに、かく亂りがはしくおはする人は、聞

き悪く實ならぬ事をも、曲り言ふ代りに、また少し案外に實な

る事をも、さすがに見許しつべくこそおはすめれ、然るをこの

大將は、言はで憂しと思はむこと、いと耻かしげに心深き人な

るを、生憎思ふ事添ひぬる、妹君の身上なるめり、さてこの妹

君、年來見ず知らざりつる人の上なれど、その心操容貌を見れ

ば、え思ひ放つまじく、可愛げなるものかな、我身の有様は不足事多かる心地すれど、この妹君のやうに、かく物果敢なき目も見つべかりける身の、さやうには流離れずなりにけるにこそ、實に見善きなりけれ、今は唯彼の懸想き心添ひ給へる大將の、平穩にて思ひ離れなば、更に何事も思ひ入ること、なくなりなむ、と思す、さて中、君はいと多かる御髪なれば、頓にもえ乾し遣られずして、起き居給へるも困し、白き御衣一襲ばかりにておはするが、細やかに美しげなり、浮舟、君は眞に心地も悪しくなりにたれど、乳母の、

(乳) いと傍痛し、中、君の、事も有り貌に思すらむを、唯何ともなく、大様にて見え奉り給へ、右近などには、事の顛末、最初より乳母語り候はむ、

と強めて勧誘し立て、中、君の御障子の下にて、

(乳) 右近、君に物申さむ、

と言へば、右近起ちて出でたれば、乳母は、

(乳) 我が姫君には、いと奇怪しく候ひつる事の餘波に、御身も發熱くなり給ひて、眞實に困しげに見えさせ給ふを、氣の毒に見奉れば、御前にて慰め申させ給へ、とてぞ參らせ候ふ、實事もなく、過失もおはせぬ御身を、姫君にはいと愼ましげに思し詫びにたるめるも、さすがにこそ氣の毒に候へ、少許にても、男女間を知り給へる人こそ、實事なき以上は耻かしくも爲給はざれ、姫君はまた全く然る事も知り給はねば、實事はおはせざりしがど、かく耻ぢ給ふも道理に、いと氣の毒に見奉る、

浮舟君面
中君

とて、泣き伏し居たる浮舟君を引き起して、中君の方へ參らせ奉る、浮舟君は、我にもあらず、人の思ふらむことも耻かしけれど、いと柔和に大様過ぎ給へる人にて、乳母どもに、強ひて押出されて居給へり、額髪などの、甚く汗に濡れたるを持て隠して、火の方に背面き給へる様、中君をば比類なく見奉るにも、氣劣るとも見えず貴に美し、宮のこれに思し着きなば、心外しげなる事はありなむかし、いと此の女君ほどにもあらぬ女をさへ、新珍しき女と見給へば、直に愉快く爲給ふ宮の御心を、と、右近と少將との、二人ばかりぞ、浮舟君は、中君の御前にても、え耻ぢ合ひ給はねば、この二人は見居たりける、かくて中君は物語いと懐かしく爲給ひて、

(中) 此所をば、例ならず慎ましき所など、な思ひ成し給ひそ、

故大君のおはせずなりにし後、我には大君をば忘らるゝ世なく、いみじく此身も恨めしく、比類なき心地して過ぐすに、いと能く大君に思ひ擬へられ給ふ其方の御様を見れば、慰む心地して哀にぞある、今は誰も我を思ふ人もなき身に、大君の我を思ひし御志のやうに、其方も我をば相思ひ給はゞ、いと嬉しくぞある、

など語らひ給へど、浮舟君は、いと物慎ましくて、また鄙びたる心に、返答へ申さむ詞もなくて、

(浮) 年頃いと遙にばかり、思ひ申させしに、かく直接見奉り候ふは、何事も慰む心地し候ふてぞ、

とばかり、いと若びたる聲にて言ふ、中君は繪巻物など取出させて、右近に詞書讀ませて見給ふに、浮舟君は對座ひて物耻も

え爲あへ給はず、中君は心に入れて見給へる浮舟君の火影、更に此所ぞと難見ゆる所なく、細に美しげなり、額つき目つきの、薰りたる心地して、いと大様なる貴さは、唯大君とばかり思ひ出でらるれば、中君は、繪の方は別段に目も留め給はで、心にいと可憐なる妹君の容貌かな、いかでかくも大君に似てありけるにかあらむ、されば故宮にもいと似奉りたるなるめり、故大君は故宮の御方様に、我は母上に似奉りたるこそは、古女房ども言ふなりしか、實に大君に似たる妹君は、いみじきものなりけり、と、思し比ぶるに、涙催みて見給ふ、さて故大君は、限なく貴に、氣高きものながら、懐かしく柔和に、片輪なるまで、裊和々々と、柔弱みたる様し給ひしにこそあれ、この妹君は、まだ體度の初々しげに、萬の事を愼ましくばかり思ひけるにやあ

らむ、見所多かる艶めかしさぞ、大君には劣りたる、これに由緒々々しく物馴れたる氣容さへ、持て付けたらば、彼の大将の見給はむにも、更に片輪なるまじ、など、中君は姉心に、妹君をば、思ひ扱はれ給ふ、物語など爲給ひて、曉方になりてぞ寢給ふ、中君は、妹君をば傍に臥せさせ給ひて、故宮の御事ども、年頃此世におはせし御有様など、正面ならねど、少しづつ、語り給ふ、浮舟君は父宮を、いとゆかしくて、終に見奉らずなりにけるを、いと口惜しく、悲しと思ひたり、昨夜の心知りの女房右近、少將などは、

(少) 女君には、如何なりつらむな、いと可愛げなる様を、北の御上には、いみじく愛憐に思すとも、早や宮の御手懸り給へば、かひあるべきかは、いと御氣の毒よ、

逢ひても逢
はぬ○細流
抄に臥すほ
どもなくて
明けぬる夏
の夜は逢ひ
ても逢はぬ
心地こそす
れとあり本
文には逢ひ
ても逢はぬ
までの意を
取りたるな
り
浮舟君乳母
告句宮事
於母君一

と、少將言へば、右近は、

(右) 否、さやうにも實事はあらず、彼の乳母の、我を引き居
ゑて、不覺に語り愁へし様子は、實事ありしことは、全く持
て離れてぞ言ひし、宮も出て給ふ折に、逢ひても逢はぬやう
なる心ばえにこそ打嘯き口吟び給ひしか、いざやそれとも、宮
の實は逢ひても、故意に逢はぬやうに打誦し給ひしにもやあ
らむ、それは知らずかし、それにつけても、女君の、昨夜の
火影の、いと大様なりしも、實事あり貌には見え給はざりし
よ、

など打私語きて、浮舟君の事を、氣の毒がる、乳母は車取りに、
前司の館へ往ぬ、かくて母北方に、かくくと言へば、母君胸
潰れ騒ぎて、

(母) 伺候ふ女房も、怪しからぬ様に言ひ思ふらむ、中君本人
も如何思すべき、かゝる色筋の物憎みは、上臈も下臈も差別
なきものなり、

と、己が嫉妬深き心習慣に、惚忙しく思ひ成りて、母北方は、
夕方二條院へ参りぬ、匂宮には、また内裡より退出で給はねば、
母君心安くて、中君に、

(母) 怪しく心幼稚なる女君を参らせ置きて、後安くは頼み
申させながら、馳の爲候はむやうなる疑心のし候ふに、此方
へ参り候へば、我家の方よりは、善からぬ前司どもに、憎み
恨みられ候ふ、

と申す、中君は、

(中) 彼の妹君は、いとさやうに言ふ程の心幼稚げさにはあら

母君参二
條院一

ざるめるを、心配げに氣色ばみたる御疑念こそ、面倒しけれ、
 とて笑ひ給へるが、心耻かしげなる中、君の御目つきを見るも、
 母北方は、何となく心の闇鬼に耻かしくぞ覺ゆる、されば女君
 の昨夕の事、中、君の如何に思すらむと思へば、えも打出で申さ
 ず、

(母) 女君を此方に預け參らせし事、年來の祈願の満つ心地し
 て、世人の漏り聞き候はむも見善く、面起しき事にぞ思ひ候
 ふを、かくてばかり長く頼み置き奉るも、さすがに慎ましき
 事にぞ候ふを、本意の如く、深き山寺に住ませ候はむこと、
 女君の爲、操にぞ候ふべきものを、
 とて、打泣くも、いと、氣の毒にて、中、君は、

(中) 此許には、妹君の事につけ、何事か心配く思し給ふべき

とてもかくても疎々しく思ひ放ち申さばこそ、後めたくもあ
 らめ、怪しからずだちて、善からぬ宮の、時々此方に渡り給
 ふめれど、その仇々しき御心を、皆人見知りたるめれば、妹
 君の爲にも、その心遣して、便なくは待遇さじ、と思ふを、如
 何に推量りて言ふにかあらむ、

と言ふ、母、北方は、

(母) 懇篤き御心をば、更に隔てありても、思ひ申させ候はず、
 この女君を故宮の御子としも御許容なかりし筋は、今更何に
 か、懸けても申させ候はむ、其の方ならでも故北方と某とは、
 叔母姪の間にも候へば、君には思し放つまじき綱も候ふをぞ、
 捉へ所に依頼み申さする、
 など一通ならず申して、

母君移浮舟君於三條小家

(又) 明日、明後日の兩日は、嚴重き物忌に候ふを、女君をば
 靜なる所にて物忌み過ぐして、またも更に此方に參らせむ、
 と申して、母北方は、浮舟君をば誘出ふ、中君は、心に、いと
 氣の毒に、本意なき業かな、と思せど、え留め給はず、母北方
 は、昨夕の匂宮の御所爲を、淺ましく片輪なる事に、驚き騒ぎ
 たれば、專物も申さで、立ち出でぬ、さて母北方は、女君のか
 やうの方違所にと思ひて、小き家設けたりけり、それは三條邊
 に、洒落ばみたる家の、また造作りかけたる所なれば、整頓し
 き修飾もせずしてぞありける、さて母君は、
 (母) あはれ君の御身一つを、萬事に持て惱み申すことかな、
 それにつけても、心に叶はぬ世の中には、決して有り經まじ
 きものにこそありけれ、自分ばかりは、唯一向に種姓々々し

からず、人げなく、唯然る方に這ひ籠りても過ぐしつべし、
 但君の御身は、御因縁心憂しと思ひ申し、中君の邊を、睦
 び申すに、便なき事も出で來なば人笑なるべし、たとひ味氣
 なく、異様なりとも、この三條の小家を、君には人にも知ら
 せず、忍びておはせよ、その内には、自然ともかくも奉仕り
 てむ、

と言ひ置きて、母君は歸りなむとす、浮舟君は打泣きて心に、
 我は世にあらむことも、所狭げなる身よ、と、思ひ屈し給へる様
 いと哀なり、母君は況して、可惜しく氣の毒なれば、この女君
 をば、是非とも恙なくて、我が思ふ如くに見成さむと思ひて、一
 旦二條院に預け申したるを、然る宮の傍痛き事につけて、人に
 も憎々しく思はれ言はれむが、心安からねば、母君は女君をば、

かく三條の家に移居すなりけり、この母北方は、心なくなどは
 あらぬ人なれど、生腹立ちやすく、少し我がまゝにぞありける、
 さてこの女君をば、彼の前司の館にも、隠しては居るてもあり
 ぬべけれど、然隠したらむを、數ならであらむは氣の毒と思ひ
 て、かく扱ふに、母君は年來傍去らず、明暮見馴れたれば、今
 更別所に分れ居らむは、互に心細く、わりなしと思へり、母君
 は浮舟君に、

(母) 此家はまた半作にて、かく荒ばれて、怪しげなる所なる
 めり、されば然る用心し給へ、曹子々に住みて居るものど
 も、召し出で、使ひ給へ、宿直人の事などは、言ひ掟て候ふ
 も、尙心配けれど、彼方にも、前司に腹立ち恨みらるゝが、い
 と困しければ、爲む方なく歸らむ、

母君竊見ニ
 婿君左近少
 將一

と打泣きて歸る、

前司は、婿君少將の扱ひを、二なきものに思ひ用意きて、北方
 の夫妻一心になりて、様善くも營ますと怨ずるなりけり、北方
 はいと心憂く、原因といへばこの少將により、かゝる種々の辛
 苦しき紛れどももあるぞかし、と、二なく大事と思ふ女君のかや
 うにあれば、辛く心憂くて、婿君少將の事をば、専見入れず、且
 彼の匂宮の御前にて、少將のいと人げなく見えしに、多くは思
 ひ貶してければ、我女浮舟君の婿君として、私物に思ひ傳かま
 し、など思ひしことは止みにたり、これにつけても此家にては、
 彼の少將はいかゞ見ゆると、まだ少將の打解けたる様は見ぬに、
 と思ひて、母北方は、少將の長閑に居る晝方、此方に渡りて、物
 の隙より覗く、少將は白き綾の懐かしげなるに、今様色の打目

今様色○薄
 紅梅の色濃

きなり

女○此は母
北方と前司
との間に
出たる中女
にて少將の
妻なり前司
の姫君と稱
へて傳きし
は即是なり

なども清らなるを着て、端の方に前裁見るとて居たるは、前日に見たるよりは劣りてもあらず、いと清げなるめるは、と見ゆ、女もまた半成に、何心もなき様にて、少將に添ひ伏したり、中、君の匂宮に相雙びておはせし御様どもを、思ひ出づれば、此方の新夫婦は、口惜しの様どもよ、と見ゆ、前なる女房達に、少將の物など言ひ戯れて、打解けたるは、前日に見しやうに、艶容なく、人悪げにも見えぬを、彼の匂宮にて見し少將は、別少將なりけり、と、今ふと思ふ折に言ふことよ、さて少將は、
(少) 匂兵部卿宮の御前の萩の、此所の萩に比ぶれば、尙別段に面白くもありけるかな、いかで彼のやうなる種はありけむ、同じ枝ぶりなどの、いと艶なるこそ、一日参りて、恰も宮の出で給ふ間なりしかば、え折らずなりにき、その折、宮の、こ

ことだに惜
しき○細流
抄にうづろ
はむことだ
に惜しき秋
萩に折れる
ばかりも置
ける露かな
とあり

まめ結ひし
云々○其方
は一旦淨舟
君に契約せ
しものを忽
に違約して
妹君に移る
は如何なる

とだに惜しき、と、打誦し給へりしを、若き女房達に見せたら
ましかば、いかに愛甚く思ふならむ、
とて自分も歌詠み居たり、母北方は心に、いでや少將の心ばせ
の程を思へば、利慾にばかり赴きて、善き人とも覺えず、出榮
なきは此上なかりけるに、今詠み居たるは、何歌を言ひ居たる
ぞ、確乎しき言はえあらじ、と、貶し呟かるれど、少將のいと心
なげなる様は、さすがに爲たらねば、如何言ふかと、母北方は試
に、
(母歌) あめ結ひし、こ萩がうへも、迷はぬに、いかなる露に、
うつる下葉ぞ、
と言ひ遣るに、少將は吾が契約に違ひしこと、いと氣の毒に覺
えて、

事ぞとなり
宮城野の云々
○浮舟君を故八宮の御子と知りたらば妹君には思ひ移るまじきをとなりこ萩はもと木萩なるを手にかけて宮の子と言ひ成せるにて前歌のこ萩も同じ意なり

(少歌) 宮城野の、こ萩がもと、知らませば、露も心を、分
かすぞあらまし、いかで自分から、申し辨明めむ、
と返歌し言ひたり、母北方は、少將の、浮舟、君をば、故宮の御
子と聞きたるなるめり、と思ふに、この女君をば、いかで中、君
など、同等しくとばかり、益々思ひ扱かはる、敢なく薫、大將の
御様容貌ぞ、戀しく面影に見ゆる、匂宮は大將と同じく愛甚し
と見奉りしがど、彼の宮は女君には思ひ離れ給ひて、心も留ま
らず、輕蔑をして、押入り給へりけるを思ふも殘念し、この大
將は、さすがに尋ね思す心ばえのありながら、卒爾にも言ひ懸
け給はず、無情貌なるもこそいたはしけれ、大將の御事萬事に
つけて、かく思ひ出でらるれば、女君は況してかくや思ひ出で
申し給ふらむ、大將には懸けても及ばぬ、彼の憎き少將を、我

が婿にせむ、と、思ひけむこそ、見苦しきことなるべけれ、など、
唯女君の事ばかり、心に懸りて、詠歎ばかりせられて、右して
や善からむ、左くしてや善からむ、と、萬事に善からむ豫願事を、
思ひ續くるに、大將にと思ふ企願は、いと難し、我が心には、こ
の女君は随分世に勝れもし、殊に故宮の御胤なれば、と思へど、
彼の大將の、貴き御身の程、御持て成しなどによりて、考ふれ
ば、大將の見奉り給へらむ女二宮は、この女君よりは少し普通
ならず勝れたらむ、されば大將には、この女君、どれ程にてか
は心を留め給はむ、世の人の有様を見聞くに、凡て女の優劣は、
その父親の賤しきと、貴なるとの、種姓に従ひて、容貌も心も、
優劣あるべきものなりけり、吾が子どもを見るに、前司の胤な
るは、この女君に似るべきやはある、この前司の内には、少將

をば二人なきものに思へども、匂宮に見比べ奉りしかば、いと
も口惜しかりしによりてぞ、種姓に従ひて優劣あることは推量
らるゝ、されば當代の御傳き女の、女二宮を得奉り給へらむ大
將の御目移には、女君は、いとものく、耻かしく、愼ましかるべ
きものかな、と思ふも、不覺に心地も飽離れにけり、女君の三
條の旅宿は、徒然にて、庭の草も鬱陶き心地するに、賤しき東
音したる者どもばかり出て入り、慰めに見るべき前栽の花もな
し、打荒ばれて、氣も晴れくしからで、明かし暮らすに、浮
舟、君は、中、君の御有様思ひ出るに、若き心地に戀しかりけり、
また生憎だち給へりし匂宮の御氣容も、さすがに思ひ出でられ
て、彼の時に、宮には何事にかありけむ、いと多く愛憐げに言
ひしかな、名殘美しかりし御移香も、また残りたる心地して、恐

母君消息
浮舟君

怖しかりしことも思ひ出でらる、母北方よりは、女君のいかに
獨寂しくおはさむ、とて、いと哀げなる文を書きて寄來せ給ふ、
浮舟、君は、母君のかく一通ならず、氣の毒に思ひ扱ひ給ふめる
に、我はとにもかくにも不幸のものにて、母君の懇切なるかひ
もなく、持て扱はれ奉ることよ、と、打泣かれて、その文を披き
見れば、

(母文) 其方には、いかに徒然に見習はぬ心地し給ふらむ、暫
時堪忍び過ぐし給へ、

とある返事には、浮舟、君、

(浮返) 徒然は何か歎かむ、却て心安くてぞ候ふ、ひたふる
に、嬉しからまし、世の中に、あらぬ所と、思はましかば、
と、幼稚げに言ひたるを、母北方は、見るまゝに、ほろくくと

ひたふるに
云々○此所
も浮世の外
と思へば嬉
しきに尙一
向に此世を

離れたらば
また尙嬉し
からましと
なり

涙落して、打泣きつゝ、心に、我が最愛の女君を、我ながら、かくも惑はし流離るゝやうに待遇すことよ、とて、いみじく悲しければ、

(母歌) 浮世には、あらぬ所を、求めても、君が盛りを、見るよしもがな、

と、平凡しき歌ども言ひ交してぞ、心を舒へける、

薫、大將は、例の秋深く成り行く頃、これまで思ひ慣にし事なれば、寢覺々々に、故大君の事、物忘れせず、哀にばかり覺え給ひければ、宇治の御堂造り終つと聞き給ふに、自分からおはしましたり、久しく見給はざりつるに、山の紅葉も珍らしく覺ゆ、毀ちし寢殿の跡へ、此度はいと晴れ々しく、新しく寢殿を作り成したり、昔故八宮の、いと事省きて、聖たち給へりし住居

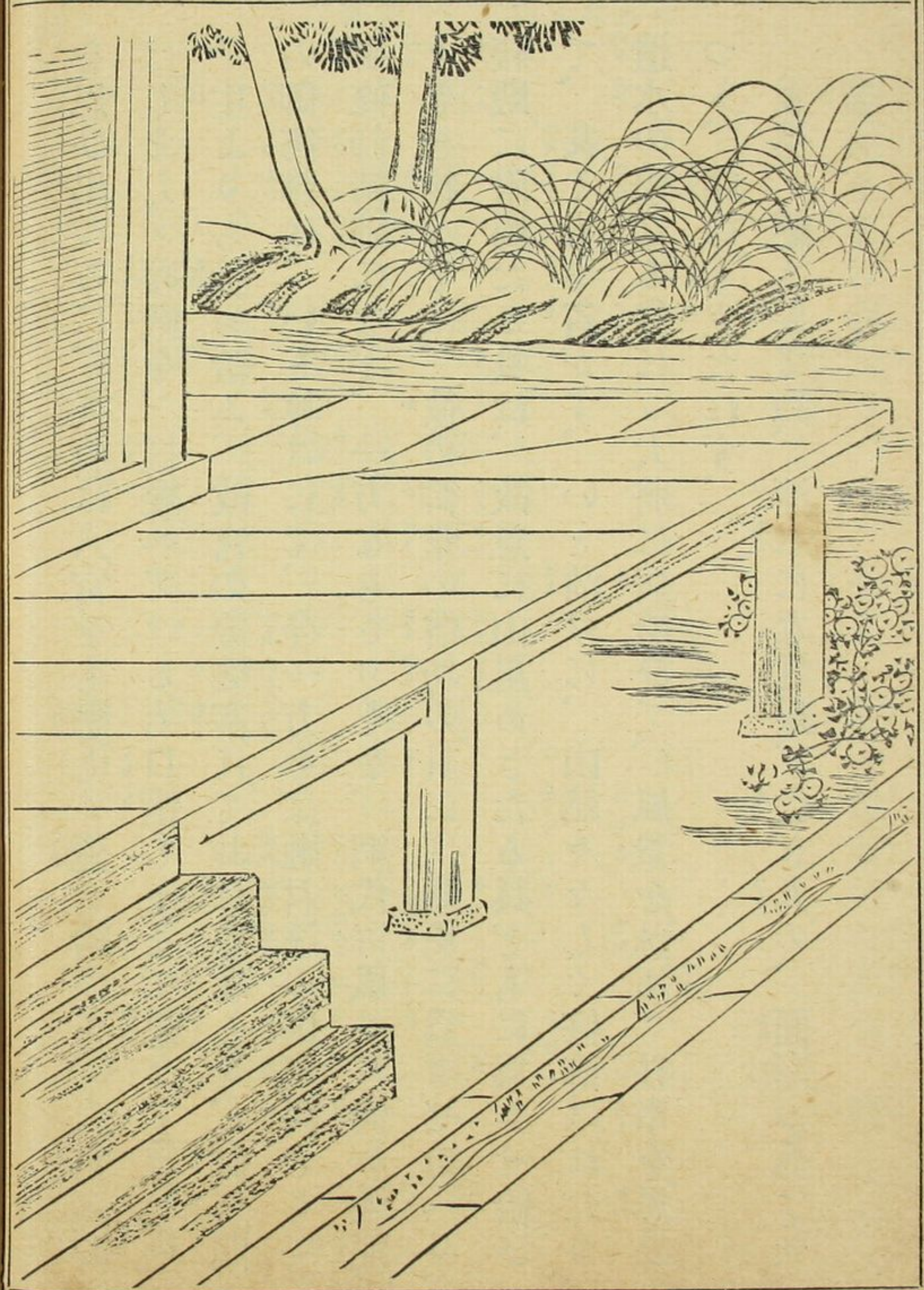
憂き世には
云々○浮世
の外なる静
なる所を求
めて其方の
榮華を見た
しとなり
薫大將又
訪宇治故
宮

絶え果てぬ
云々○昔に
變らぬ清水
に何とて故

を思ひ出づるに、大將は八宮をも戀しく覺え給ひて、八宮のおはしまし、寢殿を、様變へてげるも口惜しきまで思さるれば、平生よりも詠め給ふ、故宮の優婆塞にておはしまし、御居間の御修飾は、いと尊げにて、今一方をば姫君達の御居間として、御修飾精細になど、一方ならざりしを、網代屏風や、何かの荒々しき物などは、彼の御堂の僧坊の具に、事更に爲させ給へり、寢殿に附屬たる具は、故意に山里めきたる具どもに爲させ給ひて、甚くも事省がず、いと清げに、由緒々々しく修飾はれたり、遣水の邊なる岩に、大將は居給ひて、風景を詠め、往事を思ひつゝ、頓にも立たれず、
(薫歌) 絶え果てぬ、清水になどか、亡き人の、面影をだに、留めざりけむ、

薰大將訪辨
尼圖

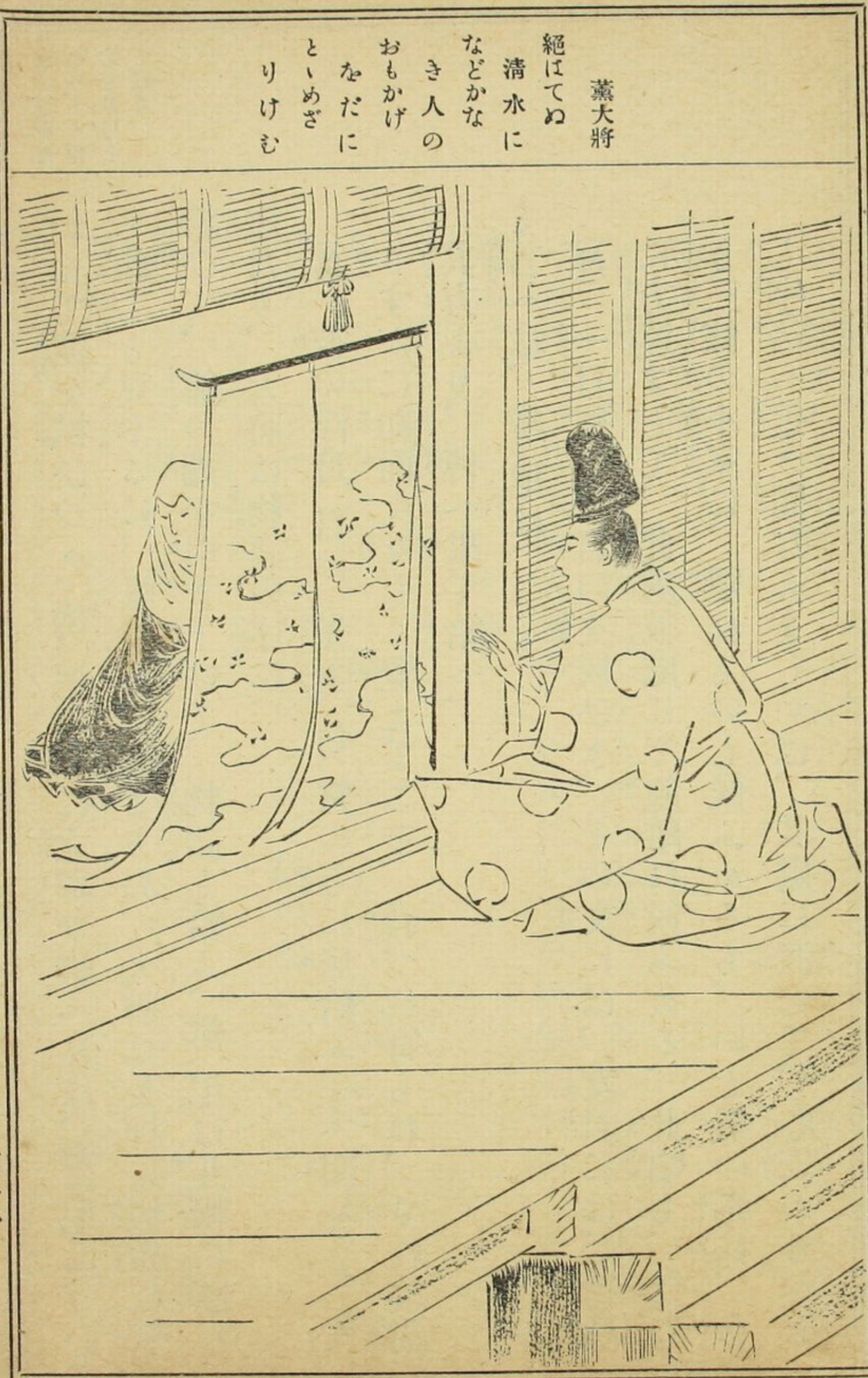
○東屋



三百十

薰大將
絶はてぬ
清水に
などかな
き人の
おもかけ
をだに
といめざ
りけむ

○東屋



三百十一

宮の面影を
なりとも留
めざりけむ
となり

かくて涙を拭ひつゝ、辨、尼の方に立寄り給へれば、辨、尼は、いと悲しと見奉るに、唯潜みに潜まりぬ、大將は長押に假始に居給ひて、簾の端を引き上げて、物語し給ふ、辨、尼は几帳に隠れ居たり、大將は物語の序に、

(薰) 彼の浮舟、君は、先頃、匂、宮の方に居給ふ、と、聞きしを、さすがに初面々々しく覚えてこそ、音づれ寄らね、されば尙其方より、傳へ果て給へ、

と言へば、辨、尼は、

(辨) 一日彼の母君の文候ひき、その文には、女君には、物忌に方違すとて、此處彼處にぞ飽離れ候ふめる、此頃も、怪しき三條の小家に、隠れものし候ふめるも、いと氣の毒に、少し宇治へ近き間ならましかば、其處に渡して、心安かるべき

を、荒ましき山路に、容易くもえ思ひ立たで候ふ、と候ひし、

と申す、大將は、

(薰) 人々のかく恐怖しくするめる山路に、我こそ舊り難く分け來れ、これも故大君の、いかばかりの宿契にかあらむ、と思ふは、いと哀にぞある、

とて、例の涙催み給へり、

(又) さらばその心安からむ三條の家に、其方より消息し給へ、其方は、自分からは京には、出で給はぬか、

と言へば、辨、尼は、

(辨) 仰言を彼方に傳へ候はむことは易し、されど今更に京を見候はむことは、物憂くて、中、君のおはします二條、院にさへ

薰大将勸
辨尼出京

愛宕の聖僧
○空也上人
愛宕山の月
輪寺に多年
練行して後
に洛中を念
佛し歩きの
又棟本僧正
眞濟も愛宕
山高尾峯に
十二年間籠
りて嵯峨帝
に召出され
たり
人濟度す○
孟津抄に人
わたす事だ
になきをな

もえ参らぬを、

と申す、大将は、

(薰) 何とてか京には出てざる、ともかくも人の聞き傳へばこそ、慎ましくもあらめ、愛宕の聖僧さへ、時に従ひては、京に出でざることはあらざりけるを、其方は深き誓願を破りて、
我の企願を満て給はむこそ、尊からめ、

と言へば、辨尼は、

(辨) 某は人濟度すことも候ふに、聞き悪き事もこそ出で來れ、と、迷惑げに思ひたれど、大将は、

(薰) 尙善き折なるを、

と例ならず強ひて

(又) 明後日ほとに車奉らむに、それに乘して、是非京に出で

にしかも長
柄の橋と身
のふりにけ
むとあり

伊賀専女○
専女は老女
の名にてま
た狐のこと
にもいへり
此所は婦人
の善き言ひ
ひて人を謀

て、その三條の旅宿の所を、尋ね置き給へ、努愚痴がましく
僻事すまじくを、

と、含笑みて言へば、辨尼は心に、面倒しく、如何に思ふこと
ならむ、と思へど、大将は奥もなく、憎々しからぬ御心様なれ
ば、自然我が御爲にも、外聞などは包み給らむ、と思ひて、

(辨) 然らば承知りぬ、彼の三條の旅宿は、君が御邸に近き間
にこそ候へ、彼方へ御文などを見せさせ給へかし、辨が故意
賢らめきて、心知りのやうに、先方に思はれ候はむも、今更
に伊賀専女にや候はむ、されば慎ましくてぞ候ふ、
と申す、大将は、

(薰) 文を遣るは、容易かるべきことなれど、人の物言ひいと
うたてあるものなれば、右大将は、常陸前司の女をぞ聘ふな

るを狐によ
そへていへ
るにて辨尼
の世の媒人
めきて慎ま
しといふな
り

る、なども、執り成してむものをよ、それにその前司の主、いと荒々しげなるめり、
と言へば、辨尼は打笑ひて、いと御氣の毒と思ふ、黄昏くなれば、大將は歸り給ふ、下草の面白き花ども、または紅葉など折らせ給ひて、女二宮に御覽せさせ給ふ、この女二宮かひなからずおはしぬべけれど、また畏り置きたる様にて、甚くも馴れ申し給はずぞあるめる、この女二宮の事につけては、今上よりも、平人の親めきて、姑君入道宮女三にも申し給へば、大將には、この女二宮を、尊き方には、限なく思ひ申し給へるなり、それに此方彼方よりも、重く傅き申し給ふ女二宮の待遇に添へて、大將は、難澁しき私の女君の方の心添ひたるも、苦しかりけり、辨尼に契約り言ひし日の早朝、睦しく思す下藤の侍一人、顔知

らぬ牛飼作り出で遣す、また御庄の者どもの、田舎びたるを召出で、

(薰) 此車を警固せよ、

と言ふ、それにまた辨尼には、必出京べく言へりければ、辨尼は、いと慎ましく迷惑しけれど、打化粧じ修ひて、その車に乗りぬ、かく辨尼は、車中より、野山の風景を見るにつけても、昔よりの古歌ども思ひ出でられて、詠め暮らしてぞ、京には來着きける、さて三條の家は、いと徒然に、人目も見えぬ所なれば、車をば心安く引き入れて、

(辨) かくぞ參り來つる、

と案内の男して、言はせられたれば、浮舟君の、初瀬詣の供にありし、若女房出で來て、辨尼をば車より降す、さて浮舟君は、怪

辨尼至三
條家見三
舟君

薰大将謀至三條家

しき所を詠め暮らし明かすに、昔語りも爲つべき辨尼の來たれば、嬉しくて、呼び入れ給ひて、父親と申しける故宮の御邊の人と思ふに、睦ましく懐かしきなるべし、辨尼は、
 (辨) 哀に人知れず見奉りし後よりは、思出で申さぬ折なけれど、世の中をば、かやうにはかり思ひ捨て候ひにし身にて、彼の二條院なる、中、君の御方にさへ参り候はぬを、彼の薰、大将殿の、避り難く怪しきまで言はせしかば、據なく思ひ起し候ふてぞ、かくは参り候ふ、
 と申す、浮舟、君も、乳母も、曩に愛甚し、と、見置き申してし大将の御様なれば、その大将の忘れぬ様に言ふらむも可憐なれど、俄にかく思し謀らむとは思ひも寄らず、かくて宵打過ぐる間に、宇治より人参れりとして、門忍びやかに打叩く、辨尼は、大

方大将にやあらむ、と思へば、自分から門開けさせたれば、車をぞ引き入るなる、乳母は怪しと思ふに、大将は、辨の尼君に對面賜はらむ、とて、彼の宇治の近き御庄の、預人の名告を爲させ給へれば、辨尼は、戸口に膝行り出でたり、雨少し打灑ぐに、風はいと冷やかに吹き入りて、言ひ知らず薰り來れば、大将なりけり、と、誰もく、心動悸しつべく、御氣容美しければ、浮舟、君の方の女房達は、用意もなく怪しきに、また思ひも合へぬ間なれば、心騒ぎて、如何なる事にかあらむ、と、言ひ合へり、
 大将は、
 (薰) 心安き所にて、月頃の思ひ餘る事も、申させむとてぞ参り候ふ、
 と辨尼して言はせ給へり、浮舟、君はいかに御返答申すべき事

にかあらむ、と、困却しげに思ひて居給へれば、乳母は見苦しがりて、

(乳母) 大將殿の、かやうにおはしましたらむを、立ちながらは、いかで返し奉り給はむ、彼の常陸殿なる母君の方にこそ、かくぞある、と、忍びて申さめ、彼の殿の此家より近き間なれば、

といふ、辨、尼は制して、

(辨) 初々しく、何とてかさやうに、急に母君へは知らせ申さむ、若き御同志の、物申し給はむは、ふとしも速く染みつべくもあらぬを、況して彼の大將は、怪しきまで、心長閑に、物深くおはする君なれば、よもや母君の許容なくては、さやうに急には打解け給はじ、

など云ふ間に、雨稍降り來れば、空はいと闇し、宿直人の怪しき聲したるが、夜行して、

(宿) 家の巽の角の、築地の崩れ、いと危し、この客人の御車、門内へ入るべくば、引き入れて、御門鎖してよ、かゝる客人の供人こそ、心はうたてあれ、

など、言ひ合へるも、大將は氣味悪く、聞き慣れぬ心地し給ふ、さて大將は、

(薫) 狹野の渡に、家もあらなくに、

など、口吟みて、里びたる簀子の端つ方に居給へり、

(薫歌) 鎖し閉づる、葎やいかに、東屋の、あまり程ふる、雨そゝぎかな、

狹野の渡○
萬葉集に困
しくも降り
くる雨か三
輪が埼さの
の渡りに家
もあらなく
にとあり
鎖し閉つる
云々○此戸

と打拂ひ給へる、袖の追風いと片輪なるまで打薫りて、東の里

はなとか開
けぬ久しく
待たするは
中に隔つる
人もあるか
とて催馬樂
の東屋のま
やの餘りの
雨そいぎ我
立ち濡れぬ
この戸開か
せとあるを
引けるなり
程ふるは經
るに降るを
かけたり此
歌やがて帖
の名となる
飛驒の番匠
○孟津抄に
とにかくに
物は思はず
飛驒工うつ
墨繩のただ

人も驚きぬべし、浮舟、君には、右様左様にしても、申し遁れむ
方なければ、乳母は南の廂に御座引き修ひて、大將をば入れ奉
る、かくて浮舟、君には、心安くも大將に對面し給はぬを、此女
房彼女房 浮舟、君をば、大將の方に押出したり、さてこの中間
に、遣戸といふもの鎖して、少許開けたれば、大將は、
（薰）飛驒の番匠も、恨めしき隔てかな、かゝる物の外には、ま
だ居習はず、
と愁へ給ひて、如何し給ひけむ、その内に入り給ひぬ、かくて
大將は、浮舟、君に、彼の大君の人形の願も言はで、唯一日宇治
にて、覺えず物の狭間より見しより、不覺に戀しき事、これも
然るべき前世の宿契にやあらむ、怪しきまでぞ思ひ申すとそ語
らひ給ふべき、浮舟、君の様、いと可愛げに大様たれば、見劣りも

一筋にとあ
り
薰大將始達
浮舟君

せず、いと愛憐と思しけり、秋の夜なれど、間もなく明けぬる
心地するに、鶏などは鳴かて、大路近き所に、行商人の、大ど
れたる聲して、如何にか言ふらむ、大將には、聞きも知らぬ物
賣りの名告をして、打群れて行くなど聞ゆる、大將は曾てかや
うの朝ぼらけに見たるに、頭に物戴きたる者の、鬼のやうなる
ものなりしが、今名告して行くものどもは、さやうの恐しき者
どもなるべし、と、聞き給ふも、かゝる蓬生の轉寢に習ひ給はぬ
心地に、面白くもありけり、宿直人も門開けて出る音す、夜行
せしものどもも、各々内に入りて臥しなどするを、大將は聞き
給ひて、人召して、車を妻戸に寄せさせ給ふ、かくて大將は、浮
舟、君を搔き抱きて、その車に載せつ、かゝれば誰もく、怪し
く、敢なきことを思ひ騒ぎて、乳母どもは、

忌む月○九月は嫁娶その他沐浴にも忌む月なる事前に見えたり

(乳) 今は九月にもありけるを、此月は忌む月なるに、心憂の業や、如何に爲つる事ぞ、

と歎けば、辨尼も、いと氣の毒に、案外なる事どもなれど、

(辨) 大將殿の、自然思す様あらむ、心配くな思ひ給ひそ、九月は、明日よりこそ、節分に入ると聞きしか、

と言ひ慰む。まこと今日は十三日なりけり、辨尼は大將に、

(辨) 今回は御供にはえ参らじ、それは宮の上君の、辨の此所

まで参りしことを、自然聞召さむこともあるに、忍びて行き

歸り候はむも、いとうたてあるべくぞ候ふ、

と申せど、大將は心に、此事早く中君に聞かせ奉らむも、心耻

かしく覺え給ひて、

(薰) それは後にも、中君に罪避り申し給ひてむ、今往くべき方

に、其方の案内なくては、便なき所なるを、

と迫めて言ふ、

(又) 女君の御供に、誰か一人候ふべきや、

と言へば、この浮舟君に添ひたる侍従と辨尼と陪乗ぬ、乳母や

辨尼の供なりし女童などは、跡に後れて、いと怪しき心地して

居たり、人々、大將には女君をば、近き間の所に入れ給ふにや

あらむ、と思へば、遠く宇治へおはするなりけり、されば大將

には、車の牛など、牽き交替べき用意し給へり、河原を過ぎ、法

性寺の邊おはしますに、夜は明け果てぬ、若女房侍従は、大將

をば、いと微に見奉りて、愛で申して、不覺に戀ひ奉るに、世

の中の愼ましさも覺えず、浮舟君ぞ、いと淺ましきに、物も覺

えずして、俯伏したるを、大將は、

薰大將率
浮舟君至
宇治

法性寺○貞
信公の建立
にて九條河
原の邊にあ

(薰) 礫高き邊は、事觸れ立ちて、困しきものを、
 とて、女君を抱き給へり、羅の細長を、車の中に引き隔てたれ
 ば、花やかに差し出たる朝日影に、辨、尼はいと不都合く覺ゆる
 につけて、心に、故大君の御供にこそ、かやうにしても、大將
 殿を見奉りつべかりしか、生きて此世に有り經れば、思ひ懸け
 ぬことをも見る事かな、と思ひつゝ、悲しく覺えて、包むと
 すれど、打撃みつゝ泣くを、侍従はいと憎く、婚禮の初に、辨、
 尼の、かく出家姿にて、女君に副乗ひたるをさへ、忌々しく思
 ふに、何ぞかく可厭目に泣き貌なる、と、憎く愚痴にも思ふ、さ
 て侍従は、辨、尼の故大君の事を、思ひ出せし心を知らねば、老
 いたるものは、かく不覺に、涙脆にあるものぞ、と、疎略に、打
 思ふなりけり、大將も、目の前に見る浮舟、君は、憎からねど、

形見ぞと云
 々○浮舟君
 を大君の形
 見と見るに
 つけて袖を
 ぬらすとな
 り

空の景色につけても、故大君の昔の戀しき勝りて、山深く入る
 まゝに、涙も霧り渡る心地し給ふ、打詠めて、物に倚り居給へ
 るに、御袖の重りながら、長やかに車の簾より出でたるが、川
 霧に濡れて、御衣の紅なるに、御直衣の色、花のやうに、仰
 山しく映りたるを、下り坂の、高き所にて、見つけて、車内へ
 引き入れ給ふ、
 (薰歌) 形見ぞと、見るにつけても、朝露の、所狭きまで、濡
 る、袖かな、
 と、大將は心にもあらず、獨言ち給ふを、辨、尼は聞きて、いと
 絞るほど袖も泣き濡らすを、侍従は心に、怪しく、見苦しき
 世かな、と思ひて、愉快く心適く道に、いと難澁しき事添ひた
 る心地す、辨、尼の、忍び難げなる、鼻噉りを、大將は聞き給ひ

虚しき空に
云々○新古
今集に吾か
戀はむなし

て、自分も忍びやかに、鼻打かみ給ひて、さはいへ浮舟君の、
さすがに如何思ふらむと、氣の毒なれば、大將は浮舟君に、
〔燻〕數多の年頃、この道を、往き復ふ度重なるを思ふに、何
處となく、物哀なるかな、其方も、少し起き上りて、この山
の色も見給へよ、いと埋屈れたりや、
とて、俯伏したるを、強ひて起し給へば、浮舟君は、面白き程
に扇差隠して、慎ましげに見出したる目つきなどは、いと能く
大君に似て思ひ出でらるれど、大らかに、餘り大様過ぎたるぞ、
不心安かるめる、大將は心に、故大君は、いと甚く深窓娘たる
ものながら、用意の淺からずものし給ひしよや、と、尙大君の行
く方なき悲哀さは、虚しき空にも満ちぬへかるめり、かくて宇
治の宮におはし着きて、心に、あはれ大君の亡魂や宿りて見給

き空に満ち
ぬらし思ひ
遣れとも行
く方のなき
とあり

ふらむ、誰によりて、かく不覺に惑ひ歩くものにもあらなくに、
これも全く大君故にこそあれ、と、大將は思ひ續け給ひて、車よ
り降りては、浮舟君も、少し打休息み給ふべき心知らひして、
暫時立ち避け給へり、さて浮舟君は、母君の思ひ給はむ事など、
思ひ出で、は、いと歎かしけれど、大將の艶なる様に、心深く、
可憐に語らひ給ふに、思ひ慰めて降りぬ、辨、尼は事更に此方に
降りずして、廊にぞ車寄するを、大將は、この女君を、故意と
長く此所に置くべき住居とも思はぬを、辨、尼の遠慮り思ひて、
所避る用意こそ餘りなれ、と見給ふ、御庄より例の人々ぞ、騷
がしきまで参り集る、浮舟君の御膳は、忍びたれば辨、尼の方よ
り進る、道の間は木蔭ども繁かりつれど、この宮の新しき寢殿
の有様は、いと霽々し、河の景色も山の色も、持て難したる作

薰大將消
息京

り様を、浮舟、君は見出して、日頃の三條の小家の悒鬱さも、慰みぬる心地すれど、大將の如何に待遇し給はむとするにかあらむ、と、浮きて怪しく覺ゆ、さて大將は京への御文書き給ふ、
 (薰文) まだ整頓ぬ、山寺の佛體の御飾など、見置き候ふて、今日吉しき日なりければ、急ぎ此方に参り候ふて、生憎亂り心地の惱ましきに、恰も物忌なりける日を、思ひ出で候ふてぞ、今日明日此所にて謹慎み候ふべき、
 など、母宮入道宮にも、北方女二宮にも、申し給ふ、大將の打解けたる御有様、前より今少し美しくて、此方に入りおはしたるも、浮舟、君は耻かしけれど、持て隠るべくもあらで居給へり、大將は心に、女君の御装束など、彼の母君の、色々に善くと思ひて、爲重ねたれど、少し田舎びたることも打交りたるぞ、昔

の大君の、いと柔ばみたりし御姿の、貴に艶めかしかりし様ばかり思ひ出でられて、この女君の髮の末の、美しげさなどは、大君よりは細々と貴なり、女二宮の御髮の、いみじく愛甚きにも劣るまじかりけり、と、見給ふ、且はこの女君を、如何に待遇してあらせむとすらむ、只今物々しげにて、彼の二條宮に迎へむも、外聞便なかるべし、さりとして彼の宮にて、此女房彼女房ある中に入れて、多族に交らはせむは、本意なからむ、されば暫時此宮に、隠してあらせむと思ふも、毎日に見ずば物寂しかるべく、可憐に覺え給へば、女君に、一通ならず語らひ暮らし給ふ、故宮の御事も言ひ出で、昔物語を、面白く詳細に言ひ戯れ給へど、女君は、唯いと慎ましげにて、一向に耻ぢたるを、大將は物寂しく思す、過まりてもかく慎ましく心もとなきは、

いと善し、その慎ましく耻ちたるは、教へても持て直し見む、もしこの女君の、田舎びたる生洒落心持てつけて、種姓々々しからず、輕躁ならましかば、故大君の形代には、不用ならまし、と思ひ直し給ふ、此宮にありける琴、箏の琴、召し出で、この女君の、かゝる風流事もまた、況してえ爲じかし、と思ふに、口惜しければ、大將は、獨調べて、心に、故宮薨せ給ひて後、此宮にて、かゝる樂器に、久しく手觸れざりつかし、と、我ながら珍らしく覺えて、琴をば、いと懐かしく手探りつゝ、詠め給ふに、月差し出でぬ、大將は故宮の御琴の音の仰山しくはあらで、いと面白く、哀に彈き給ひしよや、と、思し出で、

(薰) 昔故宮も大君もおはせし世に、其方の此宮に生ひ出で給へらましかば、此宮の哀は、今少し勝りて思さるべし、故宮

吾妻○和琴
をあづまご
とといふ故
にかく言ひ
成せり

の御有様は、我々のやうなる餘所の人さへ、哀に戀しくこそ思ひ出でられ候へ、何とて其方は、然る遠き所には、年經給ひしぞ、

と言へば、浮舟、君は、白き扇を手探りつゝ、添ひ伏したる側目、いと隈なく白くて、艶めきたる額髪の際など、いと能く大君に似たるを、思ひ出でられて哀なり、況してかやうの琴などは、相應なからず、教へ成さばや、と、大將は思して、

(薰) 琴は少し彈き習ひ給ひたりや、あはれ吾妻といふ琴は、さりととも東國にて手馴し給ひけむ、

など問ひ給ふ、浮舟、君は、

(浮) その倭詞さへ相應なく習ひにければ、況してこの和琴は、習はむものを、それさへまだ、

楚王の臺の
 ○朗詠に班
 女閨中秋扇
 色楚王臺上
 夜琴聲とあ
 り
 扇の色も云
 々○班女は
 漢成帝が宮
 女にて初め
 寵ありける
 が後に寵衰
 へたるを詩
 人が白扇の
 夏に持て囀
 されて秋風
 起つと共に
 捨てらるゝ

と言ふ、いと片輪に後れたりとは見えず、こゝに於いて大將は、え思ふまゝに此宮に來ざらむことを思すが、今より困しきは、この女君を、普通には思さぬなるべし、大將は、琴は押遣りて、
 (薰) 楚王の臺の上の夜の琴の聲、
 と誦し給へるも、彼の弓をばかり引く、前司の邊に居馴れては、此宮の御様、いと愛甚く思ふやうなり、と、侍従も聞き居たりけり、然るは、さる荒々しき所にはばかり居て、扇の色も、心置きつべき閨の古意をば知らねば、彼の誦し給へる句を、偏に愛で申すぞ、後れたるなるめるかし、大將は心に、事もこそあれ、怪しくも不祥の詩を言ひつるかな、と、ふと後悔しく思す、辨、尼の方より菓子進れり、匣の蓋に、紅葉蔦など折り敷きて、由緒なからず取交せて、その下に敷きたる紙に、拙に書きたる歌、隈

に譬へて諺
 ひしなり

宿り木は云
 々○大君に
 はなけれど
 薫君の宿り
 給へば昔の
 心出て來ぬ
 るとなり
 里の名も云
 々○所は昔
 に變られど
 人は大君に
 あられば月
 も面變りし
 て見ゆると
 なり

なき月にふと見ゆれば、大將は目留め給ふ間に、これは辨、尼の菓子急ぎに、心も留めず遽に書き付けたるものとぞ見えける、
 (辨歌) 宿り木は、色變りぬる、秋なれど、昔覚えて、すめる
 月かな、
 と古めかしく書きたるを、大將は心に、女君の事をば耻かしくも、大君の事をば哀にも思されて、
 (薰歌) 里の名も、昔ながらに、見し人の、面變りせる、閨の
 月影、
 と、故意と返歌とはなくて言ふを、侍従ぞ辨方へ傳へけるとぞ、

○東屋

新編紫史卷九終

三百三十六

